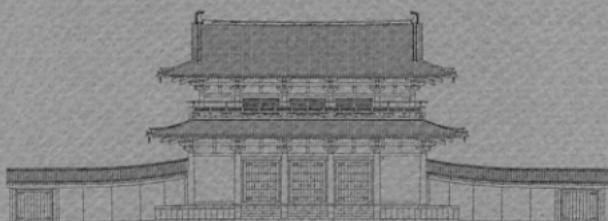


奈良国立文化財研究所年報

1994



奈良国立文化財研究所



平城宮一次第帳殿院地区1/100復原模型

(上)第一次大極殿 (下)模型全景

撮影 佃 幹雄

飛鳥寺1993-2次 講堂基壇北面（北東から 人は柱位置を示す）

撮影 井上直夫

石神遺跡第12次 調査区全景（西から）

撮影 井上直夫



藤原宮第71次 東方官衙の石敷 SX7632（西から）

撮影 井上直夫



左上 藤原宮第71次 東方官衙調査区全景（東から） 撮影 井上直夫

右上 藤原宮第72次 西方官衙地区の井戸 SE8061（南から） 撮影 井上直夫

下 本薬師寺1993-3次 東塔基壇まわりと西側にとりつく参道（北西から） 撮影 井上直夫



藤原宮第71-13次 藤原京左京十一條三坊（雷丘北方道路跡4次）の南庇付東西棟
SB2850（東から）
撮影 井上直夫



藤原宮第71-14次 藤原京左京十二条三坊（雷丘東方道路）の礎石建ち総柱建物
SB3030（南から）
撮影 井上直夫



藤原宮第74次 東二坊大路より藤原京左京七条三坊西南坪内を区画する南北屏をのぞむ（西から）
撮影 井上直夫



平城宮第241次 造酒司の
調査（西から）

撮影 牛嶋 茂



平城宮第241次 造酒司の
井戸 SE2966（南から）

撮影 佃 幹雄



平城宮第243次 東院地区
A期・B期の正殿（南から）

撮影 佃 幹雄



左上 平城宮第243次 東院地区官衙の北を区画する単庭 SC16200 (西から) 撮影 佃 幹雄

右上 平城宮第243次 東院南門 SB16000 (西から) 撮影 牛嶋 茂

下 平城宮第243次 東院地区的調査 (東北から) 撮影 佃 幹雄



左上 平城京第247次 顕塔 西調査区（北から）撮影 佃 幹雄

右上 平城京第242-19次 西大寺 碇石建物（北から）撮影 佃 幹雄

下 平城京第242-12次 西隆寺 南面回廊 SC650北側柱列（東北から）撮影 牛鶴 茂



飛鳥資料館展示棟増築部

分（北西から）

撮影 佃 幹雄



遺物解析・処理棟（南東

から）



資材保管加工棟の内部

目 次

| | |
|------------------|--------------------|
| 口絵 1 第一次大極殿院復原模型 | 5 平城宮造酒司 |
| 第一次大極殿 | 平城宮造酒司の井戸 |
| 模型全景 | 平城宮東院地区官衙の正殿 |
| 2 飛鳥寺講堂基壇北面 | 6 平城宮東院地区官衙を区画する単廊 |
| 石神遺跡 | 平城宮東院南門 |
| 藤原宮東方官衙の石敷 | 平城宮東院地区 |
| 3 藤原宮東方官衙 | 7 頭塔 |
| 藤原宮西方官衙地区的井戸 | 西大寺礎石建物 |
| 本薬師寺東塔基壇と參道 | 西隆寺南面回廊 |
| 4 雷丘北方遺跡南庇付東西棟建物 | 8 飛鳥資料館 |
| 雷丘東方遺跡礎石建ち純柱建物 | 遺物解析・処理棟 |
| 藤原京左京三条二坊西南坪 | 資材保管加工棟 |

| | |
|-----------------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 飛鳥地域の発掘調査 | 2 |
| 藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査 | 5 |
| 平城宮跡・平城京跡の発掘調査 | 15 |
| 飛鳥・藤原京地域における地区設定基準の改定 | 26 |
| 山田寺出土瓦の調査 | 28 |
| 藤原京の水洗式トイレ遺構 | 30 |
| 寄贈須恵器の紹介 | 31 |
| 平城京姫寺出土の二彩・三彩陶器 | 32 |
| 平城宮東大溝 SD2700出土金銀勝縁八角棒漆膜の顯微鏡観察 | 33 |
| 平城宮・京出土文字刻書土器資料 | 34 |
| 長屋王家木簡（2） | 35 |
| 1993年度平城宮跡・平城京跡出土木簡 | 36 |
| 石山寺校倉型敷の目録 | 38 |
| 法隆寺所蔵金属製容器の調査（1） | 42 |
| 滋賀県近代和風建築総合調査（2） | 44 |
| 古代ガラス遺物の材質－弥生時代のアルカリ珪酸塩ガラス－ | 46 |
| 飛鳥池遺跡出土金属製遺物における古代金工技法の研究 | 48 |
| 石村同定のための基礎資料の作成（1）－飛鳥・藤原京とその近辺地域－ | 49 |
| 年輪年代学（11） | 53 |
| 動物遺存体の調査（10） | 54 |
| 平城宮跡・藤原宮跡の整備 | 55 |
| 保存科学の新設施設 | 62 |
| 飛鳥資料館の新宮工事 | 64 |
| 平城宮小字門の再検討 | 66 |
| 平城宮第一次大極殿院復原模型の製作 | 68 |
| 平城宮第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査 | 73 |
| アンコール文化遺産保護に関する共同研究 | 74 |
| 交渉故城の調査 | 75 |
| 中国における秦漢代の瓦調査 | 76 |
| 中国との交流 | 78 |
| ヨーロッパにおける遺跡の再生・活用法の研究 | 79 |
| 公開講演会 | 80 |
| 調査研究業績 | 81 |
| 奈良国立文化財研究所要項 | 83 |

奈良国立文化財研究所年報 1994

発行日 1994年10月31日

編集・発行 奈良国立文化財研究所 担当 小林謙一・上原真人

印刷 日本写真印刷株式会社

表紙カット 平城宮朱雀門復原図

はじめに

今回おとどけする『奈良国立文化財研究所年報1994』は、当研究所の1993年度における活動状況の概要の報告である。

奈文研は、1952年4月、美術研究室・建造物研究室・歴史研究室・庶務室の4室、定員15名から出発した。調査と研究が進展するなか、1954年度からは学報と史料のシリーズの、1958年度からは年報の刊行がはじまつた。設立後42年経過したいま、研究所は3部・1館・1センター・2室、定員86名の機構となつてゐる。

創設当初の所員は、昨年度の鈴木嘉吉前所長を最後として、すべて退官された。その点からだけでも、奈文研は新しい時代をむかえた、といつてよいであらう。新しい時代への突入は、また、ここ数年の活動の内容の変化にもあらわれてゐる。

そのひとつは国際的な研究交流の活発化である。奈文研は、文化財の豊富な関西地域において実物に接するなかで保護行政に資する調査と研究を進める機構として設置された。それには変りはないが、設立以降蓄積してきた知識と経験、とくに建造物や遺跡など、不動産的な文化財に関するそれが評価され、国際交流のなかでその知識と経験を生かすことを求められているのである。昨年度53件にのぼつた所員の外国出張や海外から受入れた43名の研修員の人数にその一端があらわされている。5年前、1988年度では、外国出張3件、海外からの研修員は2名にすぎなかつたのである。

奈文研の調査研究は、設立当初に実施された「南都諸大寺の研究」にみられるように、美術史や建築史、庭園史、文献史、考古学など文化財を対象とする歴史関係の研究分野の、いまふうにいえば、学際的研究を大きな特徴としていた。それが現在の研究所の学風の基盤となってゐる。ここにも変化が加わりつつある。とくに自然科学系の研究分野との共同研究、あるいは、それとの境界領域における研究の進展である。今後の文化財に関する調査と研究を展望するとき、この傾向がいっそう強まり、從来からの調査研究にくわえて、それがこれからの研究所の進むべきひとつの方向になることは疑ひない。

1993年度には、平城宮跡で朱雀門と東院庭園の復原事業がはじまつた。景気浮揚のための補正予算として事業の着手が決定されたのだが、1978年に文化庁が策定した「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」通称「平城遺跡博物館構想」のうち、ほとんどが未着手だった遺構復原が本格化したのである。さらに、第一次大極殿跡地区復原のための調査研究も継続中であり、その復原事業の開始も近いことであらう。1959年に着手した継続的な発掘調査と1964年にはじまる整備、研究所が担当してきた平城宮跡における多様な事業もまた新しい段階をむかえたといつてよい。

この年報をご覧いただいて、新しい時代にたちむかいつつある研究所の多様な調査研究事業の一端をご理解いただき、今後かわらぬご指導とご支援、さらにご鞭撻を願つてやまない。

1994年10月

奈良国立文化財研究所長

田 中 琢

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1993年度に飛鳥地域では、飛鳥寺・川原寺・奥山久米寺・橘寺・石神遺跡・山田道・甘樅丘東麓など11件の調査を実施した（調査一覧参照）。このうち石神遺跡・飛鳥寺の調査概要を報告する。

1 石神遺跡の調査（第12次）

1991年度の第10次調査からは、飛鳥幼稚園（旧飛鳥小学校）の敷地を対象として発掘調査を実施してきた。今回はその3回目にあたる。石神遺跡のこれまでの調査で検出した遺構は、おおむねA期（7世紀中頃、齊明朝）、B期（7世紀後半、天武朝）、C期（7世紀末から8世紀初頭、藤原宮期）、D期（8世紀前半、奈良時代）の4時期に区分される。今回の調査では、A・B・Cの各時期とA期以前の遺構を検出した。

A期以前の遺構は石組溝3条（SD1840、1920、1930）、疊敷3面（SX1855、1885、1895）である。これらの遺構は、いずれも北で大きく東に振れる。A期遺構の下層で検出したものであるが、遺物に乏しくその正確な時期は決定しがたい。疊敷SX1855、1885、1895はそれぞれ南辺、東辺、南辺と東辺に長さ20cm前後の石をならべ見切りとしている。これらの疊敷は西に位置する飛鳥川に向かって、次第に低くなっていくように平坦面を構築したものと考えられる。

A期の遺構には、掘立柱建物4棟（SB1900A、1900B、1910、1940）、掘立柱塀1条（SA1705）、溝9条（SD277、297、1625、1713、1714、1850、1851、1860、1945）、石敷3面（SX1706、1709、1915）、疊敷3面（SX1875、1880、1890）がある。これらの遺構は重複関係や層位関係からさらにAa～Adの4小期に細分される。Ad期には、掘立柱塀SA1705を東の限りとしてその内部に桁行7間梁間3間の身舎の周囲に庇が巡ると推定される東西棟SB1900を置き、その外周に石敷SX1706、1709を巡らす。その後この石敷を厚く疊て覆い疊敷SX1875、1880とする。SB1900は当初桁行7間梁間3間の規模で建てられ（SB1900A）、のちに身舎規模は変えずに、四面に庇の巡る桁行9間梁間5間の建物（SB1900B）に建て替えられている。

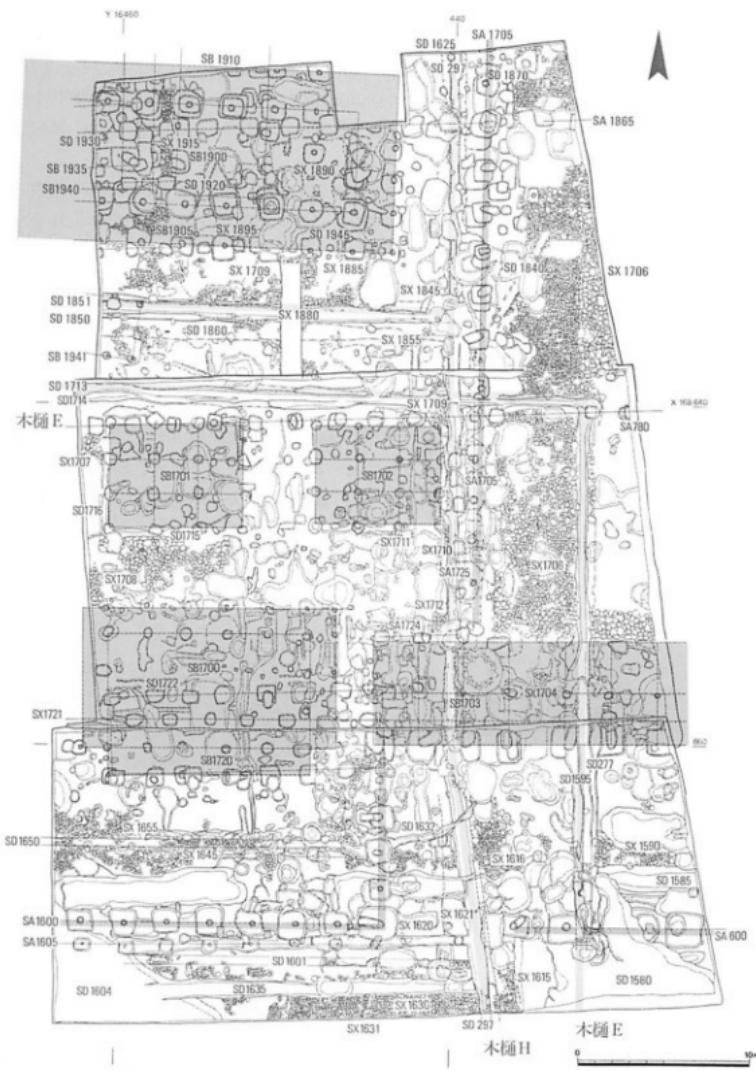
SD297、1625は水落遺跡から延びてきた木樋Hの抜取り溝とその据え付け掘方の溝で、さらに北へと調査区外に延びる。木樋Hは水落遺跡の漏刻台（水時計）北辺から90m以上延びていることになる。東西溝SD1850、1851は、今回新たに確認した木樋の据え付け溝とその抜取り溝である。SD297、1625との接合地点には、不整形土坑SX1845があり、これは木樋の会所にあった枠のような施設の抜取り穴と考えられ、凝灰岩を用いた痕跡がある。

B期の遺構は、掘立柱建物1棟（SB1935）のみである。C期では、掘立柱建物1棟（SB1905）、掘立柱塀1条（SA1865）があり、ともに北で西に2°振れる。なお出土遺物や埋土の特徴からこの時期に属すると考えられる土坑が多数ある。

出土遺物には土器、瓦、金属製品、石製品、土製品がある。土器では多量の須恵器と土師器のほかに施釉陶器や東国系の黒色土器、新羅土器が出土した。また、SB1900やSD1851を中心に赤褐色に焼けた壁土が多量に出土した。これらの壁土には白土が上塗りしてある。

これまでの3次にわたる調査で、石神遺跡西区画南半の様相がおおむね明らかになった。A期でも最後のAd期には、この区画の中心的な建物であるSB1900が営まれ、西区画の南部一体に石敷・疊敷をともなう建物群が配置されていたことが確認された。SB1900の中心は、SB1700の中軸線の延長線上にあたり、西区画の東辺（南北棟SB820の東側柱筋）および南辺（SB1700の南側柱筋）からそれぞれ35.4mに位置する。このことから、区画外周の東西規模を70.8mとすると、南北長（108m、北辺はSB1330の北側柱列）のはば3分の2に相当し、さらにSB1900Bはその中心が区画の南限から南北長

のほぼ3分の1の位置にくるように建てられている。このように、Ad期の西区画は規格性の高い計画的な配置のもとに造営されたことが理解できる。また、C期の石神遺跡の構造を考えるうえで重要な知見を得た。SA1865は今次調査区の東端から2間目の柱間が広く、第11次調査の知見と合わせ、この部分が中央間にあたるとすると、掘立柱塀で囲まれた区画は東西70.6m、南北70.6mの正方形を呈する。



石神遺跡調査遺構図（第10・11・12次）およびA期主要遺構 1:300

ると推定できる。70.6m四方の規模をもつことは、藤原宮東方官衙地区で確認した区画の規模（東西約66m、南北約72m）に類似し、何らかの官衙施設の存在を示唆しよう。

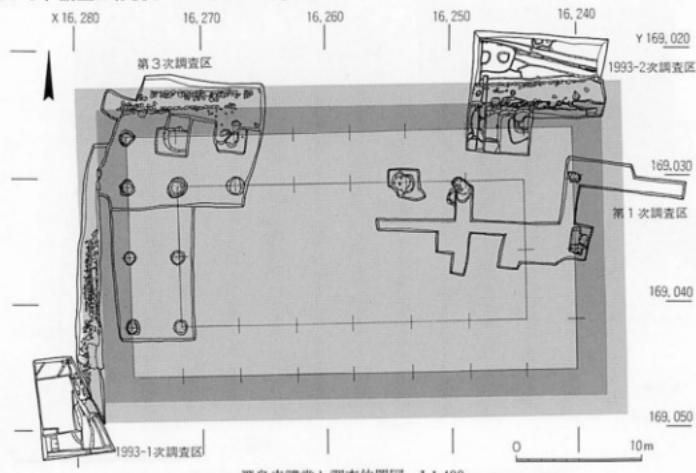
2 飛鳥寺の調査（1993-1・2次）

住宅改築と来迎寺の庫裡改築に伴い飛鳥寺講堂の基壇外周において実施した事前調査である。1956年の第1次調査、1957年の第3次調査により、講堂は桁行8間（総長35.15m・高麗尺100尺）、梁間4間（総長19m・高麗尺53尺）の四面庇付東西棟建物であることが知られている。基壇外装は花崗岩玉石積みで、その規模は東西43m、南北26m、高さ90cm、周囲には幅1.5mの石敷犬走りが巡る。また、基壇上では7個の花崗岩製礎石が確認されている。今回の調査では、講堂の中軸線が中心伽藍の中軸線に対して、西に1°33'44"振れるという見解の検証、講堂基壇について掘り込み地業の有無、基壇版築の状態を明らかにすることを目的とした。

基壇北辺東寄りの調査（1993-2次）では、基壇上で庇の東北隅から1間目と2間目の礎石の抜取り穴を検出した。犬走りSX878はきわめて良好な状態で遺存しており、講堂の中軸線が南門から中金堂の中軸線に対して西に振れていることを再確認した。犬走りの外側に雨落溝ではなく、雨水は自然に北方へ流れているものと考えられる。残念ながら今回の調査では基壇の東北隅は確認していない。断ち割り調査によれば、基壇は掘り込み地業がなく、古墳時代の包含層の上に暗茶褐色土と黄灰色微砂を交互に積み上げ築成している。基壇外装は花崗岩の玉石積みで、基壇築成後に基壇縁を削り、大型の石を平坦面を外に向けて1石立て、石と基壇との間に裏込めを入れる。なお、講堂西南隅犬走り部分（1993-1次）は、中世以降の破壊により、すでに旧状をとどめていないことが判明した。

遺物としては、基壇北側の厚い整地層を主体に、コンテナ430箱分の大量の瓦が出土した。飛鳥寺創建期の单弁蓮華文軒丸瓦の出土から講堂の創建も6世紀末～7世紀初頭としてよいであろう。軒丸瓦の大半を占めるのは複弁蓮華文XII、XIV、XVI型式であり、このことから奈良時代初頭に大規模な葺き替えがおこなわれたことがわかる。これに対して軒平瓦はごく僅かであり、講堂では創建以来一貫して軒平瓦を葺かなかったものと推定できる。さらに平安時代中期までは小規模な屋根の修理を行ないながら、講堂は存続していたことが瓦のありかたから知られた。

（次山 淳）



藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1993年度には、藤原宮跡内で7件、京跡内で13件の調査を実施した(調査一覧参照)。宮跡内の調査は内裏東方官衙地区の計画調査および宮西方官衙地区の事前調査のほかは小面積の事前調査である。京跡内では、本薬師寺跡の計画調査を継続して実施した。他は市道飛騨木之本線建設に伴う調査をはじめいざれも道路建設・住宅建設等に伴う事前調査である。

1 藤原宮跡の調査

東方官衙地区の調査(第71次)

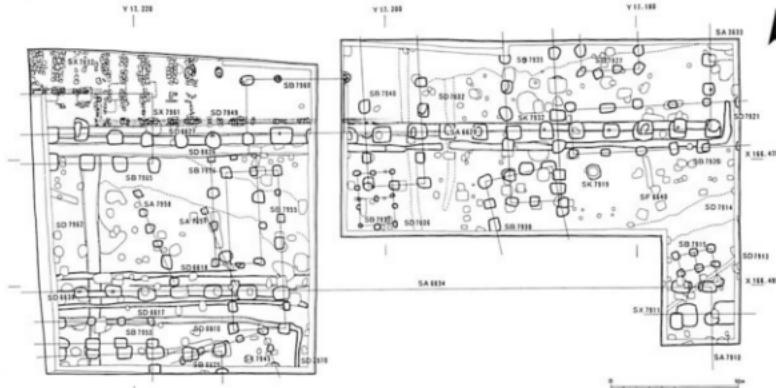
1987年度から、大極殿・内裏外郭の東方で継続的におこなってきた調査の一環である。これまでの調査で、内裏東外郭掘立柱塀 SA865と内裏東大溝 SD105の東側には、東西約66m、南北約72mの方形に掘立柱塀で区画された官衙が、南北に少なくとも3ブロック配置されていたことが判明している(以下、この区画を北から順に官衙A・B・Cとする)。

今回の調査では、官衙Bの区画の南辺および官衙Cの北辺の解明、官衙B・C間の宮内道路の様相の解明を目的とした。

検出した遺構は、古墳時代、7世紀中頃～藤原宮期直前、藤原宮期前半、藤原宮期後半の4期に区分される。古墳時代の遺構は、掘立柱建物3棟(SB7915、7930、7939)、掘立柱建物と推定される遺構1棟(SX7945)、掘立柱塀2条(SA7957、7958)、溝3条(SD7913、7914、7602)、土坑敷基(SK7919、7932など)がある。これらの遺構は北で西にかなりの振れをもつ。

7世紀中頃～藤原宮期直前の遺構には、掘立柱建物9棟(SB6625、7925、7927、7935、7940、7950、7955、7956、7965)、掘立柱建物と推定される遺構1棟(SX7911)、溝4条(SD6616、7606、7962、7970)がある。これらの遺構の方位は藤原宮期のものと較べて、北で西に若干振れる。今回の調査により藤原宮中枢部と宮内官衙造営の前段階に、この地域には多数の建物が建てられていたという知見がさらに補強された。特に、SB7950、7955、7965は重複関係をもつSD6616の出土土器の年代から、宮造営に関連する建物である可能性が高い。

藤原宮期前半の遺構には、掘立柱塀4条(SA3633、6629、6634、7910)、溝4条(SD6618、6626、



藤原宮第71次調査遺構図 1:400

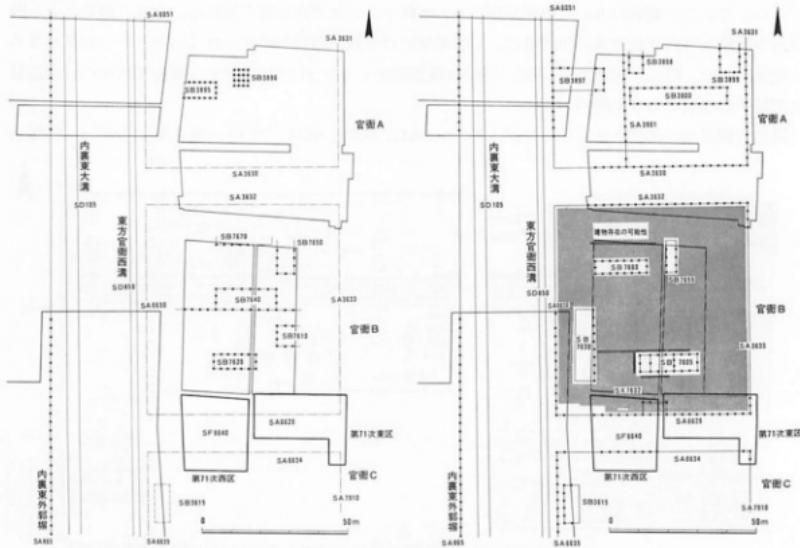
6627、6638)がある。SA6629、3633は官衙Bの南辺および東辺の区画塀、SA6634、7910は官衙Cの北辺および東辺の区画塀である。SA6629に改修の痕跡は認められない。東西溝 SD6627、6638は、SA6629、6634に先行しそれらと同じ位置に掘られた地割り溝。宮内道路 SF6640は官衙B・C間を東西に走り、その南北両側溝 (SD6618、6626) の心々間距離は約9.9mをはかる。

藤原宮期後半には、区画塀は踏襲されるが、建物の建て替えがおこなわれ、官衙Bでは区画内を石で敷きつめるという大改修がおこなわれている。掘立柱建物 SB7960はその中央間が官衙Bの東西中にあたることから、SA6629と一体の桁行3間梁間1間の門の可能性があるが、3間の目隠し塀であったとも考えられる。さらに、北接する第67次調査区より続く石敷 SX7632を良好な状態で検出した。石組溝 SD7949は SA6629の北雨落溝であり、官衙Bの東西中軸線から15.5m西で、北へ2.5m矩折れとなり、SA6629との間に石敷のない部分を形成する。

出土遺物は、藤原宮期および宮期直前の土器類が多量に出土した。また硯、緑釉壺、内面に漆の付着した須恵器壺も出土している。瓦は僅かであり、官衙B・Cに瓦葺きの建物の存在した可能性は薄い。木簡は7世紀中頃～藤原宮期直前の区画塀 SA6645の南雨落溝 SD6616の埋土から3点出土した。古墳時代の造構からは、古墳時代前期の布留式土器が出土している。

今回の調査により、第67次調査で検出した石敷を含めた造構が、藤原宮期後半に属することがほぼ確実となった。またその石敷の存在によって藤原宮の旧地表面の遺存を確認したことになる。

官衙Bの東辺を画する南北塀 SA3633は、今回の調査と第41次調査の知見から全長71.2mであることが判明した。柱間1間が9小尺(2.637m)となるので、27間に割り付けられていたものと推定される。官衙Bの南辺を画する東西塀 SA6629は、第58次調査の知見と合わせ、全長65.6m、1間9小尺(2.624m)として25間に割り付けられている。官衙Cの北辺を画する東西塀 SA6634の全長、柱間ともSA6629と同じである。したがって、官衙Bは南北71.2m、東西65.6mの範囲であったことが確定した。



内裏東方官衙の変遷 (左: 藤原宮期前半 右: 藤原宮期後半)

その区画内は、藤原宮期前に桁行7間梁間3間の東西棟SB7600を正殿として、その東妻柱列と柱筋を揃えて東南方にSB7610、東北方に南北棟SB7650、西妻柱列に柱筋を揃えて南方にSB7620、北方にSB7670を各々等距離で配置する。さらにSB7600の南側柱列の東西にとりつく掘立柱塀SA7644、7645によって区画内は北と南に2分されるなど、きわめて規格性の高い配置をとる。

藤原宮期後半には、区画塀は踏襲されるが区画の南4分の1の位置に桁行6間梁間2間の身舎に西庇のつく東西棟SB7605を正殿とし、北方に柱筋を揃えたSB7655、7660、SB7660の北方にさらに1棟（南雨落溝SD7675）の存在から東西棟の可能性がある）、西方に南北棟SB7630を配置し、区画塀の内部を石敷SX7632で舗装する。これらの構造はいずれも建物方位が北で西に振れる。このような官衙プロックの性格づけは今後の課題であるが、同様の位置関係にある平城宮内裏東方官衙のありかたとの比較も重要な手がかりとなろう。

西方官衙地区の調査（第71-2・72・73次）

宮西南部の宅地造成と市営住宅建替えに伴う事前調査である。これまでの周辺での調査同様、この地区における建物の存在は希薄である。建物の方位などから推定して、藤原宮期と考えられる遺構は、わずかに第72次調査で検出した東西棟SB656、7722およびSX8055があるにとどまる。

藤原宮期直前の遺構としては、第72次調査区で掘立柱建物1棟・井戸1基・道路1条を検出した。SB8060は、桁行3間梁間3間の総柱建物で、建物方位は北に対して西に1～2°振れる。井戸SE8061は、掘方が東西4.5m、南北4m、深さ3.2mをはかり、井戸枠の上段は抜き取られていて構造は不明だが、下段の井戸枠を良好な状態で検出した。井戸枠は、長さ236～240cm、幅55～63cm、厚さ4～4.5cmの板4枚を立て、内側で上下二段に横桟を納留めとし、外側も二段に藤蔓で縛って固定した構造である。北辺の側板外側の中央上寄りに「□信」の墨書がある。井戸からは完形品を主体とした多量の土器のほか、櫛・楕などの木製品、瓢箪、小動物の骨などが出土した。土器は藤原宮期直前に位置づけられる良好な一括資料である。

また先行条坊西二坊坊間路SF1082とその東側溝SD3318を検出した。SD3318は第7・69次西調査で検出した東側溝の延長上に位置するが、調査区南端から約5mのところで東へ直角に折れて東西溝SD8065となりその先へは延びず、SD8065も約9m続いた後途切れる。

ところで、第72・73次調査地は、弥生時代前期から古墳時代にかけて存続した四分遺跡の中心にあたる。下層では、竪穴住居、多数の柱穴や杭を打込んだとみられる穴、大小様々な平面形と規模をもつ土坑群、素掘りないしは大型の甕を利用した井戸などを検出した。また、第3次調査で検出した南北溝SD570、666および第10次調査で検出したSD1600の延長を確認している。

出土遺物には、大量の土器・石器・木器・骨角器・金属器などがあるが、なかでも注目すべきものに第72次調査で出土した重圓文鏡系の小型仿製鏡がある。全体の約4分の1ほどの破片ではあるが、弥生時代後期の時期に伴うものと考えられ、割れ口の一部には丁寧に研磨を施した痕跡がみられる。直径4.2cmに復原され、鏡背には鉢を中心に擬銘帯、櫛齒文帯、縁の順に文様を配している。この形式の鏡は、小型仿製鏡のなかでも最古の一例に属し、これまでに朝鮮半島と、日本では九州から大阪にかけて十数例が知られていたが、今回の発見によりさらに1例を加えるとともに分布域の東限を広げることになった。

また、第71-2次調査では下層において、古墳時代前期の水田跡を検出した。水田は南東から北西にのびる畔が基本的に通り、これに直交する畔で仕切る。水口は切られていなかった。水田の大きさは、3.5×4m、4×7mなどまちまちである。第59次調査で検出した弥生時代後期の水田と合わせ、当地域における水田の変遷を考えるうえで重要な知見を得たことになる。

（次山 淳）

2 藤原京跡の調査

左京七条二・三坊の調査（第74次）

市道飛騨木之本線の敷設工事にともなう事前調査で、予定路線は木之本町の集落から西へ向い、飛騨町へ繋がる。今回は木之本町から西へ東西210m分を調査した。調査面積は約2160m²である。調査地は左京七条三坊西南坪および同七条二坊東南坪に相当し、東二坊大路の検出が期待された。

遺構 検出した遺構は、東二坊大路とその両側溝、掘立柱建物9棟、掘立柱塀4条、井戸1基、樹状遺構1基、溝11条である。

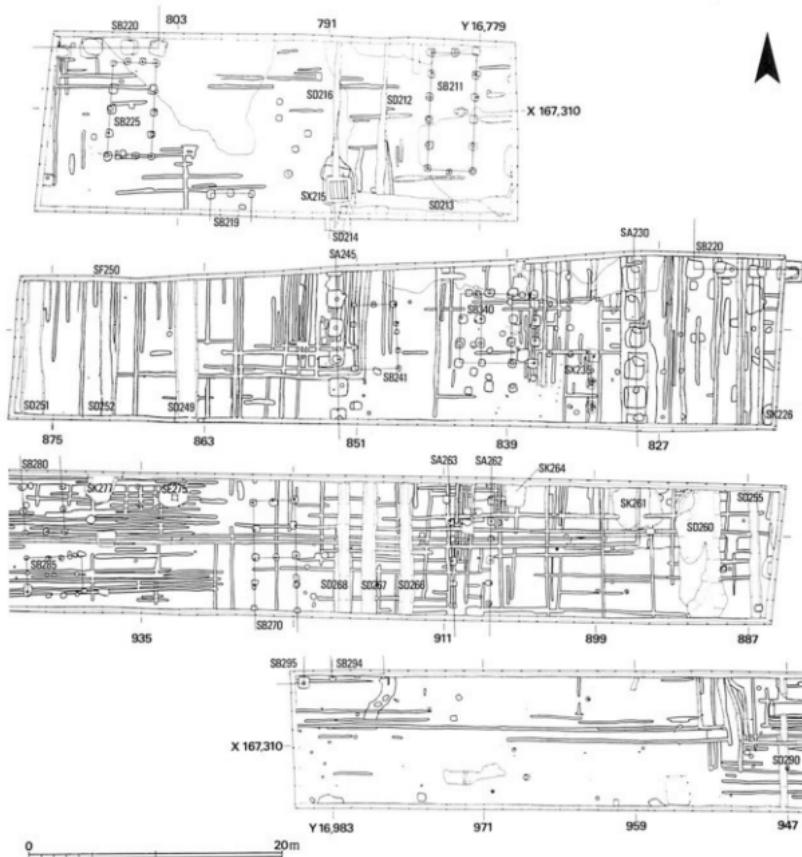
東二坊大路(SF250) 東二坊大路の東西両側溝を検出した。東西両側溝の心々距離は約12mで、東側溝(SD249)は幅1.85m深さ45cm、西側溝(SD251)は幅2.25m深さ0.35mである。両側溝とも溝内には黄灰色の砂が充満し、溝内では水が常に流れていたと考えられる。この両側溝間の中央でも両側溝に並行する南北溝(SD252)を検出した。この溝は幅1.50m深さ0.3mで、埋土が暗褐色の粘土で、両側溝とは状況が異なる。しかし、溝の位置が両側溝間のちょうど真ん中にあることから、条坊に関わる遺構である可能性がある。

左京七条三坊西南坪 この坪で注目されるのは、二重の区画施設を有することである。すなわち東二坊大路東側溝から約12m東に、1mを越える大規模な掘形を持った南北塀SA245があり、さらにSA245から24m東にも大規模な掘形を持った南北塀SA230がある。いずれも、柱間寸法は8尺等間で、5間分を検出し、さらに南北にのびる。このふたつの南北塀で東二坊大路の東の敷地を二重に区画したと推定できる。SA230の東側では東西に並ぶ大規模な掘形をもつ東西棟SB220の南側柱列を検出した。柱間寸法は8尺等間で桁行8間の東西棟と考えられる。発掘区の東ではT字形に流れる溝SD213、214、216と、その交点にある樹状遺構SX215を検出した。この溝は当初は幅1m深さ約0.6mのL字形の溝(SD213、214)で、東西溝SD213は発掘区東端で幅を増す。後に両溝をなれば埋め戻して浅くし、溝の交点に樹状遺構を作り、北へ抜ける細い溝SD216を掘り加える。樹状遺構SX215は内法1.4mの方形、深さ0.2mで、底に5枚の板を敷き並べ、底板上面の周囲に溝をきって側板を立てる。溝から水を引き込んで水を溜める施設と想像される。なお、溝および樹内からは飛鳥IV期を主体とした土器が出土している。この坪では他にも4棟の小規模な建物と根石状遺構(SX235)を検出している。

左京七条二坊東南坪 この坪では3棟の小規模建物、2条の南北塀、井戸1基、5条の南北溝を検出している。このうち南北溝(SD260)は幅2~3m深さ0.7mの大規模な溝で、藤原京造営直前の遺構と推定される。他にも4条の南北溝があるが、その性格は不明である。井戸(SE275)は、内法幅0.45mの方形に、横板を蒸籠状に組んだものである。

遺物 土器は飛鳥III期~V期の土師器・須恵器が出土し、瓦は東二坊大路西側溝から断片が少量出土し





藤原宮第74次調査遺構図

たのみで、全体的に遺物の出土量が少ない。

まとめ 今回の調査では、予想通りに東二坊大路検出した。その両側溝の心々距離は12mで、大路中央にある南北溝の性格が注目される。左京七条三坊西南坪は大規模な塀によって二重に区画され、内部には大規模な建物が建っており、この坪の性格は単なる宅地とは考え難い。今後この周辺の調査が期待される。なお、樹状遺構 SX215が藤原宮の時期に属するかどうかは微妙であるが、この坪の様相からして藤原宮期の施設と考えたい。左京七条二坊東南坪は遺構が希薄である。今後、今回検出した数条の南北溝の性格を検討する必要がある。

本薬師寺の調査（1993-3次）

本薬師寺では学術調査として一昨年に金堂基壇における予備調査、昨年には中門・南面回廊の調査を行っている。本年度は東塔の西南に、基壇を囲むようにL字形に307m²の発掘区を設け、東塔基壇の

検出を主目的に調査を行った。その結果、東塔の基壇規模・形式を確定し、東塔西面中央から西方に延びる石敷の参道と東塔南方に東西に広がる瓦溜りを検出した。

遺構 東塔基壇の遺存状況は良くない。基壇化粧はすべて抜取られていたが、基壇周囲の石組溝・石敷は一部の玉石を残す。基壇規模は地覆石の抜取り穴から14.2m四方と判明した。凝灰岩の破片が周囲から出土したので、基壇化粧に凝灰岩を使用したと推定される。南面と西面中央で階段地覆石の抜取り穴を検出したが、階段の幅および出は正確にはわからない。基壇周囲には玉石組の雨落溝がめぐり、基壇と雨落溝の間は石敷の犬走りとする。雨落溝は両側に玉石を立て、底にも玉石を並べる。幅約60cm、深さ約10cmである。西南部分では雨落溝が南へ抜け、南回廊北側溝へ流れ込んで塔周辺の排水を行っている。雨落溝の周囲にも石敷が広がり、全体として22m四方の方形に塔を取り囲んでいたと思われる。以上のような基壇の構成は平城京薬師寺西塔基壇の構成と等しく、規模も下表のごとく、近似値を示す。発掘区の東北隅で検出した参道は幅3.5mで塔心よりやや南へずれ、参道の南北縁に東西方向に玉石を一列に並べて、その間に玉石を敷き詰めている。

遺物 瓦は創建時のものが大量に出土した。6276A・6641Hの組み合わせが創建時の所用瓦で、小型瓦である6276E・6641Kの組み合わせも出土しており、これは裳階所用瓦の可能性がある。創建後の8世紀から9世紀にかけての瓦も出土している。土器は弥生から10世紀にかけての土師器・須恵器が出土した。その他に金属製品として金銅製垂木先金具・鉄釘・銅釘・銅環が出土した。

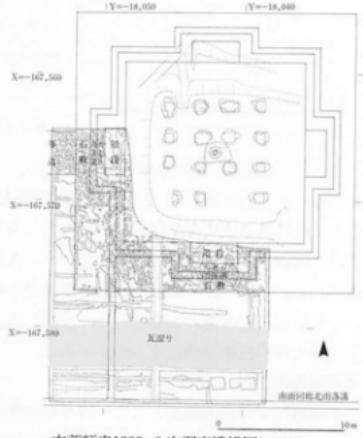
まとめ 今回の調査によって、東塔基壇の形式および規模が明確となった。遺構から裳階の有無は確定出来なかったが、小型瓦の出土したことにより裳階が存在した可能性が考えられる。創建時の瓦が大量に出土し、さらに創建以降も9世紀にいたるまでの各時期の瓦が出土しており、東塔は平城京遷都以降も当地に存在し、幾度か補修された可能性が高い。

| | 石敷規模 | 基壇規模 | 基壇高 | 犬走り幅 | 雨落溝幅 | 階段部分雨落溝（幅・出） |
|----------|----------|--------|-------|-------|---------|--------------|
| 本薬師寺東塔 | 22m四方 | 14.2 m | 1.45m | 約60cm | 約60cm | 5.8m・1.8m |
| 平城京薬師寺西塔 | 20.75m四方 | 13.65m | 1.4 m | 約60cm | 50～60cm | 5.0m・1.8m |

藤原本京薬師寺東塔・平城京薬師寺西塔基壇規模の対比



本薬師寺調査位置図 1:4000



本薬師寺1993-3次調査遺構図1:400

雷丘東方遺跡の調査（第71-9・10・14次）

当調査は県道樅原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事の事前調査として実施したものである。調査地は、「雷丘」に推定される「城山」の東側に位置し、藤原京左京十二条三坊・十一条三坊にあたる。当調査区の南において行った調査（第1次調査1970年・明日香村教育委員会の調査1987年他）では、7世紀～9世紀の遺構群を検出し、「小治田宮」と記した墨書き土器が井戸から出土している。そのため8世紀後半から9世紀の前半にかけての遺構は、小治田宮に関連するものである可能性が指摘されている。今回も7世紀～9世紀にかけての遺構群を検出した。3次にわたる調査総面積は1015m²である。遺構 検出した遺構は礎石建物2棟、掘立柱建物8棟、掘立柱塀5条、土壙状の高まり、大規模な溝3条、井戸3基、他に溝および土坑である。以下主な遺構を紹介する。

SB3030とSB3040はいずれも桁行3間、梁行2間の礎石建物で、2棟は西側柱を揃えて並ぶ。SB3030は桁行總長7.38m、梁行總長5.75mで、SB3040は桁行總長8.1m、梁行總長7.0mである。SB3030の礎石据え付け穴から8世紀後半の土器および、丸・平瓦の小片が出土しており、8世紀後半に建てられたと推定できる。SB3020は桁行9間以上、梁間2間で、柱間寸法は桁行・梁行とも8尺等間の掘立柱建物である。柱穴からは7世紀後半～藤原宮期の土器が出土している。SB3050は桁行6間以上で、柱間寸法が8尺等間の掘立柱建物である。柱穴からの出土土器および切り合い関係から、7世紀後半以降に建てられ、8世紀末以前に廃絶した建物と推定できる。

SE3090は内法寸法84cmの方形の井戸で、掘形の底に15cm角の角材を井桁に組み、井桁の四隅に納穴をあけて柱を立て、柱の外側に横板材を積む形式である。井戸最上層から出土した土器は平城宮土器編年V～VI期のものが主体で、その他にも桧皮が出土している。SD3100は幅6m、深さ30cmの溝で、6世紀末から7世紀前半の土器が出土している。SD3131は幅4.2m、深さ1.4mで、南側にある土壙状の高まり（SX3130）と併存する。溝内からは奈良時代末～平安時代初めの土器と瓦が出土している。SD3140は幅7.5m以上、深さ1.1mで、溝内からは7世紀後半から藤原宮期の土器が出土している。

SX3130は土壙状の高まりで、基底部の幅3.6m、上端部の幅2.3mの断面台形を呈し、東西方向に延びると思われる。桧皮が出土しており、桧皮葺の築地塀の基底部であった可能性がある。

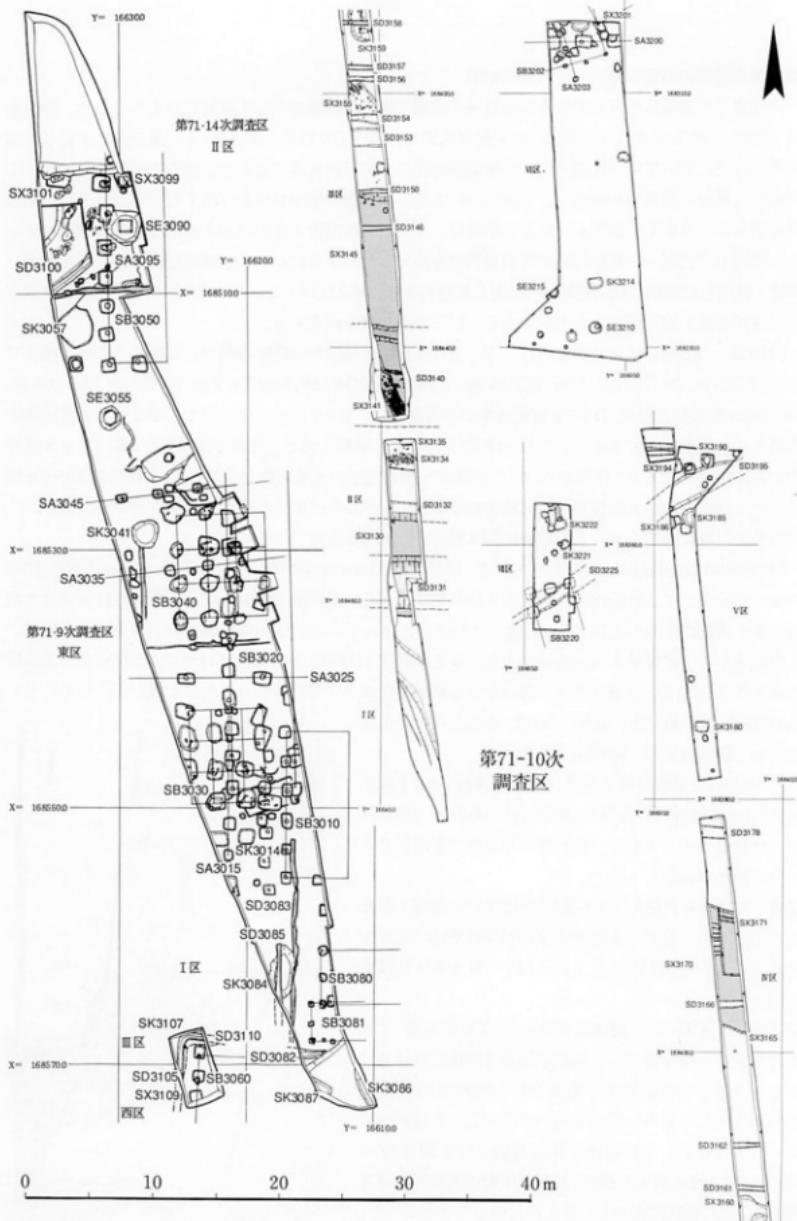
遺物 土器は6世紀末～9世紀にかけての土師器・須恵器が出土した。瓦の出土量は少ないが奈良時代の瓦が主流を占める。金属製品として釘・刀子・鎌・鍔・紡錘車が出土した。

まとめ 今回検出した遺構は大きく、7世紀前半期、7世紀後半期、8世紀後半～9世紀中頃の3時期に分けることができる。7世紀前半の遺構であるSD3100は掘削的な様相を示しており、推古天皇の小聖田宮との関連を検討すべきである。7世紀後半期の遺構としてSB3020・SB3050の2棟の長大な建物、発掘区中程で大規模な溝を確認したが、藤原宮期の十一条大路は確定できなかった。

8世紀後半～9世紀中頃の遺構であるSX3130およびSD3131は「小治田宮」の北限を画する施設である可能性



藤原宮第71-9・10・13・14次調査位置図 1:5000



藤原宮第71-9・10・14次調査遺構図 1:400

が高く、その敷地内に総柱の倉庫が建ち並んでいたこともこの地区を「小治田宮」とする傍証ともなり得る。今後のこの地域の調査成果が期待される。

左京十二条三坊の調査（第71-13次 雷丘北方第4次）

過去3次にわたる調査によって、雷丘北方遺跡では掘立柱塀で囲んだ区画内に、四面庇付の大型建物である正殿を中心として、その東・南・西側に桁行17間、梁間2間の長大な建物をコ字形に配置していることがわかった。なお、正殿は左京十二条三坊西南坪のほぼ中軸線上に位置している。これらの建物は7世紀後半に造営され、A1～3期・B期という変遷がみられる（昨年度報告）。今年度は東限区画塀の外側の様相の解明（第1区）と、南辺に位置する長大な東西棟建物SB2850の全容解明（第2・3区）を主目的に調査区を設定した。

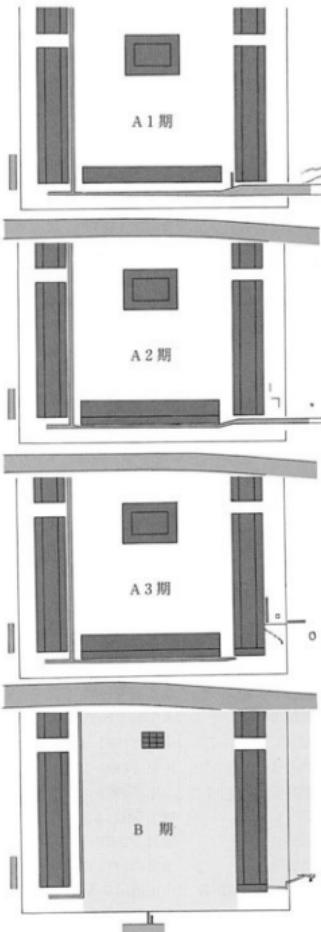
第1区の遺構 従来の時期変遷にしたがえば、A1期の遺構として東北東から西南西に向けて斜行する大規模な溝SD3240がある。SD3240埋没後のA2期の遺構として、木簡が出土した土坑SK3245があり、A3期直前に炭化物の混じる土によって、主に北半部を整地している。A3期の遺構としては井戸戸SE3250、B期の遺構としては石敷設施SX3255、石敷区画SX3256がある。

第2・3区の遺構 A期の掘立柱建物SB2850は昨年度の報告で想定したように、桁行17間、梁行2間の身舎に南庇が付く東西棟建物である。柱間寸法は桁行・梁行とも8尺（2.35m）等間、庇の出も8尺である。庇の柱は南雨落溝SD2730を石組溝に改修した時（A2期）の黄色粘土による整地に伴って立てられており、庇はA2期に付加されたことが判明した。したがって、A1期にはSB2850の南側柱列は両脇の南北棟SB2670・SB2830の南妻柱列と柱筋が揃っていたことになる。

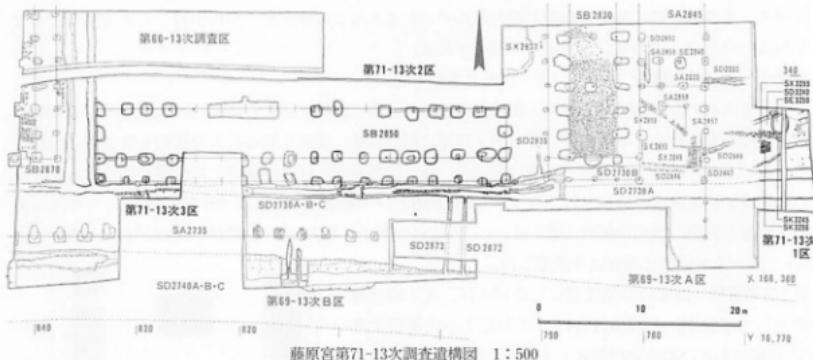
遺物 土器としては須恵器平瓶や土師器鉢類がめだち、全面に黒漆を塗った須恵器鉢も出土している。木製品としては全長7.5mの角材が出土した。材の上面には渡りあごの仕口があり、釘穴の位置からこの角材は柱間が8尺の建物の桁材であることがわかる。SB2850もしくは両脇の南北棟で使用した可能性がある。土坑SK3245からは表に「思惠和上三」裏に「祥□□」と記した付札木簡が出土している。

まとめ 掘立柱塀で囲まれた区画の東側には、井戸・石敷設施などが存在し、当遺跡がさらに東にのびることを確認した。SB2850の規模は昨年度の報告で想定した通りであることを確認し、南庇が創建後に付加されたものであることが新たに判明した。遺跡の性格は確定できないが、出土土器は上級階級が使用したものと思われ、出土木簡は仏教的色彩が強い。今後、遺跡の性格を検討する上で重要な資料となるであろう。

（島田敏男）



左京十二条三坊遺構変遷図 1:1500



| 調査地区 | 遺跡・次数 | 調査期間 | 面積 | 備考 | 調査要因 |
|-------------------|---------------|-------------------|---------------------|------------|----------|
| 6AJF-D | 藤原宮 第71次 | 93.4.6～93.8.4 | 1,100m ² | 宮東方官衙 | 計画調査 |
| 6AJL-B+C+D | 藤原宮 第71-1次 | 93.5.6～93.7.23 | 895m ² | 右京五条三坊 | 道路建設 |
| 6AJH-P | 藤原宮 第71-2次 | 93.4.13～94.5.17 | 280m ² | 宮西方官衙 | 宅地造成 |
| 6AJE-H | 藤原宮 第71-3次 | 93.4.26～93.4.28 | 27m ² | 右京二条一坊 | 個人駐車場 |
| 6AJE-R | 藤原宮 第71-4次 | 93.5.17 | 6 m ² | 宮北面外周帶 | 個人住宅建替 |
| 6RNG-H | 藤原宮 第71-5次 | 93.6.22～93.6.24 | 22m ² | 左京八条四坊 | 個人倉庫新築 |
| 6AJB-A | 藤原宮 第71-6次 | 93.8.2～93.8.9 | 100m ² | 左京四条四坊 | 個人住宅建設 |
| 6AJE-J | 藤原宮 第71-7次 | 93.9.16～93.9.17 | 30m ² | 宮北面外周帶 | 個人駐車場建設 |
| 6AMH-J | 藤原宮 第71-8次 | 93.10.21～93.10.22 | 15m ² | 左京十一條三坊 | 個人住宅建設 |
| 6AMH-E+F+N | 藤原宮 第71-9次 | 93.11.12～94.1.17 | 370m ² | 左京十二条三坊 | 道路拡幅 |
| 6AMH-C+D+E+J+K | 藤原宮 第71-10次 | 93.11.30～93.12.27 | 465m ² | 左京十一・十二条三坊 | 道路拡幅 |
| 6AKG-M+N | 藤原宮 第71-11 | 93.12.20～93.12.23 | 72m ² | 甘樅丘東籠 | 駐車場建設 |
| 6AMK-D | 藤原宮 第71-12次 | 94.1.10～94.1.12 | 73m ² | 甘樅丘東籠 | 登山道建設 |
| 6AMH-J | 藤原宮 第71-13次 | 94.1.10～94.4.7 | 434m ² | 左京十一條三坊 | 道路建設 |
| 6AMH-E+F | 藤原宮 第71-14次 | 94.1.24～94.2.28 | 180m ² | 左京十二条三坊 | 道路建設 |
| 6AJF-Q | 藤原宮 第71-15次 | 94.3.7～94.3.14 | 80m ² | 宮西方官衙 | 個人住宅擁壁工事 |
| 6AJL-E+F 6AJG-T+U | 藤原宮 第72次 | 93.8.5～93.10.28 | 1,030m ² | 宮西方官衙 | 団地建替 |
| 6AJL-E | 藤原宮 第73次 | 93.10.21～93.11.30 | 650m ² | 宮西方官衙 | 団地建替 |
| 6AWG-H+P | 藤原宮 第74次 | 93.12.1～94.3.24 | 2,368m ² | 左京七条二・三坊 | 道路建設 |
| 6EMY-D | 本薬師寺1993-1次 | 93.4.19～93.4.21 | 200m ² | 伽藍南方 | 水路改修 |
| 6EMY-C+J 6AWJ-M | 本薬師寺1993-2次 | 93.9.2～93.9.11 | 82m ² | 寺城内 | 下水道埋設 |
| 6EMY-D | 本薬師寺1993-3次 | 94.2.10～94.4.15 | 307m ² | 東塔基壇西南 | 計画調査 |
| 5EKH-C | 川原寺1993-4次 | 93.5.24～93.5.26 | 9 m ² | 南大門 | 個人住宅建替 |
| 5EKH-A | 川原寺1993-2次 | 93.12.7～94.1.27 | 83.5m ² | 電線等埋設 | |
| 5EKH-G | 川原寺1993-3次 | 94.1.13 | 1 m ² | 個人住宅増築 | |
| 5BTB-C | 橋寺1993-1次 | 94.1.26, 94.2.7 | 4.1m ² | 電線等埋設 | |
| 5RAS-A | 飛鳥寺1993-1次 | 93.5.31～93.6.8 | 36m ² | 講堂 | 個人住宅建替 |
| 5RAS-A | 飛鳥寺1993-2次 | 93.6.8～93.7.14 | 77m ² | 講堂 | 庫裡改築 |
| 6AMC-U+N 6MHI-F | 山田道第6次 | 93.7.9～93.7.30 | 282.5m ² | 計画調査 | 道路拡幅 |
| 6AMD-T+U | 石神遺跡第12次 | 93.7.26～94.1.19 | 730m ² | | |
| 5ZLK-F | 上ノ井手遺跡1993-1次 | 93.10.5～93.10.6 | 2.5m ² | 飛鳥資料館増築 | |

1993年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部発掘調査一覧

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

1993年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査は平城宮跡12件、平城京跡9件、京内寺院等7件である。以下に主要な調査の概要を報告する。

1 平城宮跡の調査

造酒司の調査（第241次）

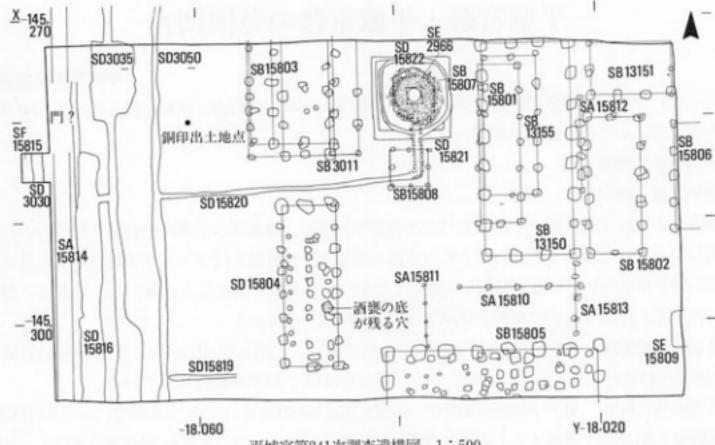
本調査区の北側ではこれまでに第22・182次調査を実施し、築地塀の区画内の井戸と建物群の存在が判明している。「造酒」「酒」と記された木簡・墨書き土器、甕据え付け穴を伴う建物跡が発見され、「造酒司」跡と推定されている。今回の調査でもその一連の遺構を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物11棟、掘立柱塀4条、溝9条、井戸2基で、3時期の変遷がある。

A 1期（奈良時代前半） 西側を築地塀 SA15816に区画される。南北棟 SB15801、東西棟 SB13151が建つ。南北溝 SD3035には、第22次調査区の井戸 SE3049からの排水が流れ込んでいた。

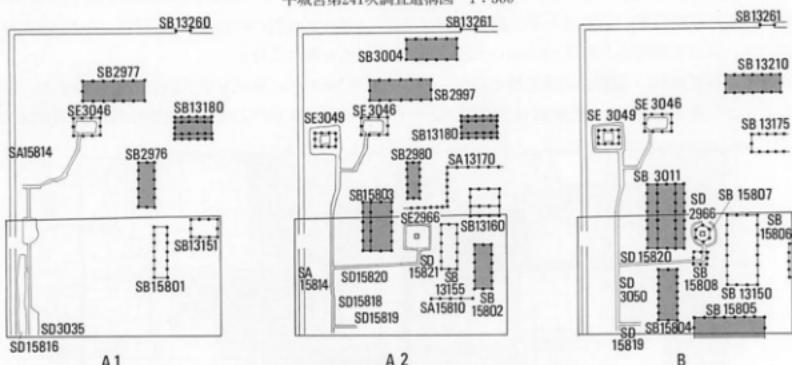
A 2期（奈良時代前半） 井戸 SE2966を掘り、東側に南北棟 SB13155と SB15802を置く。SB13155の南側は東西塀 SA15810で区画する。井戸の西側には甕据え付け穴を持つ南北棟 SB15803を置く。井戸の周囲の方形石組溝 SD15821はL字状溝 SD15820を経て、調査区西側の南北溝 SD3050につながる。この溝には、第22次調査区の井戸 SE3046・SE3049からの排水も流れこむ。

B期（奈良時代後半） 還都後の再整備の段階である。井戸 SE2966に井戸屋形 SE15807を付設する。屋形内には石敷を施す。この石敷には2時期が認められ、下層では井戸の周囲に円形の石組溝 SD15822





平城宮第241次調査遺構図 1:500



平城宮第241次調査遺構変遷図 ■は酒甕を伴う建物

をめぐらし石組に作り替えた南北溝SD15820とつなげるが、上層では溝を埋め井戸周囲をバラス敷にする。井戸屋形の周囲には楕円形雨落溝SD15822をめぐらし、SD15820につなげる。SD15820のL字状部分にSB15808を建てる。井戸の東側に桁行7間、梁間3間、10尺等間の南北棟SB13150が建つ。この建物は無庇で内部空間を広くとっている。その南には内部に4列の甕据え付け穴が並ぶ東西棟SB15806、井戸西側にやはり甕据え付け穴を伴う南北棟SB3011、その南に3列の甕据え付け穴が並ぶ南北棟SB15804が位置する。また、調査区東端で東西棟SB15806の西妻を検出している。

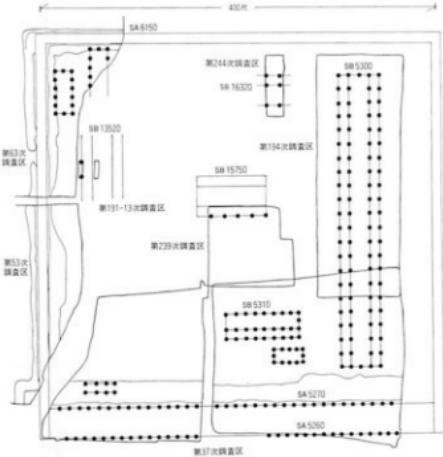
今回の調査でも造酒司の東限と南限は確定できず、東西60m以上×南北90m以上という破格の規模を持つ官衙であることが判明した。奈良時代前半には第22次調査区で検出した井戸SE3046・SE3049を中心とする建物配置をとるが、後半には今回検出した井戸SE2966を核とする配置に変化する。この井戸SE2966の井筒は、径約140cm。杉の一木をくりぬき、縦に3分割した後、据え付けの段階で再び合わせて設置している。井戸底にはバラスを敷く。井筒の周囲に方形板枠を伴う。北側の井戸SE3046・SE3049と比べ小規模だが、特殊な施設を伴い、建物群の中心位置を占め、特別な用途が想定される。

また、建物には据付堀を伴うものと伴わないものがあり、前者が醸造・貯蔵施設、後者が管理施設と考えられる。注目すべき遺物に調査区北西部出土の銅印がある(p.82)。酒甕封緘のための封泥用の印の可能性がある。

馬寮東方地区の調査（第239・244次）

第37・52・63・191-13・194次調査により、築地塀と掘立柱塀に囲まれた一郭の存在が判明している。今回の調査区はその内側部分にある。第239次調査区で東西棟礎石建物 SB14750、東西溝 SD15768、南北掘立柱塀 SA15769、第244次調査区で東西棟礎石建物 SB16320、池 SG16335を検出した。

建物は両者ともに布掘り状の掘り込み地業を行った後基壇を築いており、第37・194次調査で検出した SB5300 と同様の工法をとる。SB14750は側柱筋、入側柱筋、東妻柱筋部分を検出し桁行柱間14尺、庇の間10尺となり、SB5300の規模と一致する。また、SB01の北庇柱筋は SB5300 の北妻柱筋にそろい、この一郭の建物の計画的配置がうかがえる。この一郭の西面と北面を区画するのは第52・63次調査で確認された SA6150であり、南面の区画は第37次調査区の掘立柱塀 SD5260と考えられる。その場合、区画の南北長が400尺となり、一辺400尺の正方形の区画であった可能性もある。



馬寮東方地区区画復原図 1:1500

注目すべき遺物として、第239次調査区出土の黄釉六角小塔屋蓋片がある。

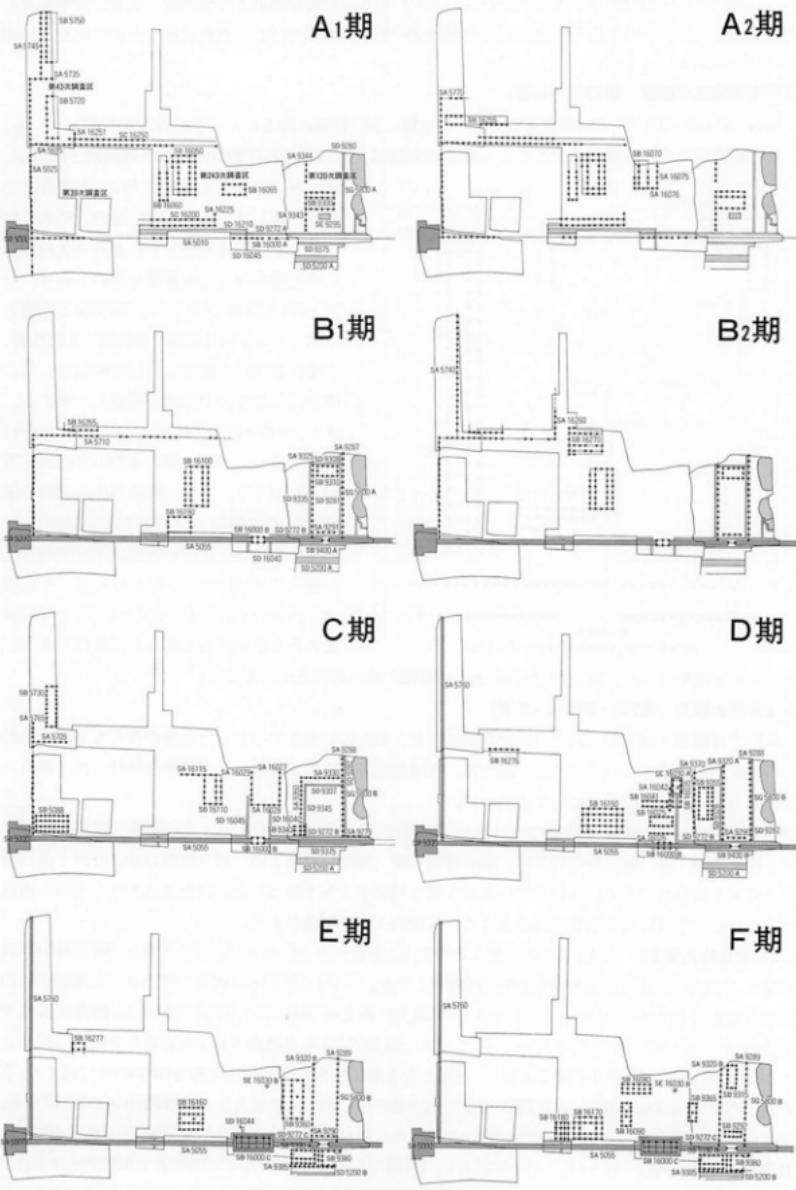
東院地区の調査（第243・245-1・2次）

東院では第39・44・99・110・120次調査により、東南隅の池を中心とした庭園の存在など東院南端の様相が一部判明している。今回の調査は、東院地区の整備にともない、宇奈多理神社の西・南方、園池北方・東面大垣部分について実施した。

宇奈多理神社西・南方地区（第243・245-1次） 奈良時代の遺構には南面大垣とその関連の雨落溝・暗渠、門1棟、道路1条、掘立柱建物17棟、礎石建物8棟、掘立柱单廊2条、掘立柱塀14条、井戸1基、石敷、溝・土坑多数がある。その他に、古墳1基と埴輪窯5基を検出した。調査区は大きく北区と南区に分かれる。奈良時代の遺構には大きくA～G期の7期の変遷がある。

A期(奈良時代前半) A 1・A 2 の小期にわかれる。南面を掘立柱塀 SA5010で区画し、棟門 SB1600A が開く。A 1期は、北方に SA5695を作り区画塀とする。この塀は第39・44調査で検出された東院の西の区画塀になる南北塀 SA5695にとりつき、その北方に南北棟 SB5750と SB5720が並ぶ。調査区西端で SA5695から SA16251が北へ2間のびる。しかし、SA16251はすぐ撤去され SA5695も单廊 SC16250とする。南区は南を单廊 SC16200で区画し、正殿となる南北棟 SB16050に南北棟 SB16060が付属する。東方に東西棟 SB16065が建つ。A 2期は、北区では SB5720・SB5750を撤去し、東西棟 SB16255を建てる。南区では SB16065を撤去し、南北棟 SB16070とそれに連結する掘立柱塀 SA16075・SA16076を建てる。

B期(奈良時代中頃) B 1・B 2 の小期がある。大規模な整地をおこなう。この時期まで東院園池は下層の SG5800A であったと見られる。B 1期は南面大垣築地塀 SA5055を築成し、門 SB1600B・SB9400A を



つくる。北区には東西棟 SB16265がある。北の区画の SC16250を掘立柱塀 SA5710に変える。南区では正殿を SB16050から SB16100に建て替え、南に SB16190を建てる。B 2期には、SA5710の東端を撤去し、北へ曲がる塀 SA16260を設ける。SB16190を撤去し、SB16100の西北に東西棟 SB16270を建てる。

C期(奈良時代後半) B期までの施設を大きく改変する。北の区画塀、建物は撤去される。同時に、東院の西の区画塀も SA5025から SA5065に替える。門 SB9400Aは撤去され、園池は SG5800Bに改修される。門 SB1600Bの北に道路 SF16115が伸び、その途中に SA16027～SA16029により「コ」字形の区画が形成される。その西方に南北棟 SB16110と付属する SA16115がある。

D期(奈良時代後半) 園池の西で、南面大垣に再び門 SB9400Bを開く。東院の西の区画は築地塀 SA5760に替える。門 SB1600Bの北に東西棟 SB16041・SB16025、塀 SA16026を建て、SB16150を建てる。その西に東西棟 SB16150を置く。SA16042の東には井戸 SE16030を掘り、石敷・石組溝を付設し、井戸屋形SB16503を建てる。ヒノキの板材を縦に20枚並べ円形の井戸枠とする。北区にはSB16276がある。

E期(奈良時代後半) 門を礎石建ちのSB16000Cに替える。SB16150はSB16160に、SB9355はSB9360に替える。北区に SB16277を建てる。

F期(奈良時代後半) SB16160を撤去し、SB16170・16180を建て、その東にSB16080・16190を建てる。

G期(奈良時代末～平安時代初頭) 門 SB16000Cと井戸 SE16030はこの時期まで存続する。小規模な建物を何度も建て替える。

今回の調査で東院の庭園西方の様相・変遷が明らかとなった。出土遺物からA・B期は恭仁遷都前、C期が平城遷都直後、D期が東院玉殿、E・F期が楊梅宮の時期と推定できる。奈良時代前半には単廊と塀で区画された細長い地区であり、SB16050や SB16100が中心的な建物となる。前者は桁行7間、梁間4間の四面庇付掘立柱建物、後者は桁行7間、梁間4間の礎石建物で、柱間は両者ともに10尺等間となる。両者とも規模は八省クラスの正殿に匹敵し、大規模な役所の存在が想定できる。奈良時代後半には建物配置が一変し、性格の変化が伺える。南面大垣に開くE期の門 SB16000Cは東院の張り出しをほぼ二分する位置にある。桁行5間、梁間2間の礎石建ちで凝灰岩で基壇化粧をする。同じ場所に先行する門 SB16000A・Bが規模の小さい掘立柱建ちで、SB16000Cの柱間も他の宮城門より小さいなど問題点はあるが、この門が宮城十二門の一つである可能性もある。東の棟門 SB9400は脇門的なものであろう。門の北にはバラス敷きの宮内道路が通り、北方の宇奈多理神社周辺に重要施設が存在した可能性がある。なお、東院地区南面大垣下層に先行する掘立柱塀を検出し、平城宮造営当初の東院の南面は、宮の北面・西面同様に、掘立柱塀で区画されていたことが確認できた。

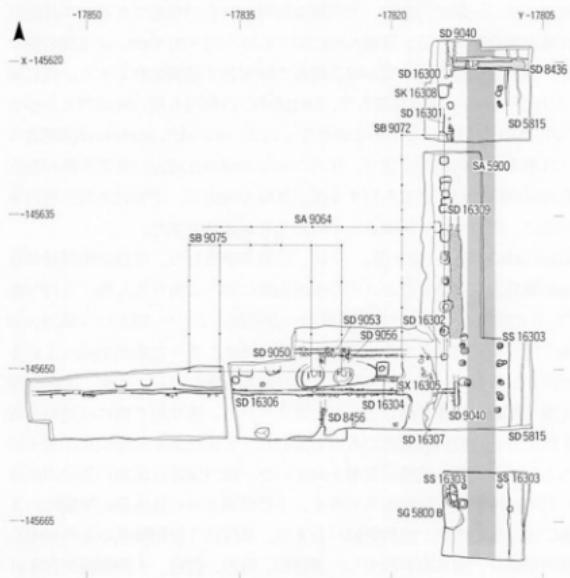
この他に、古墳時代の埴輪窯跡(窯体4基、灰原1基)、土坑、古墳を検出した。宇奈多理神社の丘陵南斜面の1号窯は一辺約4mの隅丸方形の焼成部と、その東西両側に伸びる張り出し部とを持つ焼成坑である。全長9.4m。焼成部北半では粘土を貼り付けた窯壁が一部残存していた。周囲には幅30～50cmほどの溝がめぐり、溝の内側の高い面を床面とする。東辺と西辺に焼きしまった床面が残っているが中央部は剥落し下部の置土が露出していた。張り出し部分に焼け面は存在しない。本来、天井施設を持たず焼成部に埴輪と燃料を置き開放の状態で焼き上げたと考えられる。張り出し部には通気の役割があったのかもしれない。床面近くから最終操業時のものと思われる5世紀前半の埴輪片が若干出土している。最終操業後は凹地となり、多量の埴輪が投棄されていた。他の窯体は床面が部分的に残るだけであったが窑窓と考えられる。時期は5世紀後半である。1号窯埋土からは多量の埴輪片、土師器、須恵器が出土した。埴輪には、器財埴輪、家形埴輪が含まれ、年代は5世紀後半のものが中心である。5号窯灰原からも多量の埴輪片、須恵器が出土し、器財形、盾形、動物、人物埴輪が含まれていた。年代的には、全体として1号窯埋土資料より下る。

園池北方・東面大垣地区（第245-2次） 第99・100次調査にはさまれた未調査部分の調査で、東院庭園の北側と東面大垣部分にあたる。検出した主要遺構は建物2棟、溝11条、土坑、東面大垣と東西雨落溝、木樋暗渠、大垣犬走り上の柱穴群である。遺構の時期は大きく大垣築造前、大垣築造時、大垣築造後に分かれる。大垣築造後の時期区分は、第110次調査の成果に準拠し、B～G期に分ける。

大垣築造以前 大垣の西側に先行する3条の南北溝SD16300～SD16302が走る。断割トレンチで部分的に確認したのみであり、SD16301とSD16302がつながる可能性もある。なお、東院東面に先行掘立柱塀は存在しない。

大垣築造時 東面大垣 SA5900の築造手順は以下の通り。まず、地山を幅5.7mの溝状に掘りこむ。掘り込みの深さは調査区北端で約1m、南端で50cm程度。掘りあげた地山の灰黒粘土と灰色砂を互層に積み、掘り込み地業とする。築地本体は黄褐色系の土を版築していく。築地の両側の犬走り部分は本体とは別に版築を行う。築地本体の幅は基底部で9尺、犬走り幅は各4尺となる。築地に沿って西雨落溝 SD9040と東雨落溝 SD5815を設ける。SD9040は石組溝同じ場所で作り替えがある。また、調査区の南では位置を東へよせる。木樋暗渠 SD8436は西雨落溝から大垣を横切り、東二坊坊間路西側溝 SD5870につながる。大垣掘り込み地業の終了後掘形を設け、底板3枚、両側板各1枚を組み合わせた木樋を設置する。そこに凝灰岩の蓋石をのせ、その上から築地・犬走り部分の版築を行う。大垣の東西犬走り上に柱穴列 SS16303がある。施工の際の寄柱、あるいは足場穴と考えられる。

大垣築造後 B期には下層園池導水溝SD8456に東西溝SD9050がT字状にとりつく。D期には南北棟SD9072が建てられたためSD9050の東を縮めSD9053に作り替え、東端を南北溝SD9056と東西溝SD16304によって南に移す。E期には、西雨落溝からSD16307、宇奈多理神社方面からSD16306が溜まり状遺構SX16305につながり、そこから後期園池導水路SD8455に水が流れる。池の北側には南北棟



平城宮第245-2次調査遺構図 1:500

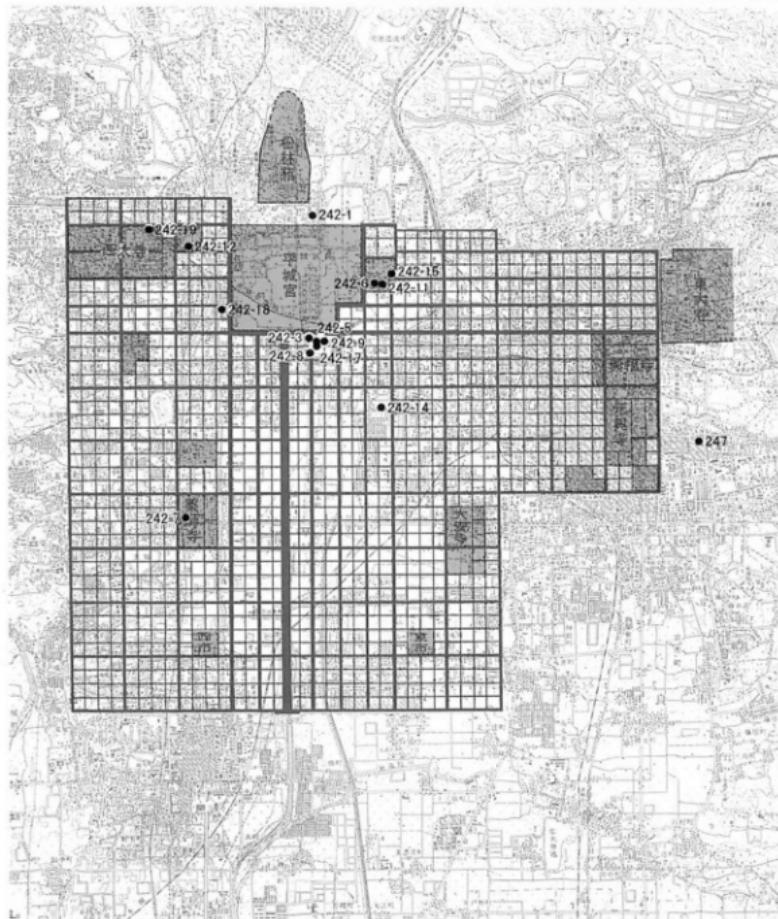
SB9075が建つ。F期になると東西埠 SA9064を設け、園池北方を区画する。

今回の調査により、東面大垣と関連施設の築造過程・位置・規模等が判明した。また、奈良時代後半の園池 SG5800B の導水施設を確認し、一部は東面大垣の西雨落溝から給水されていることが判明した。また、園池と北方の建物群との地盤の高低差については、特に段差などを設げず、徐々に傾斜をつけることによって処理していることが判明した。東面大垣についても、同様の処理を行っているものと思われる。

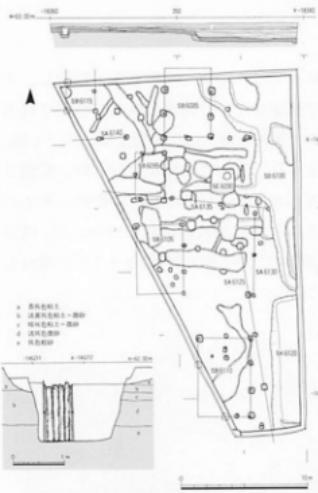
2 平城京跡の調査

左京三条一坊七坪の調査（第242-8次）

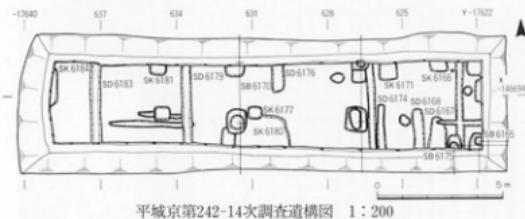
駐車場造成の事前調柾。道路をはさんで西側の第231次調柾結果ではこの地を宮外官衙と想定し、「大學寮」の可能性を指摘している。今回の調柾では、第231次調柾で確認した中心建物の東端が検出されることも予想され、調柾区の設定はそれに合わせて行ったが、掘立柱建物5棟、掘立柱塀4条、井戸1基、素掘溝数条、土坑数10基、河川旧流路1条を検出するにとどまった。建物は4棟が桁行3間、梁間2間以下の小規模な雜舎的なものである。調柾区東北隅で一部を検出したSB6115は庇付建物と考えられる。建物の時期は奈良時代後半を主体とする。井戸SE6090の井戸枠は11枚の板材をつないだ、径55cmの円形縦板組である。河川旧流路SD6100は埋土中に多量の遺物を含み、奈良時代後半ころに埋没し



1993年度 平城京・京内寺院等の発掘調査位置図 1:50000



平城京第242-8次調査遺構図 1:400
井戸 SE6090実測図 1:100



平城京第242-14次調査遺構図 1:200

南に位置する第145次調査区では宅地内を東西に区画する南北溝が検出されているが、今回の調査区までは延びていない。したがって、奈良時代初頭この宅地は、今回調査区と第145次調査区の間で南北に区画されていた可能性がある。

3 京内寺院等の調査

頭塔の調査（第247次）

頭塔の復原整備に伴う調査。これまで、第181・199・232・237次調査を実施している。今回の調査は北面第1段、第2段の石積解体修理に伴い、北面中央石仏西側と北面西端石仏東側の2ヶ所に調査区を設定し、平面検出と断面調査を行った。

これまでの調査で、現在の頭塔の内部に下層石積が存在し、それに伴う基壇上面の舗装にも石敷の時期（I期）と小礫敷の時期（II期）があることが判明している。今回の北面中央・西調査区でも同様の状況が確認された。石積みの高さは約90cm。上下の石をかみ合わせて積む工法を用いる。I期石敷は、30~40cm大の偏平な石を用いた幅1.95m前後の石敷と、その外側の約10cm低い面に巡る、拳大の石を用いた幅約25cmの外周石敷からなる。II期小礫敷はI期石敷の上に土をかぶせ5cm程度の小礫を敷いている。東面と同様、この小礫敷は、下層石積の基部まで到達しておらず、当初から小礫敷きが下層石積と連続していなかった可能性がある。北面中央調査区では、下層石積の仏龕の検出が予想

ている。建物SB6085は流路埋没後に建てられている。

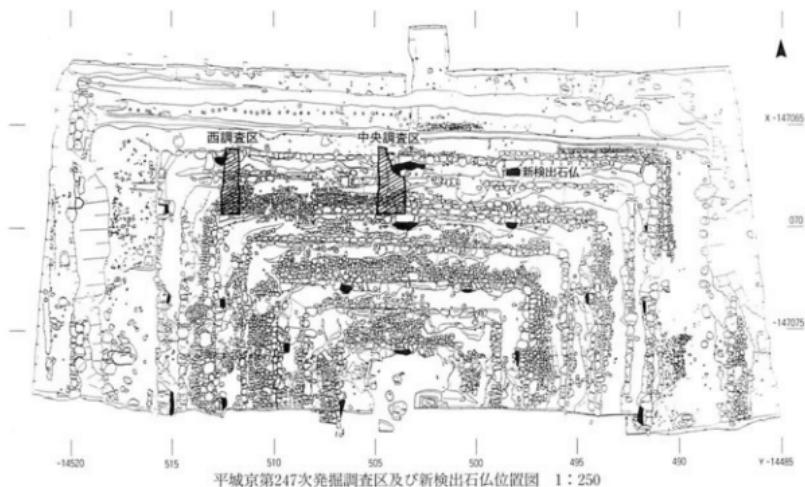
出土瓦堀、土器は奈良時代後半のものが主体で施釉瓦・刻印瓦と墨書き土器が見られる。また、土坑SK6120から土馬21片が出土し遺構の性格が注目される。金属製品としては、井戸SE6090の井戸枠内最下部から萬年通寶（760年初鋸）1点が出土した。

今回調査区は建物密度が低く、大型建物が少ない点で第231次調査区と共に両調査区が一体となって機能していたと考えられ、貴族の邸宅とは様相が異なる。墨書き土器が比較的多い点などからも、宮外官衙的なものと想定できる。

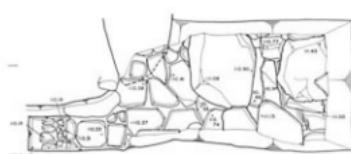
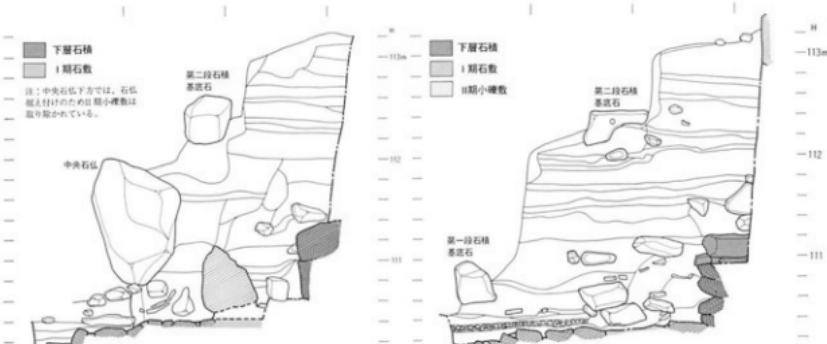
左京四条二坊十五坪の調査（第242-14次）

共同住宅建設に伴う事前調査。調査地は坪の西北隅に位置し、藤原仲麻呂宅である田村第推定地に含まれる。今回調査区には条坊部分は含まれていない。検出した主な遺構は掘立柱建物3棟、土坑13基、南北溝6条である。調査区中央部南縁で検出したSK6180は径2.2mの円形土坑で、南半は調査区外に伸びる。埋土中より平城宮IIの土師器・須恵器とともに、型作りで長梢円形の特異な土師器が出土している。SB6170は桁行2間以上、梁間2間の掘立柱建物。桁行は8尺等間。出土土器から奈良時代後半に比定できる。

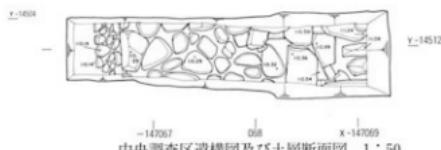
されたが、石積前面を検出したのが調査区最奥部であったため、有無を確認できなかった。上層の石積は石をかみ合わせたり支い石を用いたりせず、石を置いた後その上面に土を敷きならし、たたきしめた後に次の石を置くという手法を用いている。上層頭塔の積み土は、灰褐色粘質土と赤褐色粘土(小砂疊混)を交互につんだ版築である。ところどころに石や瓦が入る。



平城京第247次発掘調査区及び新検出石仏位置図 1:250



西調査区遺構図及び土層断面図 1:50



中央調査区遺構図及び土層断面図 1:50

遺物はII期小蹀敷上面や上層頭塔積み土から東大寺と同範の軒瓦（軒丸瓦6235M・軒平瓦6732F）や土師器・須恵器片などが出土している。

今回の調査でも上層頭塔に先行する下層石積みと石敷・小蹀敷を検出した。この結果、下層石積が上層頭塔と同様に正方形の平面を持つことが確実となった。下層石積第1段は一辺約21.5~21.6m(72尺)の正方形と推定でき、上層頭塔第1段の一辺約24.5m(82尺)よりも一辺が2.9~3m(10尺)短い。また、下層石積も上層と同様の塔をなし、瓦が葺かれていたと見られる。なお、北面第1段中央石仏から5.1m東であらたに石仏を検出した。

西隆寺旧境内の調査（第242-12次）

事務所ビル建設に伴う事前調査。西隆寺については、これまでの調査で、金堂、塔、東門、東西・北面回廊、寺域東北地区の様相が明らかにされ、縄文時代、古墳時代など西隆寺造営前の遺構も検出されている。今回の調査区でも古墳時代以後の遺構が検出された。今回の調査では古墳時代の遺構として、柵列・斜行溝数条、西隆寺造営前の奈良時代前半の遺構として、掘立柱建物2棟・井戸1基を検出した。井戸SE649は井戸枠はほとんど抜き取られていたが径2mの円形掘形を持ち、底には径30cm程の曲物を据える。蹄脚觀を含む平城宮IIIまでの土器や瓦が出土している。西隆寺の遺構は、造営に伴う整地土上で検出した。調査区南端で南面回廊SC650・北側柱列の礎石据え付け掘形の3基2間分を確認した。柱間は10尺等間である。基壇土・掘り込み地業は認められない。残存する掘り込みの深さが5cm前後と遺存状況は悪い。また、SK651は造営に伴うゴミ捨て穴と考えられ、鉄釘、鉄鎌、砥石などが出土した。この他、西隆寺廃絶後の瓦溜りSK652~SK658を検出した。

今回検出した西隆寺の南面回廊の桁行柱間は、桁行10尺・梁間8尺の柱間寸法をとる複廊である東



面・北面回廊と一致することから、南面回廊も同様の規模・構造をとることがほぼ確実となった。

西大寺旧境内の調査

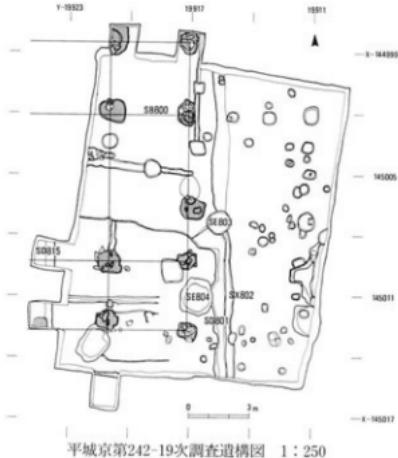
(第242-19次)

共同住宅建設に伴う事前調査。調査区は西大寺創建時の伽藍中心部の北東に位置する。基壇建物1棟、近世の野井戸2基、中世の柱穴数基などを検出した。基壇建物SB800の基壇は、地山の低い調査区南半部では掘り込み地業を行った後に土を積み上げて築成しているが、地山の高い北半部では地山を削り出すことによって形成する。基壇上に礎石据え付け掘形・抜取り穴・根石を、基壇東端で基壇化粧抜取り痕跡を検出し、東西棟建物の東妻4間分、桁行2間分を確認した。ただし、東妻中央部分は遺構の残りが悪く、柱位置を

明確にしがたい。規模は東妻が12尺等間相当、桁行き柱間が13尺、基壇の出は東に6尺となる。掘り込み地盤中より奈良時代の土器・瓦が、礎石抜取り穴から中世の羽釜が出土していることから、この建物は奈良時代に創建され、中世には廃絶したと見られる。

今回の調査区は西大寺旧境内の北端に位置する。これまでの復原案によると、この位置には食堂院の西側を限る築地塀が想定されており、今回検出した遺構と合致するような建物は存在していない。また、伽藍内の基壇建物のなかで、門や回廊にあたるとは考えにくい状況である。あるいは、ひとつの可能性として僧房を想定することもできるであろう。

(白井 熊)



平城京第242-19次調査構造図 1:250

| 調査地区 | 遺跡・次数 | 調査期間 | 面積 | 備考 | 調査要因 |
|-------------------|--------------|-------------------|---------------------|-----------------------|-----------|
| 6ACP-M | 平城宮 第239次 | 93.4.1~93.4.28 | 560m ² | 馬寮東方地区 | 計画調査 |
| 6ADD-P 6ALP-K | 平城宮 第241次 | 93.4.4~93.6.30 | 2,200m ² | 造酒司 | 計画調査 |
| 6ABN-F | 平城宮 第242-2次 | 93.4.12~93.4.15 | 21m ² | 平城宮内 | 個人住宅建設 |
| 6AAB-B | 平城宮 第242-4次 | 93.5.10~93.5.20 | 82m ² | 内膳司 | 個人住宅建設 |
| 6ALD-G | 平城宮 第242-10次 | 93.10.19~93.10.20 | 20m ² | 平城宮東辺 (東二坊坊間路) | 個人住宅建設 |
| 6ALB-L 6AFC-G | 平城宮 第242-13次 | 93.12.9~93.12.10 | 75m ² | 平城宮東辺 (東二坊坊間路) | 河川改修 |
| 6ALF-A+B 6ALS-C+D | 平城宮 第243次 | 93.6.14~93.12.15 | 3,500m ² | 東院 | 計画調査 |
| 6ACP-N | 平城宮 第244次 | 93.12.1~93.12.21 | 110m ² | 馬寮東方地区 | 計画調査 |
| 6ALF-A+B 6ALS-C | 平城宮 第245-1次 | 93.10.1~94.3.3 | 1,000m ² | 東院 | 計画調査 |
| 6ALF-B | 平城宮 第245-2次 | 94.1.10~94.3.17 | 620m ² | 東院庭園・東面大垣 | 計画調査 |
| 6ASB-C | 平城京 第242-1次 | 93.4.5~93.4.7 | 27m ² | 平城宮北方 | 個人住宅建設 |
| 6AFJ-R | 平城京 第242-3次 | 93.4.20~93.4.23 | 24m ² | 左京三条一坊八坪 | 個人住宅建設 |
| 6AFJ-H | 平城京 第242-5次 | 93.7.5~93.7.12 | 99m ² | 左京三条一坊九坪 | 共同住宅建設 |
| 6BFK-I | 平城京 第242-6次 | 93.7.12~93.7.22 | 72m ² | 法華寺旧境内 | 個人住宅建設 |
| 6BYS-O | 平城京 第242-7次 | 93.7.26~93.7.30 | 80m ² | 藥師寺旧境内 | 仏像修復作業所建設 |
| 6AFJ-O | 平城京 第242-8次 | 93.9.6~93.10.20 | 350m ² | 左京三条一坊七坪 | 駐車場造成 |
| 6AFJ-H | 平城京 第242-9次 | 93.10.1~93.10.6 | 18m ² | 左京三条一坊九・ 十六坪(坪境小路) | 個人住宅建設 |
| 6BFK-I | 平城京 第242-11次 | 93.11.15~93.11.22 | 36m ² | 法華寺旧境内 | 個人住宅建設 |
| 6BSR-O | 平城京 第242-12次 | 93.11.24~93.12.27 | 300m ² | 西隆寺旧境内 | 事務所建設 |
| 6AFM-G | 平城京 第242-14次 | 93.12.16~94.1.10 | 120m ² | 左京四条二坊十五坪 (田村第) | 共同住宅建設 |
| 6AFJ-J | 平城京 第242-15次 | 94.1.20~94.2.4 | 44m ² | 法華寺旧境内 | 個人住宅建設 |
| 6AFJ-G | 平城京 第242-17次 | 94.2.3~94.2.4 | 10m ² | 左京三条一坊九坪 | 個人住宅建設 |
| 6AGC-F | 平城京 第242-18次 | 94.2.8~94.3.1 | 280m ² | 右京二条二坊三坪 | 職員宿舎建設 |
| 6BSD-H+I+S+R | 平城京 第242-19次 | 94.3.8~94.3.30 | 187m ² | 西大寺旧境内 | 共同住宅建設 |
| 6BZT-A | 平城京 第247次 | 93.12.9~94.3.15 | 6m ² | 頭塔 | 復原工事 |

1993年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

飛鳥・藤原京地域における地区設定基準の改定

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

藤原宮跡発掘調査部では、調査時における小地区設定作業を簡易化し、さらに将来の遺構・遺物のコンピュータ処理への対応を目的として、従来の地区設定の見直しを行ない、新たな地区設定基準を設定した。なお、新たな地区設定基準は1994年4月1日より有効とする。

1 従来の地区設定と問題点

従来の地区設定は条里畦畔を基準としている。大地区はおよそ南北約375m、東西約630mとして、ひとつの大地区内に、南北6~8区画、東西3区画の中地区を設定している。大地区は4つの大地区群からなり、藤原宮城を包括する南北6大地区、東西3大地区の計18大地区を6AJとし、その周囲を取り囲む22の大地区を6AWとする。その南の南北5大地区、東西5大地区を6AM、さらにその南の東西5大地区、南北5大地区を6AKとする。寺院については上記の大地区に重複するものについても独自の大地区を設定している。

調査部開設当時の発掘調査は畦畔を尊重した水田単位で行っており、上記の設定方法が便利であった点は否めない。しかし、条里畦畔が藤原京の条坊とは無関係であり、都市化の進行や宮跡内における整備事業により水田が消滅しつつある。また、道路敷設や大規模開発事業等の事前調査で、畦畔に規制されない調査も増加し、畦畔による地区設定が無意味と化しつつある。また、地区を設定した地域の外側でも、藤原京に関わる遺構が検出され、桧隈寺跡・坂田寺跡など飛鳥南方の重要遺跡群も設定外にあった。そこで大地区を拡大設定する必要あるが、6Aを冠する未使用の大地区名が不足している。さらに、小地区設定の際には中地区ごとに水田の隅を基準に小地区を設定しているために、中地区によって小地区的グリッドにずれが生じたり、新たな小地区設定の際には、近辺の地区設定を調べる煩雑な作業が必要であるなどの問題点があった。

2 新地区設定基準の方針と方式

基本方針 前述の問題点を解決すべく、以下の基本方針に沿って新地区設定基準を定めた。従来の大地区・中地区の配列を尊重し、新旧地区名の相違を最小限にとどめる。大地区・中地区的規格を統一し、各境界を国土方眼座標で定める。従来、地区に設定した地域の外側にも新たに地区を設定し（図中で濃いアミをかけた部分）、さらに広い範囲を包括する。

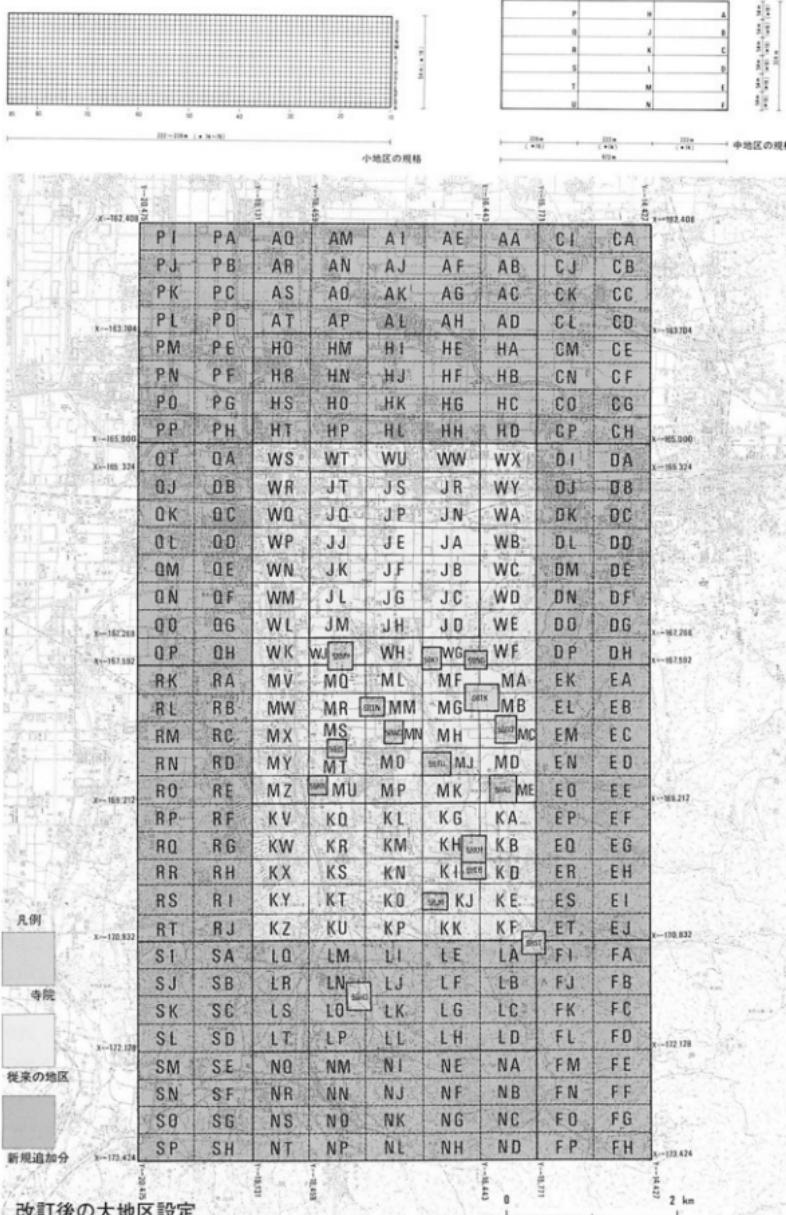
大地区 大地区の設定範囲を拡大する。東西672m、南北324mを基本単位とする。全ての大地区記号の1桁目を6から5に改める。ただし出土瓦の型式番号には反映しないものとする。大地区を境界する座標の基点は5AJE、5AJF、5AJJ、5AJKの4地区の交点（国土方眼座標：X=-166,296 Y=-17,787）とする。地区名は図の通りで、寺院以外の大地区記号には、すべて5Aを冠する。

中地区 大地区内を東西3列、南北6列に分割し、東北隅から順にアルファベットを付す。ただし、アラビア数字と混同しやすいG、I、Oは使用しない。南北長は各中地区とも54mとし、東西長は東との列の区画を222m、西の列の区画を228mとする。

小地区 各中地区的東南隅を基点として3m方眼を設定する。東南隅をA-10とし、北へA~R、西へ10~83もしくは85の番号を使用する。

寺院 以上の地区の他に、寺院については固有の大地区を設定する。大地区名は従来の地区名を踏襲する。なお、従来あった小聖田宮（5AOH）と見瀬丸山古墳（4PMN）は廃棄する。中地区および小地区は上述の中・小地区的設定を優先する。そのため寺内での中地区はAから順に付けられる訳ではなく、一部では中地区名が同じでも大地区名が異なることとなる。

（島田敏男）



山田寺出土瓦の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

当調査部では1976年から8次にわたって桜井市山田にある山田寺跡を発掘調査し、東回廊が倒壊した状態でみつかるなど多大な成果をあげた。現在、その報告書を作成中である。山田寺は蘇我倉山田石川麻呂が舒明13年(641)に発願、創建した寺院であり、石川麻呂自身が造営途上の大化5年(649)に仏殿の前で自害したことでも知られる。伽藍の完成は天武朝のことだったという(『上官聖徳法王帝説裏書』『日本書紀』)。今回は、軒丸瓦、軒平瓦、へら書き瓦に関する調査成果の中間報告である。

軒丸瓦 山田寺式、大官大寺式、平城宮式のほか鎌倉時代初頭の巴紋がある。出土量の大半は山田寺式である。紋様(瓦範)の違いで6種(A~F)に分かれるが、同範品でも製作技法によって細分することができる。これを文献の記録と対比しながら解釈すると、次のように考えられる(図1)。

まずA種は分布から金堂所用である。その範囲進行順に、瓦当に接合する丸瓦部先端の加工をみると、片柄形(凹面と先端斜めからの二つのカット:断面U)→楔形(先端斜めからのカット:断面V)→末加工(断面W)と変遷する。片柄形が大半を占める。金堂は皇極2年(643)建立、石川麻呂自害までに完成しているので、丸瓦部先端片柄形加工のA種はそれ以前の製作であろう。B種は塔所用、D種は回廊所用である。B・D種の丸瓦部先端の加工はとともに片柄形に限られるので、2種の製作年代は金堂完成に近い時期といえる。ところが、塔の完成は記録では天武5年(676)である。B種の製作は塔の完成よりもかなり先行していた。B種の丸瓦部先端の二つのカット面は幅が広く、A種とは明確に区別でき、D種のカット面の幅はA・B両種の中間値といえる。したがって、3種のカット面の幅の差は、製作時期の微妙な差を示す可能性が高く、A→D→Bの順に製作されたと考えられる。

B種の紋様をまねたC種はその分布から塔と宝藏所用である。丸瓦部先端の加工は楔形が主体であるので、天武朝の造営再開後に不足分をC種で補って塔が完成したとみられる。さらに、天武14年(685)に講堂の丈六仏開眼の記録を尊重すれば、分布からは特定できない講堂の創建軒丸瓦はC種をその有力候補と考えたい。こうして、丸瓦部先端の片柄形加工は石川麻呂自害以前に、楔形加工は造営再開後の天武朝に位置づけられる。A・C種の丸瓦部先端末加工品の年代は、共存した平城宮式6311A・Bの存在や軒平瓦との組み合わせによって、奈良時代前半とみることができよう。これらは出土量が少なく、修理補足用であろう。なお、小型品のE・F種は出土量が微量のため所用堂宇を特定しがたい。

丸瓦部先端の加工はE種が片柄形、F種が楔形である。

A・B・D種の片柄形加工の一群は丸瓦の接合位置(瓦当紋様に対する位置関係)に規則性がない。瓦当裏面に同心円状のナデ調整痕を残すものがあり、回転台上で成形・調整した可能性がある。A・C・F種の楔形加工と末加工品の場合、丸瓦接合位置は90度ごとに集中する。瓦範を正方形の板に固定したり、正方形の板から瓦範を彫り出したと考えられる。

軒平瓦 軒平瓦には、三重弧紋、四重弧紋、唐草紋などがあり、その95%以上が四重弧紋である。四重弧紋を8形式に分類した（表1、図2～4）。

創建時の主要な四重弧紋は第2弧線（上一凹面側から数えて2本目の凸線）を太く作ったA・Dである。Dは少ない。Bも4本の弧線の1本を太くするものがあり、製作技法からも創建期に含めてよいだろう。Cはこの紋様の原則が崩れ弧線がすべて同じ太さとなる。天武朝の造営工事再開時に製作された瓦と考える。一枚作りのF～Hは奈良時代から平安時代前期に属し、屋根の葺き替えや補修に使用した瓦。これまで四重弧紋軒平瓦はすべて創建時と考えられていたが、後世の補修に際しても四重弧紋は作り続けられていたのである。

堂塔ごとの所用軒平瓦は、金堂と回廊がA、塔がAとB、宝蔵がCである。軒丸瓦同様、皇極廟に造営された金堂と同じ軒平瓦が、天武朝に造営された塔にも大量に使用されている。修理瓦は、金堂にF・H、塔にGが使われた。奈良時代前半のFは軒丸瓦Aの最終段階の製品と組む。

この時の改修は屋根を全面的に葺き替え、建物を塗り直す本格的な工事だった。金堂と塔の周辺から出土する軒平瓦の凸面には2種類の朱線をのこすものがある。創建時の淡赤色の朱線と奈良時代の濃赤色の朱線である。分析の結果いずれも酸化鉄（ベンガラ）ではあるが、微量成分の含有量が違うことがわかった。また、朱線の位置から判断して、この時に創建時15cm前後だった茅負からの瓦の出を3cm縮めて12cm前後にする。

へら書き瓦 へら書き瓦は609点あり、文字・戲画・記号などの種類がある。多くは丸・平瓦にあり、時期によってその位置や内容に違いがある。7世紀代のへら書きは丸・平瓦の凸面に、8世紀代では平瓦の凹面に書くことが多い。戯画と記号の大半は7世紀代。文字には「奈尔波」、「九々八十一」、「八九七十二」（7世紀・図5・6）、「大」（8世紀）などがある。「大」は207点を数える。「奈尔波」は羅波の意味で、「羅波津に咲くやこの花冬籠もり今を春べと咲くやこの花」（『古今集』假名序）の一部であろう。これは下級官人の手習い歌であり、これまで知られていた木簡や墨書き土器の例の多くは8世紀代であるのに対し、7世紀代にさかのぼる資料として注目できる。

（花谷 浩・佐川正敏・金子裕之・大脇 蕊）

2 施紋後分割を示す紋様の重なり（B）

3 瓦分割後施紋を示す紋様端部（C II）

4 瓦範押捺を示す木目状旗（H）

5 「奈尔波」へら書き瓦

6 九々を記したへら書き瓦

| 形式 | 成形技法 | 叩き | 施紋手法 | 紋様の特徴 |
|------|----------|-------|------------|-------------|
| A | 粘土板桶巻き作り | 平行・格子 | 型挽き・施紋後瓦分割 | 第2弧線が太い |
| B | 同上 | 格子 | 同上 | 凹線広く底面が平坦 |
| C I | 同上 | 格子 | 同上 | 弧線は4条とも同じ太さ |
| C II | 同上 | 格子 | 型挽き・瓦分割後施紋 | 弧線は4条とも同じ太さ |
| D | 同上 | 格子 | 型挽き・施紋後瓦分割 | 第2弧線太いが紋様平板 |
| E | 同上 | 縄 | 型挽き・施紋後瓦分割 | 弧線は4条とも同じ太さ |
| F | 一枚作り | 格子 | 型挽き | 同上 |
| G | 同上 | 縄 | 同上 | 同上 |
| H | 同上 | 縄 | 範型押捺 | 同上 |

表 山田寺出土四重弧紋軒平瓦の分類

藤原京の水洗式トイレ遺構

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

貯留式のトイレ遺構を発掘した藤原京右京七条一坊西北坪の調査（奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』1992年5月）以降、古代のトイレについての関心が高まり、各地からトイレ遺構発見の報告が聞かれるようになった。その間、発掘した遺構がトイレか否かの判定には、堆積土の寄生虫卵分析が最も適していることが明確になった。そして最近この方法を用いて、藤原京跡内で水洗式のトイレ遺構を確認したので、以下その概要を報告する。

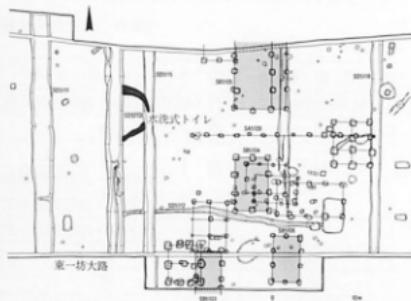
1993年秋、樅原市教育委員会が実施する藤原京右京九条四坊の発掘調査で、貯留式のトイレ遺構を発見したとの連絡を受けた。発掘担当者である露口真広氏の案内で現地を訪ると、調査区南半の土坑（SX02）は、間違いなく貯留式のトイレ遺構であった。ところが同じ調査区の北半で、道路側溝から弧状に分岐する奇妙な形態の溝が目についた。木樋こそ使用しないものの、道路側溝の流水を宅地内に引き込み、排便後の水を再び側溝に流し出すという、平城京左京二条三坊の水洗式トイレと基本的に同じ構造の遺構である（樅原市千塚資料館『かしはらの歴史をさぐる2』1994年4月）。堆積土中に籌木は見あたらず、ウリの種もさほど顕著ではない。早速、堆積土の虫卵分析を金原正明氏（天理大学付属参考館）に依頼した。その結果、貯留式トイレの堆積土に比べると虫卵の密度は低いものの、1ccあたり500個ほどは存在し、これをトイレ遺構と解釈してもよいとの結果が得られた。

この水洗式トイレ遺構SX01は、西四坊々間路東側溝の東岸に掘られた半径1.7mほどの弧状の溝で、幅40~60cm、深さ約30cm、内部には砂質土が堆積していた。調査では、道路と宅地内とを分ける堀などの痕跡は認められなかったが、本来は両者を分ける簡単な遮蔽施設が存在し、それに沿うようにトイレが配置されたものと思われる。

この発見を契機にして、藤原京内でもう一例、水洗式トイレ遺構が浮かび上がってきた。1986年に実施した左京二条二坊西北坪の発掘（藤原宮第48次調査）で検出した溝状の遺構SD5113がそれである（奈良国立文化財研究所編『藤原京左京二条一坊・二条二坊発掘調査報告』1987年3月）。この遺構は、東一坊大路東側溝の東岸に掘られた弧状の溝（半径2.8m、幅0.6~1.1m、深さ20~30cm）で、規模はやや大きいものの、形状や堆積土の様子など右京九条四坊例に酷似する。科学的な検討を経ていないが、この弧状の溝を7世紀末の水洗式トイレ遺構（SX5113）と理解して誤りないだろう。なお、この調査でも道路と宅地とを分ける堀などの遮蔽遺構は確認されていない。（黒崎直）



右京九条四坊の水洗式トイレ（北から）



左京二条二坊の水洗式トイレ遺構図

寄贈須恵器の紹介

平城宮跡発掘調査部

近頃、当研究所に土器2件の寄贈があった。いずれも須恵器であり、一件は、口縁の3分の2を欠損するが、以下の部位は完存する奈良時代の甕である。もう一件は、出土地点が明らかで伴出遺物も知れる古墳時代の蓋付短頭壺である。貴重な資料であり、ここに紹介し、寄贈者に対し感謝の意を表する次第である。

須恵器甕 京都市谷口菊野氏他4名（本庄久光・田中紀代子・本庄繁・田沢糸枝）の方より寄贈を受けたもので、平城宮から出土したと伝える。若干、煙し氣味の焼成で灰黒色を呈す。口径27.2cm、高さ49.6cm。倒卵形の体部に外反する口頭部が付く。肩部外面附近は、クロケズリを施すが、叩き目を消し去るまでにはいたらない。内面にはナデを加えるが、全面的に当板痕を留める。これとほぼ同型式の甕は、馬寮にある井戸SE6166から出土していて、8世紀末葉の年代が考えられよう。

蓋付短頭壺 奈良市佐紀東町川辺康雄氏の寄贈で、昭和38年頃、磐之媛陵（ヒシアゲ古墳）の北、字鳩が峯に所在する小山の造成中に出土し（位置図）、川辺氏の父、茂夫氏が業者から譲り受けたものである。また、これとともに、土師器の高杯と壺の把手片、刀と思われる鉄片、鍔付円筒埴輪片が採集されており、恐らく木棺直葬の古墳に納められていたものだろう。

蓋は、口径12.2cm、器高5.3cm。中央が僅かに凹むつまみをもち、口縁部が外反し、端面は段をなす。短頭壺は、口径7.6cm、器高13.7cm。ほぼ、まっすぐ立ち上がる口縁部と胴張

りの体部からなる。口

縁端部は、蓋と同様な

作工で、体部下半をロ

クロケズリ調整する。

両者とも粗い長石粒を

多量に含む胎土で、灰

青色に焼き上がってい

る。蓋の天井部と縁部

の境に突帯がないこ

と、身の肩部が丸みを

有し、器高が高いこと

から、6世紀前半頃に

比定できようか。

（興津一郎）

出土位置図 1:12000

須恵器蓋付短頭壺

須恵器蓋付短頭壺（下）

伴出土土師器高杯（上）1:4

須恵器壺

平城京姫寺出土の二彩・三彩陶器

平城宮跡発掘調査部

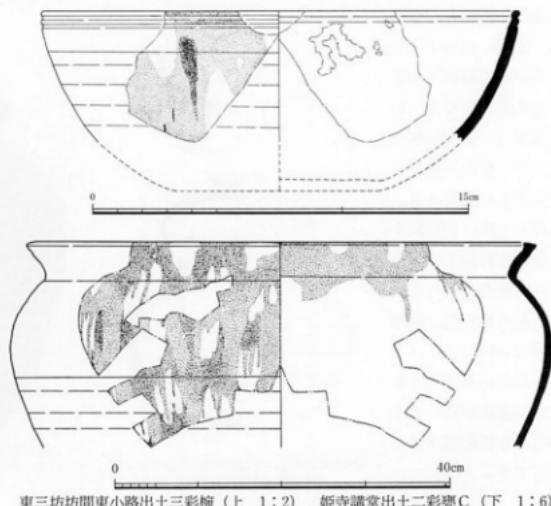
当調査部は、1975年に県営姫寺団地の建設に伴い、平城京の東市周辺東北地域の左京八条三坊九・十・十五・十六坪の発掘調査を行なった。その結果、十五坪では寺院の講堂、僧房の遺構を検出し、ここに一町を寺域として占める姫寺が存在することが明らかとなった。姫寺の創建は、出土した軒瓦から見て7世紀に遡り、廃絶は講堂、僧房の雨落溝出土の土器から、10世紀後半と考えられる。この姫寺とその周辺から、二彩・三彩陶器がまとまって出土し、一部は既に報告している（奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年）。今回、この二彩・三彩陶器を整理する機会を得、極めて珍しい器種を含むことが明らかとなったので、ここに紹介することとする。

講堂、僧房基壇の周辺には瓦を敷いた面があり、この瓦敷上から二彩・三彩陶器が出土している。その器種は、講堂出土のものは二彩多口瓶、二彩甕C、二彩火舎、僧房出土のものは二彩杯もしくは椀である。2は講堂出土の甕Cで、器形を復原できるものとしてはおそらく日本で唯一の出土例であり、特に注目される。これは、須恵器甕Cの器形をそのまま写したもので、口縁部から胴部上半が残り、それ以下は欠失している。復原口径は約60cmあり、日本最大の二彩陶器である。軟陶で、釉は、残存部に関しては内外面ともに施し、外面と口縁端部、口縁部内面は緑釉と白釉を鹿の子状に施釉し、胴部内面には白釉のみを施釉する。緑釉には、部分的に濃淡がある。胴部下半はロクロ削りを行ない、それ以外はロクロなでで調整する。なお、図示は省略するが、多口瓶は子口頸部、火舎は脚部先端の破片である。火舎は釉がほとんど剥落しているが、部分的に緑釉と白釉が残る。

1は寺域外の東三坊坊間東小路西側溝周辺の包含層出土の三彩椀で、口縁部のみの破片であるが、復原口径は約19cmとなる。口縁部が内凹しながら開く器形で、口縁部外面には二条の沈線を入れる。また、口縁部内面には浅い凹線を施して肥厚部を表しており、こうした形態上の特徴から佐波理鉢の器形を模したものであることは間違いない、注目される。外面には緑釉、白釉、褐釉を施し、内面には白釉のみを施す。胴部下半は、ロクロ削りで調整する。軟陶であるが、焼成は極めて堅緻で、一見須恵質の胎土よう見える。

他には、東三坊坊間東小路の東側溝から皿、鉢A、瓶、火舎、八条条間北小路の南側溝から皿、瓶、小壺、十坪の宅地内東辺の南北溝から多口瓶が出土した。これらは主に九・十坪間、十五坪間の条坊の側溝から出土したもので、本来は姫寺で使用していたものを寺域外に廃棄したのである。

（玉田芳英）



平城宮東大溝 SD2700出土金銀蒔絵

八角棒漆膜の顕微鏡観察

平城宮跡発掘調査部

1986年に平城宮東大溝 SD2700から出土した蒔絵八角棒(奈良時代後半)に関しては、既に表面観察結果を『年報1986』で報告している。今回、京都市埋蔵文化財研究所の岡田文男氏に依頼して、八角棒の漆塗膜断片からプレパラートを作成し、顕微鏡でその断層観察を行った。この作業には、漆芸家の北村昭彦氏にご協力いただいた。その結果、表面観察と合わせて、蒔絵の技法を詳細に知ることができた。判明した蒔絵の製作手順と所見は以下の通りである。

- 1) ヒノキとみられる柾目材から、八角棒を作り本地とする。表面はあまり平滑に仕上げない。
- 2) 本地の上に直接掃墨を混入した黒漆を厚く塗り、表面を平滑に仕上げる。
- 3) 漆で草花文を描き、その上に淡く金粉と銀粉を場所を分けて蒔く。使用されている金粉は不定形であるが、角はあまり尖っていない。銀粉も金粉に近い形状をとる。それぞれの文様部分には若干互いの粉の混入が見られ、金粉と銀粉が同じ製作段階で蒔かれたことがわかる。粉蒔きの作業は粉筒か、毛棒であしらって行ったらしい。粉の周間に、生漆か透漆で粉固めを行う。
- 4) 粉固めの後、さらに黒漆を厚く塗り重ねる。木質部の凹凸に従って漆のヤセが見られず、漆が粉を包み込み充分乾燥した後、粉を研ぎ出す。研ぎ出された面は完全に平滑で、粉の体積の半分以上が研ぎ出されている。しかも、角の漆膜の薄い部分を研ぎ破いておらず、優秀な研出技術と研磨材(硬質で金属粉を研ぐのに適した研ぎ炭)が用いられていることがわかる。
- 5) 伝統的技法では研ぎ出しの後、砥の粉と種油を混合した磨き材で磨き、研ぎ傷を消し、光沢を出しが、この八角棒には細かい研ぎ傷が残されており、磨きは加えられていない。
- 6) 銀粉には表面に露出した小さな面にも銷が生じ、ふくらんで銷の結晶を作っている。
- 7) 同時代の正倉院金銀錫莊唐大刀の鞘の「末金鍍」の技法と比較すると、使用する粉の形状は似ているが、「末金鍍」では粗い粉をあまり研ぎ込まず、漆膜より突出した状態で仕上げており、粉の体積の半分以上を漆膜と平滑に研ぎ込んだ八角棒の技法はより高度なものといえる。

(臼杵 熊)

金銀蒔絵八角棒

漆塗膜の断面(金粉の周囲を透漆で固定した状態)×500 薄絵粉の平面(研ぎ傷は粉上と漆膜面を貫通している)×40

平城宮・京出土文字刻書土器資料

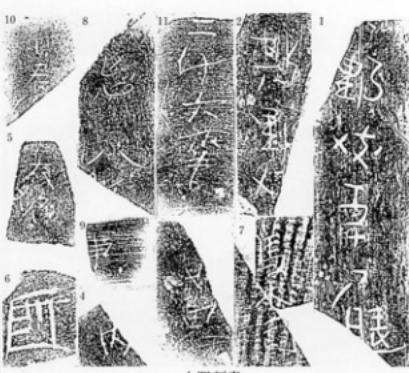
平城宮跡発掘調査部

1993年度に行った造酒司の調査(平城宮第241次調査)で、文字刻書のある須恵器の甕片を検出した(1)。頸部外面に「□野伎五十戸庭」と刻すもので、「1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」では、欠字部を「郡」と推定し、「野伎」を郷名と考えた。そして、「ヤキ」「ノギ」あるいは「ヤケ」という郷名を『和名抄』から探索し、『延喜式』に庭の貢進を義務付けられた国と一致する和泉国和泉郡八木郷・播磨國印南郡益毛郷の二ヶ所をその候補地として推定した。

ところが、概報校了後、1965年に行った造酒司の調査(第22次北)でも、同様な内容の刻書須恵器甕片が出土していることが判明した。2がそれであり、1と同筆と判断される。この資料により、1の欠字部は「郡」ではなく「斯」であることが明らかとなり、「斯野伎」郷と改めなければならなくなつた。『和名抄』によると、「シノギ」郷は、遠江国山名郡信濃芸郷だけであり、おそらくこれにあたるのであろう。遠江国は、『延喜式』に規定する須恵器の貢進国には含まれず、奈良時代の須恵器貢納のあり方をめぐらして新たな問題を提起することになった。2の資料は、伴出の紀年本簡・土器、そして郷の記載内容(五十戸)から、8世紀初頭に推定できる。藤原京やその他先行する飛鳥の諸遺跡にも、遠江の須恵器が搬入されていることから、8世紀の初めに平城宮に搬入されたとしても、おかしくない。山名郡が存在した遠江東部、小笠郡大須賀町には、8~11世紀に操業した清ヶ谷古窯群があり、同地方の製品との比較検討が必要となろう。以上、概報の誤りを訂正するとともに、この機会に、これまで未報告の文字刻書資料をも紹介することにした。

平城宮・京から出土している文字刻書土器は、既に報告したものも含め、20点に満たない数である。とり上げた資料のうち、土師器はすべて焼成後、おそらく使用場所で刻書されたものである。須恵器のうち、4の「内」は焼成後の刻書であるが、他はすべて焼成前、すなわち生産場所で刻されたものである。3の「茨田」は地名もしくは人名であろう。地名としては河内国茨田郡茨田郷、人名としては茨田宿住ないし茨田連氏などが考えられる、5の「大炊」は官司名で、宮内の官とすれば大炊寮にあたるのか。7は二ヶ所の離れた発掘地から出土した破片が接合したもの。「馬木司」という官司名はこれまで知られていない。(渥淳一郎・寺崎保広)

| 番号 | 11 □ 斗 六 升 □ 半 カ | 10 小 君 申 忌 八 □ | 9 馬 木 司 | 8 大 炊 | 7 内 | 6 菜 田 | 5 斯 野 伎 | 4 野 伎 五 十 戸 庭 | 3 2 1 |
|----------------------------|---|----------------------------------|--|---|---|---|---|---|------------------|
| 須 恵 器 器 器 | 須 恵 器 器 | 須 恵 器 器 | 須 恵 器 器 | 須 恵 器 器 | 須 恵 器 器 | 須 恵 器 器 | 須 恵 器 器 | 須 恵 器 器 | 土 器 種 別 |
| 甕 杯 杯 | 甕 杯A 杯B | 甕 杯B | 俵 壺 | 杯 又 は 皿 | 杯 又 は 皿 | 杯 A | 杯 又 は 皿 | 甕 | 器 種 |
| 底部 下位 外 面 | 口 縁 部 外 面 | 底 部 外 面 | 底 部 外 面 | 底 部 外 面 | 底 部 外 面 | 底 部 外 面 | 底 部 外 面 | 底 部 外 面 | 記 載 位 置 |
| S — 四 — 三 〇 | — 四 — 一 七 次 東 堀 河 | — 三 九 次 東 堀 河 | — 四 〇 次 S D 三 七 一 五 | — 三 九 次 S D 三 三 六 | — 二 九 次 S D 三 三 〇 | — 二 三 次 S D 三 三 〇 | — 二 三 次 S D 三 三 〇 | — 二 三 次 S D 三 三 〇 | 出 土 場 所 |



長屋王家木簡（2）

平城宮跡発掘調査部

1988年8月出土の「長屋王家木簡」の概要是『年報1990』に掲載したが、その後の整理の進捗状況をまとめておく。木簡が出土した溝 SD4750の木屑層の土を全てコンテナに詰めて持ち帰り、整理室で水洗いをしながら木簡等を探すという作業を行ったが、長屋王家木簡に引き続き二条大路木簡にも継続され、ともに完了したのはほぼ5年を経過した1993年7月である。この間、アルバイトの学生や主婦の方々の力に負うところが大きかった。

長屋王家木簡のほうは整理も終え、全体の点数が35,000点余、うち削屑が29,000点余と判明した。これらについてはこれまで『平城宮発掘調査出土木簡概報』として、主要な釈文を刊行してきた。長屋王家木簡はその21、23、25、27、28の各号で、27までが木簡、28が削屑についての概報であり、28を以て長屋王家木簡の概報は完結した。概報掲載の点数は木簡が計1,253点、削屑が1,707点で、これによってほぼ全体の内容を考察することが可能となった。以下、削屑について触れる。

29,000点という数はこれまでで最大であり、二条大路木簡の削屑がこれに匹敵するもの的小片が多く、内容の判明する点数は長屋王家木簡の方が多いと思われる。削屑の内容を見ると、特定の種類の木簡の削屑というよりは、長屋王家木簡のヴァラエティーに対応するように削屑が出土しているといえる。すなわち「謹解」「長屋親王御命符」などの文書木簡、「□田司進上米」などの進上状、「石川夫人進米二升」「画師四口米四升受」などの米支給伝票、「呂年冊二 大倭国葛木下□」「上日 日三百十七 井五百五十八」など官人の考課木簡、「末呂 年五 管入女子」など奴婢の名を記した木簡、材を横にして多数の行にわたって書いた木簡、習書木簡などである。点数の比率は木簡同様に米支給伝票が半数近くを占めるものと見られるが、そのことをもって、木簡群の最終的な保管場所を長屋王家内で米などの食料を担当する部局と考えると、他の文書木簡や考課木簡の説明がつかなくなり、疑問である。むしろ、これらの多様性を重視して、溝周辺に木簡を扱う部局が集中していて、各所から廃棄されたのか、もしくは一つの保管場所を想定するならば、木簡で「務所」ないし「司所」と呼ばれる長屋王家の家政機関中枢部を考えた方が良いのではなかろうか。

そうした上で、全体の木簡・削屑を検討すれば、ここに新たな木簡論・削屑論を構築することも可能となろう。これまでの木簡は平城宮内各所に散在したもので、特定の官衙で使用した木簡の全貌などは考えようがなかったし、また削屑といえば、平城宮第32次補足調査の式部省推定地から出土した12,000点余があったが、これはほとんど全てが考課木簡の削屑という、やや特殊なものであった。これに対して、今回の木簡・削屑は長屋王家全体で使用されたものの比率をある程度反映している可能性が高いのである。したがって、古代における文書行政の中で、どのような場面で木簡が用いられ、そのうちどの木簡について削屑が出来るか、といった検討が、今後長屋王家といつ一つの「官衙」を対象にしてなされるべきであろう。たとえば、米支給伝票の多さというのも、一件毎の記録として用いて紐で縫じておき、後に全体を集計して紙の文書にするといった点で、木簡に最もふさわしい使用方法であったからと言えるかも知れない。また大量の削屑の中には確実に荷札・付札から削り取られたと考えられるものが見られないことも注目される。切り込みの有無といった形態上の違いによるのか、荷札・付札は再利用するということがなく、もっぱら文書・記録の木簡を削って再利用していたと言えそうである。長屋王家木簡については今後の検討課題が多い。

なお、現在長屋王家木簡の第一分冊にあたる『平城京木簡一』の刊行に向けて準備中である。
（寺崎保広）

1993年度平城宮跡・平城京跡出土木簡

平城宮跡発掘調査部

1993年度の調査では、平城宮跡の3カ所、及び平城京跡の2カ所から、計138点（うち削屑65点）の木簡が出土した。その概要は既に『平城宮発掘調査出土木簡概報』(29)で報告したので、ここでは主要なものを紹介することとする。

造酒司地区(第241次調査) 内裏の東、東院の北西にあたるこの地区では、第22次調査で500点以上の木簡が出土し、併出した「造酒」「酢」などと記した墨書き土器の内容をも鑑み、ここを造酒司跡と推定した（『平城宮木簡』2 解説）。今回は45点（うち削屑9点）の木簡が出土した。内訳は、第22次調査区から南流する溝 SD3035・SD3050からそれぞれ34点（うち削屑7点）・8点（うち削屑2点）、六角形の平面プランの井戸屋形を持つ井戸 SE15800の埋土から1点、この井戸から南流し西に折れてSD3050に注ぐ溝 SD15820から1点、そして井戸の西側に建つ7間×4間の東西廂付き南北棟建物SB3011の柱抜取穴から1点である。

木簡の内容は既往の知見を裏付けるものといえ、「酒米」「赤米」「赤春米」など酒の醸造用の米の荷札が多いのが特徴である。⑪の「京上」の語は初見である。なお、今回のSD3035出土木簡の年紀は和銅(9)、靈亀(7)と古いが、郷里制や郷制のものもあり、また第22次調査では天平勝宝8歳の年紀をもつものも出土しているので、この溝を東のSD3050に付け替えた時期は奈良時代後半に降る。

東院地区(第243・245-1次調査) 宇奈多理神社の南から南西にかけての地域の調査で、木簡は78点（うち削屑48点）出土した。内訳は、D期（天平神護～神護景雲）の井戸 SE16030の掘形から削屑1点、及び同井戸から南流する石組溝 SD16040から59点（うち削屑47点）のほか、SE16030の井戸枠2枚のうち18枚に墨書があった。

⑫は大伴門の警備に携わる門部の食料支給の木簡か。但し、朱雀門の別称と言われる大伴門に関わる木簡が東院地区から出土したことの意味については後考をまちたい。今回出土した木簡には東院と直接関わるようなものは見出せない。なお、郷里制の荷札(14)や天平宝字3年10月に「忌寸」という表記に統一される以前の姓の表記「伊美吉」(15)が見えるなど、遺構の想定年代より若干遡る木簡も含まれている。

SE16030の井戸枠は幅20cm厚さ10cmほどの桧の板材で、墨書は外側面ないし側面（両方のものや両側面のものもある）の下部に「本」と記されており、材の天地を示すためのものと考えられる。「本」の他に、「隠」「墨」「綾」「鑿」などの落書のあるものが3点ある。⑬はそのうちの一つである。

東院庭園地区(第245-2次調査) 東院庭園北側と東面大垣周辺の調査で、木簡は計12点（うち削屑8点）出土した。内訳は、東面大垣の西雨落溝の側石の抜取穴 SK16308から1点、同雨落溝に先行する南北溝 SD16300から11点（うち削屑8点）である。

⑭の召文に「朱雀門」の語が見えるのが注意される。召喚する人ごとに注記を付す記載様式も珍しい。⑮は狩りに参加した官人の名を書き上げた木簡か。

平城宮東辺地区(第242-13次) 平城宮東辺の東二坊坊間路東側溝想定位置で検出した大規模な南北溝 SD15793（幅7m、深さ1.8m）から、「日□」と読める081型式の木簡1点が出土した。なお、溝自体は中世まで存続する。

薬師寺旧境内(第242-7次) 西僧坊の北約130m、平城京の条坊では右京六条二坊十五坪にあたる地域の調査で、木簡は東西溝 SD501から2点出土した。うち1点は019型式で「彦五郎」と読み、併出遺物や内容からみて近世の木簡であろう。

(渡辺晃宏)

第一四三・一四五一次調查出土木簡

第一四三・一四五一次調查出土木簡

南北溝S1-六〇四〇

南北溝S1-六〇三〇

① 造酒司令史 正官 使三宋公子

256-24-3 011

170-22-5 011

② 左大吉 [田人方呂] 刑部子右万呂一貫

128-25-2 032

148-17-4 033

③ 伊勢因國野郡田里鄰 [去カ]

156-24-3 033

091

④ 大都赤米五斗

(120)-17-6 039

091

⑤ 丹波因水土郡忍伎郷鹿里 神人万呂一斗

(121)-17-6 039

091

⑥ 丹波因丹波郡大野郡須米石部足五斗

343-150-7 031

091

⑦ 丹波因安堵郡里辛金打赤米五斗

(170)-15-6 039

091

⑧ 无名都進上三〇〇百銀

146-20-4 031

091

⑨ 二兩十五斤 和銅元年四月

(120)-22-6 039

091

⑩ 〔酒カ〕

(170)-23-5 039

091

⑪ 〔酒カ〕

(170)-23-6 039

091

⑫ 〔酒カ〕

(170)-23-7 039

091

⑬ 〔酒カ〕

(120)-22-7 039

091

⑭ 〔酒カ〕

(170)-23-8 039

091

⑮ 〔酒カ〕

(170)-23-9 039

091

⑯ 〔酒カ〕

(180)-24-5 039

091

⑰ 〔酒カ〕

(180)-24-6 039

091

⑲ 〔酒カ〕

(180)-24-7 039

091

⑳ 美作因美郡

(180)-24-8 039

091



⑯ 落書部分



⑰ 黒書「本」

石山寺校倉聖教の目録

歴史研究室

石山寺所蔵の聖教の目録については、『年報1993』で密蔵院所蔵の聖教目録「石山寺密蔵院經藏聖教目録」を紹介した。その目録は、現在深密藏聖教として一括されている聖教群の江戸時代末期における所蔵状況の一端を示している。石山寺には、それ以外にも数多くの書跡目録が寺誌函や深密藏聖教中に伝存し、いろいろな時期での、各院坊内の聖教類の所蔵状況が判明する。ここでは石山寺の中心の聖教群の一つである校倉聖教と称される聖教の目録を紹介する。

校倉聖教は、石山寺本堂の後方の斜面にある校倉經藏内に収納されていたところから命名されたもので、明暦年に新造された三十合の経箱に分類収納されている。すなわち当時石山寺に所蔵されていた聖教の内から、時代的に平安時代に書写されたと目されたものを取り集めたものである。現在、この校倉聖教は重文に指定されて、収蔵庫の豊淨殿に移管されている。ここに数合の経箱の墨書銘を掲げたが、この新調に関する墨書銘は三十合の経箱いずれにもあり、明暦元年（1655）9月に一括新造されたことがわかる。また各経箱には、それに収納されている聖教の目録が蓋裏に墨書きされており、明暦当時の校倉聖教の分類収納状況がある程度判明する。そして、校倉聖教については、その後安永5年（1776）9月に尊賢が作成した目録「石山寺聖教目録」が存在する（寺誌函18号）。それは書入れ、付箋などがある尊賢の草稿本であり、尊賢の浄書本は伽藍經藏に奉納されたことが、その奥書きから判る。その尊賢作成の目録をさらに江戸時代最末、慶応3年（1867）3月に尊信少僧都が書写している（深密蔵第120函11号）。ここにその転写浄書本である尊信書写本を抄出であるが紹介する。なお尊信書写本の奥書きは、尊信書写本の釈文で本奥書きと注記したところまである。なお尊賢は、文化12年（1815）11月、81歳の長寿で遷化した密蔵院第13代住職で、「石山要記」「石山寺年代記録」「石山各院記」などを述運し、また一切経や校倉聖教、薫聖教の整理修補も行っている学僧である（「尊賢僧正略伝稿（寺誌函28号）」）。それをさらに今度は法輪院の尊信が聖教護持のため転写浄書しており、山内住侶の聖教に対する意識が判る。

また石山寺における校倉聖教の明暦当初の分類収納が、この目録を仲介として、現在の状況（『石山寺の研究』所収校倉聖教目録）との対応関係において比較検討できよう。例えば第7函について、蓋裏墨書きに経軌、三昧耶戒作法、胎藏界作法、金剛界作法の4種で27巻14帖とあるが、尊賢目録もまた本軌、三昧耶戒、胎藏界、金剛界に分かれ、各々に書名を掲げてあり、明暦の分類をうかがいいうとともに、それ以後の移動については現目録との比較により推定できるのである。（綾村 宏）

| 〔第八函〕 〔蓋表〕 | | 〔第九函〕 〔蓋表〕 | | 〔第十函〕 〔蓋表〕 | | 〔底裏〕 | | 〔押紙〕 | |
|------------------|-----------|---------------|-------|---------------|----------|-------------|-------------|--------------|--------------|
| 石山寺 | 聖教箱 | 石山寺 | 聖教箱 | 石山寺 | 胎藏界部 | 石山寺 | 胎藏界部 | 〔伝法許可灌頂作法一卷〕 | 〔第八箱灌頂部之余〕 |
| 第八箱 | 一結大明経 | 第九箱 | 一結義軌 | 第十箱 | 一結義軌 | 明暦元乙年 | 明暦元乙年 | 〔一結集記〕 | 一結集記 |
| 灌頂部之余 | 三卷三帖 | 胎藏界部 | 十二卷 | 胎藏界部 | 十五卷十六帖 | 九月吉日 | 九月吉日 | 〔一結行事記〕 | 一結行事記 |
| 〔右二卷 製頂石流聖教相付者也〕 | | 新調 | 新調 | 新調 | 新調 | 卅内 | 卅内 | 〔九卷三帖〕 | 〔九卷三帖〕 |
| | | | | | | 〔寛政六甲寅七月四日〕 | 〔寛政六甲寅七月四日〕 | 〔都合三結十二卷廿三帖〕 | 〔都合三結十二卷廿三帖〕 |
| | | | | | | | | 〔花押〕 | 〔花押〕 |
| 〔底裏〕 | 〔蓋表〕 | 〔底裏〕 | 〔蓋表〕 | 〔底裏〕 | 〔蓋表〕 | 〔底裏〕 | 〔蓋表〕 | 〔押紙〕 | 〔第八函〕 |
| 石山寺 | 新調 | 石山寺 | 新調 | 石山寺 | 新調 | 石山寺 | 新調 | 〔伝法許可灌頂作法一卷〕 | 〔第八箱灌頂部之余〕 |
| 〔明暦元乙年九月吉日〕 | 〔都合五卷卅九帖〕 | 〔明暦元乙年九月吉日〕 | 〔十一帖〕 | 〔明暦元乙年九月吉日〕 | 〔十五卷十六帖〕 | 〔明暦元乙年九月吉日〕 | 〔明暦元乙年九月吉日〕 | 〔一結集記〕 | 〔一結集記〕 |
| 卅内 | 新調 | 卅内 | 新調 | 卅内 | 新調 | 卅内 | 新調 | 〔九卷三帖〕 | 〔九卷三帖〕 |
| 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔都合三結十二卷廿三帖〕 | 〔都合三結十二卷廿三帖〕 |
| 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔花押〕 | 〔花押〕 |
| 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔花押〕 | 〔花押〕 |
| 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔新調〕 | 〔花押〕 | 〔花押〕 |

| | | |
|-------------------|------|-------|
| 金剛頂瑜伽三十七尊札 | 一帖 | 同記 |
| 同蓮花部心念誦儀軌 | 四帖五卷 | 同儀軌次第 |
| 三摩地法 池上点 | 二卷 | 同抄 |
| 金剛頂義訣 | 一帖 | 一帖 |
| 三十七尊出生儀 | 一帖 | 一帖 |
| 瑜伽三摩地 | 一帖 | 一帖 |
| 同必要 | 一帖 | 一帖 |
| 同蓮華部念誦法 | 一帖 | 一帖 |
| 不空三昧大教王法 | 一帖 | 一帖 |
| 瑜祇二 | 一帖 | 一帖 |
| 瑜祇經 | 一卷 | 一卷 |
| 同總行法私記 又(梵字□□)經立印 | 一卷 | 一卷 |
| 同隨意別行法 | 三帖 | 一卷 |
| 同私記 千心 | 一帖 | 一卷 |
| 金剛大吉祥成就品 | 一帖 | 一卷 |
| 三昧耶品次第觀念 | 一帖 | 一卷 |
| 相應經指事 | 一帖 | 一卷 |
| 瑜祇經修行法 真如金剛安然 | 三帖 | 一卷 |
| 第十三箱 | 欠 | 一卷 |
| 金剛界之余 | 十卷五帖 | 一卷 |
| 次第三 | | 一卷 |
| 金剛界次第 | | 一卷 |
| 同略次第 | | 一卷 |
| 同念私記 | 一卷六帖 | 一卷 |
| 同 法皇 | 一帖 | 一卷 |
| 同次第 小島 | 二帖 | 一卷 |
| 同略次第 神奈川長慶公 | 一帖 | 一卷 |
| 都合四帖五十九卷 | | 一卷 |
| 〔底裏〕 | | 一卷 |
| ○校倉聖教經箱墨書銘 | | 一卷 |
| 〔第一函〕 | | 一卷 |
| 〔蓋表〕 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |
| 聖教箱 | | 一卷 |
| 請來錄部 | | 一卷 |
| 第一箱 | | 一卷 |
| 〔蓋裏〕 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |
| 請來錄部 | | 一卷 |
| 〔第二函〕 | | 一卷 |
| 〔蓋表〕 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |
| 聖教箱 | | 一卷 |
| 請來錄部 | | 一卷 |
| 第二箱 | | 一卷 |
| 〔蓋裏〕 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |
| 請來錄部 | | 一卷 |
| 〔底裏〕 | | 一卷 |
| 〔第七函〕 | | 一卷 |
| 〔蓋表〕 | | 一卷 |
| 聖教箱 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |
| 〔底裏〕 | | 一卷 |
| 第七箱 | | 一卷 |
| 〔蓋裏〕 | | 一卷 |
| 灌頂部 | | 一卷 |
| 一結經軌 | | 一卷 |
| 一結三昧耶戒作法 | | 一卷 |
| 一結胎藏界作法 | | 一卷 |
| 一結金剛界作法 | | 一卷 |
| 都合四帖五十九卷 | | 一卷 |
| 〔底裏〕 | | 一卷 |
| 明曆元乙年 九月吉日 | | 一卷 |
| 未 | | 一卷 |
| 卅内 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |
| 都合四帖五十九卷 | | 一卷 |
| 〔底裏〕 | | 一卷 |
| 〔第七函〕 | | 一卷 |
| 〔蓋表〕 | | 一卷 |
| 聖教箱 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |
| 〔底裏〕 | | 一卷 |
| 第七箱 | | 一卷 |
| 〔蓋裏〕 | | 一卷 |
| 灌頂部 | | 一卷 |
| 一結經軌 | | 一卷 |
| 一結三昧耶戒作法 | | 一卷 |
| 一結胎藏界作法 | | 一卷 |
| 一結金剛界作法 | | 一卷 |
| 都合四帖五十九卷 | | 一卷 |
| 〔底裏〕 | | 一卷 |
| 明曆元乙年 九月吉日 | | 一卷 |
| 未 | | 一卷 |
| 卅内 | | 一卷 |
| 石山寺 | | 一卷 |

| | | | |
|-------------|----------|------------------------|-----------|
| 諸師灌頂大政官牒文 | 複一卷 | 大日經義軌 | 十一帖 欠 文一一 |
| 教禪灌頂記 | 一卷 | 同疏 | 一帖 |
| 明海念範行海灌頂注進等 | 一卷 | 同疏第一抄 | 一帖 |
| 耳呂王院灌頂記 | 一卷 | 同經略疏 | 一帖 |
| 勝福院灌頂記 | 一卷 | 同供養次第法疏 | 七卷 欠 |
| 興然灌頂記 | 一卷 | 同演密抄 | 七帖 欠 |
| 灌頂官符 | 一卷 | 同住心品疏私記 | 一帖 |
| 天台 | 一帖 | 同疏略抄 真興 | 一帖 |
| 延曆寺灌頂行事 | 一帖 | 同秘要抄 | 一帖 |
| 第九箱 | 胎藏界部第三 | 大悲言通大曼多羅記 | 祐一 |
| | 此部之中別而為四 | 胎藏界儀軌解积 | 祐一 |
| 大日經 | 經軌一 | 胎藏界之余 | 祐一 |
| 同供養次第儀 | 二卷 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 同持滿次第儀 | 三帖 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 同成就瑜伽 | 一卷 欠 | △此中一卷石流開書大阿守惠座主弟子融惠筆記也 | 祐一 |
| 同成就儀軌 | 三本 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 同略撰念誦隨行法 | 三卷 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 大異禮遵那經弘大儀軌 | 三卷七帖 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 同成就法 | 一帖 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 同弘說要略念誦法 | 同真言五字儀軌 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 胎藏秘密大軌 | 同字輪瑜伽儀軌 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 疏積二 | 同真言寶本 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 大日經義軌 | 同南洞記 | 胎藏界念誦次第 | 祐一 |
| 第十箱 | 同高大夫 | 胎藏私記 劍 △石流開書 | 祐一 |
| 胎藏私記 | 一帖 | 胎藏私記 劍 △石流開書 | 祐一 |
| 蔬積二之余 | 同次第 | 胎藏私記 劍 △石流開書 | 祐一 |
| 禪林寺大僧正院唐記云々 | 一卷 | 金剛界部第四 | 祐一 |
| | 此部之中別而為四 | 金剛界部第四 | 祐一 |
| 金剛經 | 經軌一 | 略出念誦經 | 祐一 |
| 略出念誦經 | 五卷 | 諸抄四 | 祐一 |
| 諸佛界提真寶經 | 二卷 | 胎藏教法金剛名号 | 祐一 |
| 分別聖位經 | 一卷 | 義操 | 祐一 |
| | | 同灌頂密号 | 祐一 |
| | | 同諸說不同記 | 祐一 |
| | | 同對受記 | 祐一 |
| | | 同曼多羅記 | 祐一 |
| | | 同圓曼多羅抄 | 祐一 |
| | | 同略圖次第 | 祐一 |
| | | 同三部記 | 祐一 |
| | | 同八葉諸說不同記 | 祐一 |
| | | 同秘義 小島 | 祐一 |
| | | 同兩目六 | 祐一 |
| | | 理界私記 天台 | 祐一 |
| | | 東曼多羅抄 | 祐一 |
| | | 中台八葉觀行玄義口決 | 祐一 |
| | | 百光遍照玉義問答抄 | 祐一 |
| | | (□□□梵字)抄 千心 | 祐一 |
| | | 胎疏井儀軌等序要文 | 祐一 |
| | | 大日經中住阿字門觀 | 祐一 |
| | | 三淨曼茶 人水僧正 | 祐一 |
| | | 靈嚴和尚有胎藏根本密契 | 祐一 |
| | | 第十二箱 | 祐一 |

○石山寺聖教目錄

(表紙) 法輪院

石山寺聖教目錄 全

石山寺聖教目錄

藏中聖教久歷年序仍損頗多茲以為校合以今成

安永五年七月二十五日奉出經藏移而安置密藏院於普

賢院祖師承朗澄律師之影像前譯而數日之間分別同

異少加加嚴撰定目錄兼頤部門請檢閱者就錄用意

一 請米錄部 二 淹頂部 三 胎藏界部 四 金剛界部

五 蘇悉地部 六 如來部 七 弘頂部 八 經部

九 観音部 十 諸菩薩部 十一 明王部 十二 世天部

十三 瞽宿部 十四 護摩部 十五 作法部 十六 諸集法部

十七 悉曇部 十八 雜著部

第一箱 請米錄部 第一 於欠本曹標其名期後時補

此間自第二箱至第六箱請來之經執納之其目六全如請來自六所

載故今不出茲清書之時河書加之

第七箱 淹頂部 第二 此部中分而為七

請米錄部之余

受明結緣五

結緣淹頂三昧耶戒作法

全 同次第 胎藏界

金剛界受明淹頂次第 禪門

胎藏界同 禪門

| | | | |
|-------------|-----|---------------|-----|
| 三昧耶戒二 | 八卷 | 付法淹頂千心私記 | 一帖 |
| 同 天台 | 一帖 | 淹頂式 広一御 | 一帖 |
| 伝三昧耶戒私記 | 一卷 | 金蓮問受集 永意 | 一帖 |
| 三マヤ戒要事 | 一卷 | 兩部大淹頂作法 千心 | 一帖 |
| 授菩提心戒儀軌 教日撰 | 一帖 | 淹頂次第私記 | 一卷 |
| 胎藏界三 | 一卷 | 淹頂事 | 一卷 |
| 胎藏界云法淹頂作法 | 一卷 | 淹頂集注 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 淹頂次指圖 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一帖 | 淹頂真記 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 支度 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 事業淹頂具支分第六五 安然 | 二帖 |
| 胎藏界 | 一卷 | 五瓶觀 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 五色糸 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 淹頂所用物記 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 天台淹頂決勝 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 三種悉地法 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 決策三種悉地注文 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 金剛弟子儀 大師 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 塔中淹頂次第 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 宮御淹頂用途 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 金冠備習 天台 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 行事七 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 東寺淹頂記 實惠 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 貞紹淹頂行事記 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 法皇淹頂行持記 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 範賢淹頂記 文師作 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 遍照大僧正授淹頂禪林寺日記 | 一卷 |
| 胎藏界 | 一卷 | 禪林寺內供官淹頂白記 | 一卷 |
| 最上乘受菩提戒 | 一帖 | 文一一 | 文一一 |
| (□□□□□梵字) | 一帖 | 文一一 | 文一一 |
| 阿闍梨大曼多羅頂儀軌 | 八本 | 文一一 | 文一一 |
| 與金剛弟子入壇受淹頂法 | 一帖 | 文一一 | 文一一 |
| 文一一 | 文一一 | 文一一 | 文一一 |

法隆寺所蔵金属製容器の調査（1）

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

平城宮跡発掘調査部考古第一・二調査室と埋蔵文化財センター遺物処理研究室では、1992年6月から1993年3月末日までに、古代から中世にわたる法隆寺所蔵の青銅製容器計45点について、考古学的観察と科学的分析の両面から調査を行った。調査は次年度も継続するが、これまでに判明した成果の一端、とくに鉢・皿類について報告する。

1 考古学的調査

古代の青銅製容器は、いずれもロクロで厚さ1mm前後に削り、薄手に仕上げるのが特徴である。丸・平底鉢は口縁部内端が肥厚し、体・底部の内外面に多数の沈線がめぐるものと、口縁外側にのみ1条の沈線がめぐるものがある。前者は古墳出土品に類似があり6世紀末～7世紀前半、後者は法隆寺献納宝物（東京国立博物館蔵）の八重鉢と同類で8世紀に入る。高台付鉢は托（2）とセットになる小型品（1）と、体部に棱があるやや大型品（4）とがある。前者は中国・朝鮮半島出土例からみて6世紀後半、後者は正倉院御物の棱鉢に類似するがやや浅目であり、8世紀末～9世紀初頭頃に比定できよう。棱鉢の蓋（3）は深め、蓋（4）（5）は浅めである。前者が8世紀中頃前後、後者が8世紀末～9世紀初頭頃になろう。托（2）（6）は鉢の受部が高いのが特徴。中国例では9世紀中頃になって受部の高い例がみられるが、日本の三彩、須恵器には8世紀の例がある¹⁾。

中世の青銅製容器はいずれも厚さ3mm前後と古代に比して厚手となる。密教系の容器が主である。資料の多い六器についてみると、六器（1）（7）は鉢の体部が直立気味で高台が高く直立し、托の高台も高く直立する。法隆寺の資料はないが、平安時代後期～鎌倉時代前期には鉢の体部は外反気味で、托の高台も低い。六器（13）は鎌倉時代中・後期になろう。平安時代前期の六器はなお薄手であり、厚手になるのは平安時代中期か後期になる。二器（1）～（9）も鎌倉時代中・後期。六器（5）（6）は六器（13）に近いが、六器（9）（10）は鉢の高台が太く、托の高台が高くなる。室町時代に入る可能性がある。高台付皿（4）（8）は厚手。比較する資料はないが、中世であることはうごかない。

（毛利光俊彦）

2 科学的調査

法隆寺に伝世する青銅製容器に対する科学的調査を考古学的調査と同時に実行した。X線ラジオグラフィーによる構造調査と、蛍光X線分析及びX線回折分析による非破壊的手法による材質調査を中心とし、製作技法や材料の歴史的変遷と、器形などの形式的編年との相関を探ることが目的である。調査した鉢や皿類の中には、比較的平面性が良く、また伝世されていたおかげでさびによる腐食がほとんどないため、非破壊的手法による蛍光X線分析によっても、かなり定量性の良い分析結果が期待できる資料が何点か見受けられた。

今回の調査で得られた成果のひとつは、古代、特に奈良時代までの「佐波理」の材質をほぼ定量的に把握できた点であろう。表に示したように、古代の金属を特徴付ける鉛（Pb）、銀（Ag）などの元素を微量に含むものの、基本は銅（Cu）と錫（Sn）からなる、いわゆる青銅製で、錫の含有は18~22%程度で、残り80%近くは銅である、と考えられる。個体差などを考慮する必要はあるが、正倉院宝物に対して行われている最近の調査で示された結果¹⁾でも同様の傾向がみられる。さらに製作技法の検討を行っていく予定である。青銅製品も、時代が下がるに伴い、錫が減り鉛が増える傾向がみられ、肉厚になり重量感が増していくことに対応する。今後、分析点数を増やしていく中で、形式的編年との相関をふまえながら、銅製品の材質的編年の体系化をはかっていきたい。
(村上 隆)

1)毛利光俊彦「青銅製容器・ガラス容器」(『古墳時代の研究』8)雄山閣 1991

糸原一郎「陶磁—原始・古代—」(『日本の美術』No.235)至文堂 1985

2)木村法光・成瀬正和・西川明彦「年次報告」(『正倉院年報』第12号) 1990他

古代「佐波理」の蛍光X線分析の結果 (%)

X線透過撮影 図2-1 (×1)
(底面に「す」が認められる)

顕微鏡観察 鏡6 (×10)
(底面の欠損部に埋め込み補修がなされている)

滋賀県近代和風建築総合調査（2）

建造物研究室

平成4年度・平成5年度の2ヶ年にわたり滋賀県において近代和風建築の調査を行った。平成4年度の地元自治体による1次調査(所在調査)の結果、1451件1665棟がリストアップされ、そのうち141件224棟を抽出し、平成4・5年度に当研究所が2次調査(詳細調査)を実施した。調査成果は『滋賀県の近代和風建築－滋賀県近代和風建築総合調査報告書－』(滋賀県教育委員会1994年3月)として刊行した。

住宅 滋賀県の近代の住宅でひときわ目を引くのは文化人の別荘建築である。その代表が、画家山本春挙別荘であった蘆花浅水荘(大津市 大正5年)、画家橋本間雪別荘であった月心寺(大津市 昭和2年)である。庭園の造形に優れていること、建物は接客を重視し、茶事を強く意識していることが特徴で、施主の趣味・感性をよく反映している。なかでも蘆花浅水荘は大正年間に敷地・建物とも山本春挙の意向を強く取り入れて計画されたもので、建物は正統的な書院、数寄屋趣味の部屋、洋間、アトリエ、持仏堂、茶室などさまざまな要素を兼ね備えており、その端々に春挙の工夫が生かされた県下で比類なき建築である。また、井狩家(近江八幡市 大正3年)、五個荘歴史民俗資料館(旧藤井家 昭和9年)などの大規模な邸宅では、特に接客空間の豪華さが目を引く。また、近江日野商人館(日野町 昭和11年)は、土間はあるものの変則的な形式をとり、居室部では中廊下をとって、廊下をはさんで和室と洋室を並べており、近世以来の通り土間をもつ形式の発展の到達点というべき建築である。洋風の住宅はヴォーリスの存在が大きく、吉田希男家(近江八幡市 大正2年)は洋風の外観ながら内部に巧みに和風を取り入れた建築である。大正以降は和風建築に洋室を付加もしくは組み込む例が増して、近代住宅の特徴のひとつとなる。

料亭・旅館 料亭や旅館については総合的な調査が遅れている。今回の調査でも1次調査で取り上げた件数が少なく、2次調査の対象となったものは、もと料亭を含めて17件に過ぎない。旅館・料亭で注目されるのは、住宅と全く異なる平面形式と豪華な造作、凝った意匠である。

平面形式の特徴としては廊下の充実があげられる。このような商売では当然ながらサービス導線を確保することと、各部屋の独立性を高めることが要求される。明治期の旅館では、2階の階段を昇ったところに板敷の空間をとり、そこを中心に部屋を配する。大正頃になると中廊下を採用するようになり、天理教滋賀教務支所(もと料亭 大津市 大正頃)では1階でも中廊下によって部屋を並べている。希少な例ではあるが、かつての遊廓のなごりとして部屋をきわめて細かく分けた建築がある(開盛樓 草津市 明治初期)。また、料亭としては大広間をもつ建築も見逃せない。大広間をつくるには、部屋を縦横につないで襖を取り払って広間とするものと、当初より大面積の部屋を計画したものがある。後者としては天理教滋賀教務支所がその代表で、幅広い階段、広い階段ホール、ホールの左に便所・配膳室・洋間を備える。広間内は折上天井とし、楽屋付きの舞台があり、まさに劇場を思わせる空間である。3階建ての建築としては兵四樓(近江八幡市 明治中期)・かぎ樓(多賀町 明治19年頃)がある。それぞれ日牟礼八幡神社と多賀大社の参道の最も門前に近い場所に位置し、3階からの眺望がひとつの売物となっており、参道のランドマークともなっている。

意匠面では數寄屋意匠を取り入れた遊び空間の演出をしているのが特徴である。北村義孝家(もと料亭 彦根市 戦前改築・増築)では、土間の片側の壁に屋根付の板棚を貼り付け、対面の居室側に格子を並べ、奥に式台を設けるなど通り土間をひとつの路地にイメージしている。さらに、天井を吹抜けとし、2階廊下から△円形のベランダを出し、廊下に面して富士山形の窓を空け、どぎついまでの工夫を凝らして客の興味をそそっている。

公共建築 今回調査した公共建築は役所・集会施設・学校・駅舎・その他に分けられる。公共建築は洋風建築・擬洋風建築が多く、これまでにもすでに近代建築として調査されている。今回の調査では今までに調査されていない物件や和風の強い建物を主として調査したため、その調査件数は少ない。県下では大規模な和風公共建築が少ないなかで、前回報告した近江八幡ユースホステル（近江八幡市明治42年）は大型和風公共建築としては唯一の遺構である。

学校建築については4件を調査したが、多くは擬洋風の外観である。そのなかで淡海書道文化専門学校（五個荘町 明治末期）は和室の教室がそのまま現在でも使用されており、貴重な遺構である。

駅舎は今後近代化遺産として調査する機会があろうということで今回は2件のみの調査にとどまった。いずれも擬洋風の外観に和風の居室をもった建築である。近江鉄道の駅舎については調査した八日市駅に限らず沿線に戦前の駅舎が数多く残り、設計時の資料（図面）類も揃っており、今後調査および保存・活用の可能性を秘めている。

商業・事務所建築 商業・事務所建築は擬洋風建築が多く、また近代になると近江商人の経済活動が京都・大阪等の大都市に移る傾向が強く、想像したよりも注目される遺構は少なかった。

産業建築 産業にかかわる建築は今後近代化産業遺産の調査との兼ね合いもあり、あまり調査は行わなかった。地場産業の製茶と陶芸に関するもの各1件を調査した。両例とも当時の生産施設を伴った貴重な遺構である。ただし、調査が断片的なので、今後総合的な調査が必要である。

宗教建築 宗教建築は社寺に加えて、教会建築、新興宗教建築を調査した。社寺建築では、寺院本堂や神社本殿の多くのが、近世以来の伝統を引き継ぐもの、もしくは退化した形式のものが大半で、近代和風建築としての面白味には欠ける。そのなかで建築史学者や修理技師すなわち建築史教育を受けた者による復古調の建築の存在が注目される。向源寺觀音堂（高月町 大正7年）は、唐招提寺金堂等の修理にも携わった建築史家土屋純一博士の設計で、中世的な平面構成の仏堂に古代・中世の意匠を散りばめた建築である。また、宝嚴寺弁財天堂は修理技師乾兼松の設計になり、やはり中世建築を基調とした復古的な意匠でまとめてある。神社建築としては、戦前に国策神社として創建された神社が注目される。近江神宮（大津市 昭和15年）は紀元2600年を目指して創建された神社で、内務省技師角南隆・谷重男の設計になり、その壮大な殿舎群は明治神宮・平安神宮・櫛原神宮と並ぶ傑作である。また、本殿や本堂以外にも社務所・庫裏（書院）や能舞台に質の高い建築がある。

教会建築は大半が擬洋風建築で、多くは近代建築として調査が行われている。そのなかで彦根聖愛教会スミス礼拝堂（彦根市 昭和6年）は外観を向拝付の三間堂風としながら、彫刻等の意匠の題材をキリスト教にとり、内部は全くの教会建築として破綻なく仕上げている優品である。

新興宗教の建築としては天理教と金光教がある。天理教の湖東大教会（八日市市）や甲賀大教会（水口町）などでは、神殿が近代を代表する大規模建築として評価が高く、客殿等の質を尽くした質の高い殿舎群が注目される。また、大教会は直接宗教に関わる殿舎以外にも、教務者の住宅や宿泊施設や福利施設によって敷地が構成され、ひとつの町を形成していることも注目される。 （島田敏男）

古代ガラス遺物の材質

—弥生時代のアルカリ珪酸塩ガラス—

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥池遺跡からガラス工房関連の遺物を多数発見して以来、古代ガラスの材質やその製造方法について調査・研究を続けている。今年度は、紀元前1世紀から紀元後3世紀後半の遺跡から出土したアルカリ珪酸塩ガラス小玉の分析成果を報告する。

試料および分析方法 分析した試料は17遺跡から出土した約500点の遺物で、このうち定量分析できた試料は約250点である。分析には、藤原調査部に設置した微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析装置(TREX640S)を利用し、測定試料と近似する標準試料数種類を用いてFP法により定量化と規格化を行った。なお、ガラスの表面は風化により化学組成が変化するため(図-1参照)、表面のごく一部を研磨し、風化層を除去したのち測定した。

結果と考察 化学組成に基づいて古代のガラスを分類するため、その材質の特徴を便宜的に以下の3成分に大別し、各成分の含有量と構成物質の種類に注目した。すなわち、網目形成酸化物(それ自身が単独で3次元の網目構造を形成できる)、中間酸化物(網目形成酸化物の一部と置換して網目構造の形成に加わるとともに、網目修飾酸化物としても働く)、網目修飾酸化物(M-O単結合強度が60Kcal/mol以下で、それ自身では網目構造を形成できないが、網目構造の一部に入り込むことができる、ガラスの性質に重大な影響を与える)の3成分である。

図-2には、3世紀中頃までの遺跡から出土したアルカリ珪酸塩ガラス小玉をもとに、これらの3成分の合計が100モル%になるように表示した。これらはほぼ一定の範囲内にまとまり、基礎ガラスの材質は同じである。その特徴を具体的にあげると、網目修飾酸化物のほとんどをK₂O成分が占め、Na₂O、MgO、CaOはいずれも1[mol%]以下である。中間酸化物としてAl₂O₃が1.4~3.0[mol%]程度含有する。また、網目形成酸化物としてのSiO₂含有量は80~84[mol%]が多い特徴をもつ。これらを簡単な化学式になおすと、3世紀中頃以前のアルカリ珪酸塩ガラス小玉は、例外的な数例を除けば、ほぼ11~15K₂O·80~84SiO₂の2成分系カリガラスであるといえる。これら日本で出土したカリガラスは中国、韓国、インドで報告されているカリガラスの特徴と同一であり、中国などからガラスが伝えられて、国内で加工したことが推定できる。しかし、現段階では、基礎ガラス材の化学組成が同じであるということと、後述する着色材料の特性が同様であるということ以外に、カリガラスの原産地を推定する根拠はなく、日本に伝えられたカリガラスの原産地については、いまだ推定の域をでない。現在この問題について検討をはじめたところである。

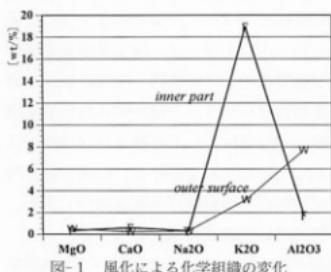


図-1 風化による化学組織の変化

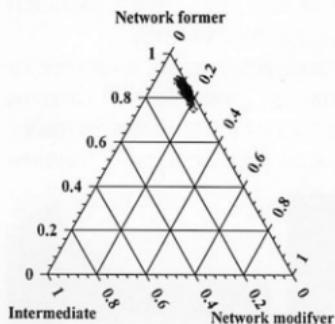


図-2 3世紀中頃以前の遺跡から出土した
アルカリ珪酸塩ガラス

なお、これらのカリガラスについての諸物性（モル容積、屈折率、熱膨張係数、比熱、弾性率）は、構成成分による加成性が近似的に成立るので、ここではアップペンによる加成性因子を用いて理論計算により求めた（表参照）。

一方、網目修飾酸化物にナトリウムが多量に含有するガラスや、中間酸化物の含有量の多いガラスは3世紀後半の複数の遺跡から出土する。いわゆるソーダ石灰（ライム）ガラスあるいは、アルミナ含有量の多いソーダガラスの出現である。これは、従来のカリガラスとはまったく材質の異なるガラスが伝えられたことを意味し、交易・流通に変化があったことを示す重要な証拠となる。しかし、島根県西谷3号墳出土の緑色大型管玉1点は、3世紀後半よりも古いソーダガラスの例となる可能性があり、今後の検討が待たれる。

日本の3世紀中頃以前のカリガラス小玉には、緑色（青緑色）系、淡青色（水色、空色）系、青紺（紫紺色）系などあるが、色調の数は多くない。いずれも透明ないしやや半透明である。これらのガラスは、すべて金属イオンによる着色と考えられる。しかし、中国やインドで出土した銅赤色のカリガラスのある種のものはコロイド着色法によるといわれている。ガラスの色は、着色剤の酸化・還元による影響、イオンの配位数、原始間距離、分極性、原子の幾何学的配列状態など複雑に関与して発色する。したがって、従来のように発色の原因を単に個々の元素から考えるよりは発色団という概念を取り入れるほうが説明しやすいことがある。例えば、同じコバルトを着色剤に用いても、基礎ガラス材のアルカリの種類によって色調が異なる。それは、 $\text{Co}^{2+}-\text{O}-\text{Na}^+$ 、 $\text{Co}^{3+}-\text{O}-\text{K}^+$ などの発色団の個性的な色の差にあると考えられる。これら古代ガラスの発色は複雑であり、機会を改めて報告する。

今回は、着色剤となる金属元素に着目して、その不純物から着色材料を推定した。淡青色ガラスは銅イオンにより着色されたもので、着色剤には銅に関係ある鉱石もしくは金属を利用したものと考えられる。これらのガラスからは、銅とともに鉛、銀、錫が検出される。銅と鉛含有量を散布図上に表示すると、正の相関関係が認められ、さらに銅、錫、鉛の含有比率は青銅の組成範囲におさまる。したがって、着色剤として、青銅粉などを利用した可能性がある。現在、鉛同位対比法によりその産地および当時の青銅器との関りについて調査中である。

一方、コバルト着色による青紺色ガラスからは、マンガン、鉄が多量に検出される（図-3）。これは、中国、インド、韓国で出土したカリガラスと同じ特徴である。このようなコバルト鉱石は中国に産出するコバルトマンガン鉱、あるいは、コバルト土鉱床から採取されたものと推定できる。これに対し、青紺色のソーダガラスにはマンガンを多量に含有するものは例外的である。したがって、カリガラスに使用したコバルト鉱石は、ソーダガラスに使用したコバルト鉱石とは産状が異なる。つまり、この両者の異なるガラスは異なる場所で製造されたものである。

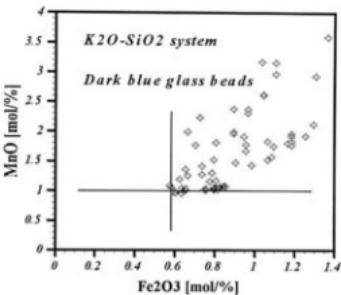


図-3 コバルト着色によるカリガラス中に含有する Fe_2O_3 、 MnO 量

| | | | |
|---------|--------------------------------|------|---|
| 平均化学式量 | 65~66 [g/mol] | モル容積 | 27.3~27.5 [cm ³ /mol] |
| 密度 | 2.36~2.40 [g/cm ³] | 屈折率 | 1.467~1.472 |
| 平均線膨張係数 | 75~90 [10 ⁻⁷ /°C] | 継断性率 | 6.4~6.6 [10 ³ kg/mm ²] |

表 $\text{K}_2\text{O}-\text{SiO}_2$ 系カリガラスの特性（数値は、最頻値を示す）

（肥塚隆保・川越俊一）

飛鳥池遺跡出土金属製遺物における 古代金工技法の研究

埋蔵文化財センター

飛鳥藤原宮跡発掘調査部の発掘調査により、大規模な古代の工房跡であることが確認された飛鳥池遺跡からは、ガラスや金工品の製作に伴う遺物が多量に出土している。このたび、この中の金属製造物2点に特に注目し、詳しい調査を行った。

1 銀-銅合金製棒（写真1）

長さ約10cm、幅約2.4mm、厚さ0.7mmで、全体の形は不定形であるが、表面はきれいに整形されている。この遺跡からは、金工品の製作過程で出る、切り屑状のものがいくつか出土しているが、この金属棒は、ただの切り屑とは違い何らかの目的をもって整形されているとみられる。不均一ではあるが、平均銀約60%、銅約40%の組成をとり、銀錫の可能性があることが、肥塚らにより報告されている¹⁾が、今回の再調査においても、これを積極的に支持する結果が得られた。すなわち、この金属棒は、6～7世紀にかけて、銅製の金工品を部分的に接合するのに用いられた銀-銅二元系合金の銀錫に関する遺物と位置付けることができる。金属の接合技術の歴史的変遷を考える上で極めて重要な遺物である。

2 魚々子型の痕跡のある小銅板（写真2）

表面に型で文様を刻んで装飾を加える技法は、金工における表面加飾の基本の一つである。先端を丸く彫り込み小さな輪にした型で、金属表面を丸く凹ませ、連続的に平面を埋めていく様子が、魚の卵を彫いたように見えることから名付けられた魚々子は、わが国では奈良時代以降ではよく使われる。今回調査した飛鳥池遺跡出土の小銅板は、魚々子型の痕跡を確認できるわが国では最も古い事例の一つである²⁾。材質は、ほぼ純銅で、電子顕微鏡による観察（写真3）から、魚々子一つの大きさは直径が約0.7mmで、表面の窪み具合から、型の刃は、鋭利に立っているというより、浅く窪ませた程度と考えられる。魚々子を施したこの銅板は、精度の高い発掘調査の成果であるとともに、古代金工における表面加飾の技術水準を考える上でも、たいへん重要な遺物である³⁾。（沢田正昭・村上 隆）

1) 肥塚隆保・川越俊一・西口寿生「飛鳥池遺跡出土遺物の材質」（『奈良国立文化財研究所年報』1992）1993

2) 奈良国立文化財研究所「飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991-1次）」（『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』23）1993

3) 村上 隆「ミクロな眼で見る古代金工の世界」（『佛教藝術』213号）1994

石材同定のための基礎資料の作成(1)

—飛鳥・藤原京とその近辺地域—

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

風化した岩石（石材）を保存処理するには、その材質（種類）を正確に同定し、特徴を把握する必要があることは言うまでもない。また、石材の特徴から产地が推定できれば、古代における石材の移動についての考古学的考察も可能となる。しかし、標準資料となる奈良県産岩石標本の数は限られており、特に、遺跡から出土する岩石種の標本は皆無である。そこで、今年度から数年間にわたり遺跡から出土する岩石を種類ごとに分類して整理すると同時に、产地推定の比較資料として代表的な露頭の岩石を採集し、基準標本の作成に取り組むことにした。今年度は、飛鳥・藤原京および近辺の遺跡から出土した造構や遺物の石材、および比較検討の対象となる露頭の岩石について実体顕微鏡写真および偏光顕微鏡写真の作成をおこない、岩石種同定のための基準資料作りをおこなった。

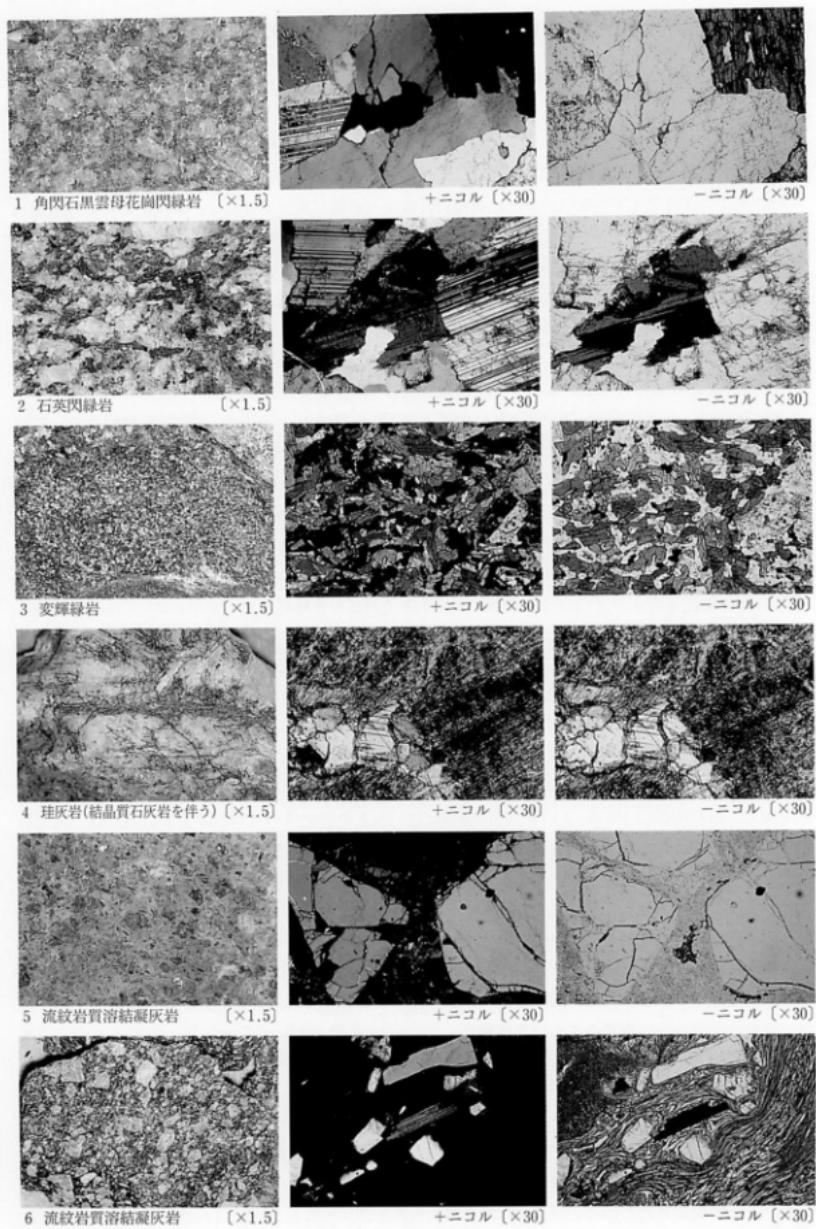
資料作成の方法 偏光顕微鏡試料の作成は、通常の岩石薄片製作法と同様で、風化岩石試料については予め、イソシアネート系合成樹脂(18%)を、切断前後の二回にわけて減圧含浸して強化した。

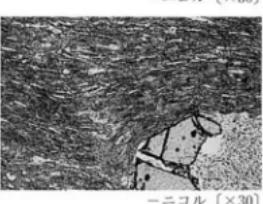
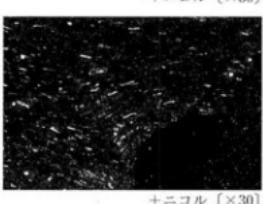
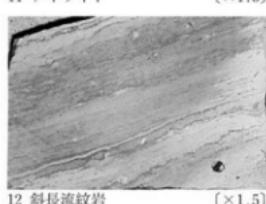
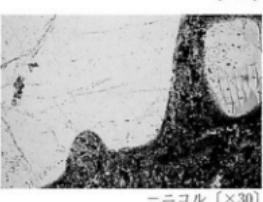
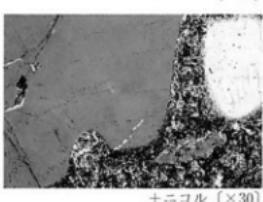
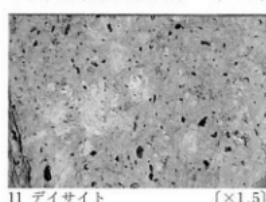
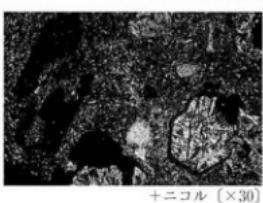
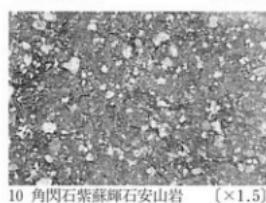
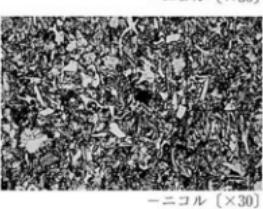
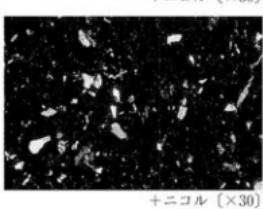
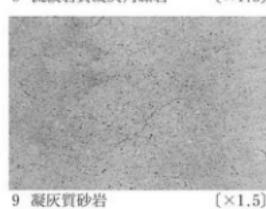
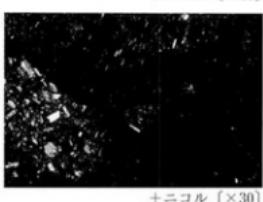
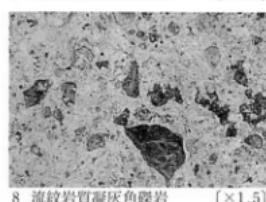
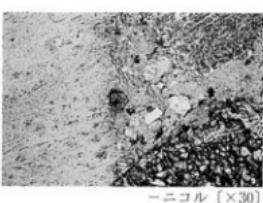
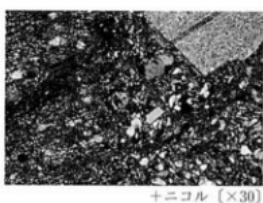
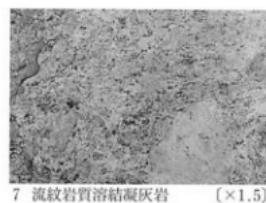
写真撮影にあたっては、深成岩系などの等粒状組織を有する岩石は、主要造岩鉱物が含まれる場所を選んで撮影し、火山岩系などは、石基と班晶の特徴的部分を同時に表しているような場所を選んで撮影した。なお、火碎岩や堆積岩で大きな隙を含むものについては、数箇所にわけて撮影した。また、肉眼観察の補助となるように等倍率の実体顕微鏡写真の撮影も併せておこなった。

解説 飛鳥・藤原京およびその周辺の遺跡から出土する石材は多種類におよぶが、ここでは主なものについての概要を記載する。

礎石などの建築部材として最も多量に使用された岩石は、竜門山地一帯に分布する領家花崗岩類である。主なものは、角閃石黒雲母花崗閃緑岩、石英閃緑岩、変輝緑岩で少量ではあるが変斑鰐岩などもある。角閃石黒雲母花崗閃緑岩（写真-1）は、やや優白色を呈し弱片麻状構造を呈するものもある。主成分鉱物は石英、カリ長石、斜長石、黒雲母、角閃石でチタン鉄鉱など鉄鉱物を少量含む。風化しているものは長石がソーシュライト化している。二次鉱物はカオリナイト、ハロイサイト、イライトなど。石英閃緑岩（写真-2）は花崗閃緑岩に比べるとやや全体が灰黒色優勢で、斜長石、角閃石が一定方向に配列した片状構造を示すものが少なくない。しばしば細長くのばされたレンズ状の塩基性シュリーレン（変輝緑岩質の包有岩）が観察できる。特に明日香村細川谷に分布するものは顯著である。主成分鉱物として、有色鉱物は角閃石、黒雲母とわずかに輝石を含む。無色鉱物は斜長石と少量の石英。副成分鉱物として磁鉄鉱とわずかにカリ長石を含むものもある。二次鉱物はクリノクロアード、方解石、カオリナイトなどで、風化すると鉱物間の結合力がなくなり砂粒状を呈するものが多い。変輝緑岩（写真-3）は、細粒の輝緑岩質の岩相で玉石などに多く見られる。細粒の優黒岩で肉眼的にはゴマ塩状を呈する（粗粒のものは変斑鰐岩）。フィールド名で Microdiorite といわれるものには変輝緑岩質の岩石がある。風化すると斜長石の微小な白色の斑点が顯著。造岩鉱物は、角閃石、輝石、斜長石、磁鉄鉱でオフティック組織が見られる。二次鉱物にはクリノクロアード、方解石、カオリナイトなどがある。竜門岳石閃緑岩中に塩基性シュリーレンとして存在したり、ときに岩脈状に産出する。以上これらの岩石礎は飛鳥川やその支流に亜円礎として存在し、また、崖錐性堆積物としても相当量存在する。

礎石として使用された岩石のなかには結晶質石灰岩を伴う珪灰石（写真-4）がある。白色の瑪瑙の





ようにもみえるが、瑪瑙とは産状が異なり、これはスカルンである。川原寺の中金堂に残るものは、滋賀県石山寺境内に分布する珪灰石と産状が一致する。洞川、五別所、綿向山産などとは珪灰石の産状が異なる。また、川原寺から出土した結晶質石灰岩も粗粒であり、近辺に産出するものとしては石山産と考えても矛盾しない。

磚櫛式石室に用いる板石や基壇化粧石などには火碎岩類が多量に使用されている。主なものは、曾爾層群に分布する室生火山岩、姫路から三田にかけて分布する姫路酸性岩類、二上層群ドンズルボー累層に産する火碎岩類である。室生火山岩類は斜長流紋岩質溶結凝灰岩で、白溶岩（写真-5）と黒溶岩（写真-6）の二種類がある。柱状節理や板状節理が発達しており、このうち磚櫛式石室には板状節理の発達したものが使用された。溶結構造が顕著なものが多く、石基はガラス質で、班晶は石英、斜長石、黒雲母、ときにシソ輝石、石榴石、ジルコンである。透明感の強い石英が特徴的で、高温型でかつ溶食形を示す。姫路酸性岩類は、遺跡から出土するものは大半が風化しており、淡黄土色を呈するやや固い流紋岩質の溶結凝灰岩である。溶結構造はやや不鮮明である。

姫路酸性岩類のうち兵庫県高砂市宝殿竜山付近で産出する岩石（写真-7）は、石基部分はガラスないし微小な珪長質である。班晶は石英、斜長石、カリ長石、ときに黒雲母、角閃石で、礫には流紋岩など火山岩礫や泥質の堆積岩礫などを含む。姫路酸性岩は岩相変化が大きく、兵庫県加西市高室付近では、礫を多量に含むものや、礫をほとんど含まず、溶結構造が明確でない流紋岩質の凝灰岩も分布する。遺跡から出土する大半のものは竜山系に推定できるが、なかには竜山系以外のものも存在する。二上層群ドンズルボー累層に産する火碎岩類も岩層の変化が大きい。遺跡出土の主なものは、流紋岩質凝灰角礫岩（写真-8）、流紋質凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、流紋岩質の軽石流堆積物などである。多くのものは、黒色のガラス質溶結凝灰岩礫や、火山軽石をともない、ときに流紋岩角礫、デイサイト角礫、ガーネット（アルマンディン）などが含まれる。肉眼観察のみでも構成礫種の判定から产地が特定できる。

建築部材として使用されたものには、堆積岩や火山岩も小量ある。堆積岩の主なものは、凝灰質砂岩（写真-9）で藤原層群豊田累層に分布するものと同様である。細粒の石英、長石、火山ガラスと少量の雲母類で構成され、それらの間隙を珪質ないし粘土質の膠着物質が充填している。貝化石などをともなうものがある。火山岩は量的にはごく希である。二上層群に分布する畑火山岩と六田付近に岩脈で分布するデイサイトが使用された。畑火山岩は角閃石紫蘇輝石安山岩（写真-10）で風化すると灰黒色から濃い赤色へと変化する。石基はガラス質、班晶は斜長石、紫蘇輝石、角閃石でわずかに黒雲母、ときにガーネットを含む。風化の著しいものは斜長石が消失している。六田に産するデイサイト（写真-11）は、寺院などでまれに見られるが、いずれも江戸時代以降のもので注意が必要である。灰白色を呈し風化すると淡黄土色に変じる。石基はガラス質、班晶に溶食型の大きな石英と長石、黒雲母、わずかな角閃石をともなう。

石製遺物には建築石材以上に多種類の岩石が使用された。飛鳥・藤原京付近に産出する岩石としては、石包丁などに耳成山に産出する斜長流紋岩が使用された。大半は風化しており、灰白色を呈する。耳成山産（写真-12）のものは流理構造が顕著で、石基はガラスないし隠微小質、班晶は斜長石、黒雲母、石英、クリストバライト、アルマンディン、まれに角閃石をわずかに含む。二上山離岳流紋岩との区別は難しいが、畠傍山産の斜長流紋岩は、ガーネットはほとんど見られない。その他、石器材には紫蘇輝石安山岩（二上山産）、緑色片岩、黒色片岩（四十万十、三波川帯産と推定）、閃綠岩および変斑鰐岩（領家花崗岩類と推定）、石英斑岩および花崗斑岩（产地不明）、砂岩、泥岩、フォルンフェルス、緑色凝灰岩類などで、水晶や瑪瑙などの鉱物単体の遺物もある。

（肥塚隆保）

年輪年代学（11）

埋蔵文化財センター

奈良県三倉堂遺跡出土木棺の年輪年代

1928年、奈良県大和高田市三倉堂で発見された三倉堂遺跡から、6基の木棺が出土した。この遺跡は、大阪鐵道（現・近鉄南大阪線）の軌道敷を建設するにあたり、三倉堂古池、新池の底を浚渫し、盛り土用の土取り工事中に偶然見つかったものである。遺存状態の良い古墳時代の木棺が一度に6基も出土したため、当時、大いに注目された¹⁾。その後、6基のうちの1基は奈良女子文化短期大学で、残る5基は市内片塩町の石園坐玉神社（龍王宮）で保管されていたが、この度6基とも大和高田市に寄贈、返還されることになった。6基の木棺は、発見後60年余も経過しているにもかかわらず、保存状態は良好である。材種はすべてコウヤマキ材である（奈良県立橿原考古学研究所 福田さよ子氏の同定による）。これらのなかで、最も遺存状態の良好なのは第3号木棺（底板長さ4.1m、幅0.7m、側板高さ0.52m、木口板幅1.25m）で、その大きさも最大である。

今回、これを機に第3号木棺の底板の年輪年代測定をおこなった。年輪幅の計測には、底板の小断片（長さ0.24m、幅0.11m、厚さ0.06m）を試料とした。計測年輪数は151層、コウヤマキの暦年標準パターンと照合した結果、試料の最外年輪形式年は506年と確定した。この試料の外側（樹皮直下の年輪まで）にさらに何層分の年輪が形成されていたのか、それを算定することはできない。この底板の外観を見るかぎり、腐食のため加工痕は一切確認できないので、棺本来の表面は全く残っていないものと判断される。原本では、さらに外側に相当の年輪があったものと思われる。ちなみに、第3号木棺とともに出土した土器の年代は、6世紀後半ごろのものと推定されている。

佐賀県八藤遺跡出土の埋没樹幹

1993年2月、佐賀県三養基郡上峰町で圃場整備事業のため約3mほど掘り下げたところ、樹幹の表面が焼け焦げた状況の大径木（直径1.5m、長さ22m）が出土した。そのため、工事は中断、急遽、周辺の発掘調査が実施された。その結果、多数の樹幹、枝、樹根などが広い範囲に埋没していることが判明した。これらは、約8万年前の阿蘇山の巨大噴火の際に発生した火碎流の直撃を受け、当時の森林が瞬時になぎ倒され、そのまま火碎流堆積物でパックされてしまったのである。これらの埋没樹幹のなかには、完全に内部まで炭化したものもあるが、多くは外部が若干焼け焦げただけのものである。これらの樹種同定の結果、当時の森林はトウヒ属のヒメバラモミを主体としたトウヒ属が主要な構成種で、これにブナやコナラ類、カエデやシデ類などの広葉樹も混生していたことが明らかになった（樹種同定は、京都大学木質科学研究所の伊東隆夫氏と当研究所の光谷拓実がおこなった）。

年輪層数の多そうな樹幹を9点（ヒメバラモミ1点、トウヒ属5点、ブナ属3点）採取し、年輪データを収集するとともに、年輪年代法による検討をおこなった結果、つぎのようなことが判明した。樹齢 調査した9試料のうち最多のものは、ヒメバラモミの575層である。根元付近での樹齢は600年をはるかにこえるものと推定される。

火碎流の直撃は一度 調査したヒメバラモミと2点のトウヒ属には、樹皮が残存していた。そこで3点の年輪パターンを相互に照合したところ、いずれも最外年輪の位置で照合が成立した。このことは、1度の火碎流で枯死したことを見ている。

大噴火の季節 最終形成年輪のなかの細胞を検鏡した結果、大噴火の季節は晩秋から翌春にかけての生育停止期間中であることがわかった。

（光谷拓実）

1) 岸 熊吉「木棺出土の三倉堂遺跡及遺物調査報告」（『奈良県史蹟名勝地調査報告書』第12冊）1931

動物遺存体の調査（10）

埋蔵文化財センター

土壤水洗選別法の改良、および開発 貝塚の微細骨を採集するためにはじめた遺跡土壤の水洗選別技術の開発、改良は、当初の動物遺存体の採集を目的とするだけでなく、微細有機遺物一般の採集に対象を広げつつある。発掘時に遺物を肉眼で確認して採集する方法では、見逃しが多いことが指摘されて久しい。その改善のため、以下のような方法を試み、実用化や改良を加えつつある。1) 現地で発掘土壤をすべてふるう「乾燥篩別法」、2) 目の荒さが違うふるいを重ね、水を注いで土壤を水洗する「水洗篩別法」、3) 水流によって比重の軽い有機遺物を浮遊させて採取する「フローテーション法」、4) 水分をはじく灯油、ワックス分によって昆虫などを分離する「薬液分離法」。今年度は、特に専用の土壤水洗選別施設を設け、大量の遺跡土壤の水洗選別を効率良く行うことによることに集中した。たとえば土囊1袋の貝層は、従来では1時間から2時間の処理時間がかかるが、新しく導入した電動ふるいを利用すれば15分程度に短縮でき、現在水洗選別中の島根県出雲市教育委員会が調査した上長浜遺跡の貝層の洗浄に大きな成果を挙げつつある。低湿地遺跡の粘土層に包埋された有機遺物の水洗選別は、従来の乾燥篩別法、あるいは水洗篩別法では不可能で、フローテーション法が唯一の方法である。ところがこの方法もまた、時間も手間もかかるため、日本ではあまり行われてこなかった。そこでアメリカの発掘現場で用いられている市販のフローテーション専用機を購入して試用を重ねている。これは、大量の有機土壤をタンクの中に投入し、ポンプで水を循環させ、下から水圧をかけて浮遊した種子、昆虫、魚骨などの有機遺物を0.3mmのネットですくい取る装置である。この装置によって、岩手県埋蔵文化財センターが調査した、平泉町柳之御所遺跡の館をめぐる濠と便所の土壤、岡山市南方遺跡の弥生時代の貯蔵穴の土壤の水洗選別を行ったところ、従来のフローテーションに比較して効率を飛躍的に向上させることが出来た。便所構造の証明にもっとも有力な決め手となる寄生虫卵を簡便に検出するために、寄生虫卵の比重が、他の土壤粒子よりも小さいことを利用して薬液分離法を試みた。具体的な方法として、塩化亜鉛 ($ZnCl_2$)、臭化亜鉛 ($ZnBr_2$) の比重1.2~1.4までの各種の溶液を作り、その中に便所構造と思われる土壤を入れて搅拌し、浮遊遺物を採取してプレパラートを作成し、生物顕微鏡で観察する方法である。この方法により、土壤を入手してから10分以内で寄生虫卵の有無を検眼し、確認する事が出来るようになった。

国際低湿地遺跡研究集会の開催 1993年3月5日、平城宮跡資料館講堂において、低湿地遺跡の研究法についての研究会を開催した。午前中は近年調査された日本の代表的な低湿地遺跡である北海道千歳市美々8遺跡、熊本県宇土市曾賀貝塚、滋賀県大津市栗津湖底遺跡の発掘成果と問題点について発表があった。午後からはケンブリッジ大学のサイモン・ケイナー氏が、日本と英国の低湿地遺跡の発掘法の比較と両国考古学の特性について比較し、続いて日本学術振興会の招請で奈文研を来訪中の低湿地遺跡考古学プロジェクト代表ジョン・コールズ氏が世界の低湿地遺跡の現状を紹介した。ブレイニー・コールズ氏は英国の代表的な低湿地遺跡であるサマセット・レベルズの発掘とその後の研究の成果の発表を行った。今回の研究集会の発表によって、ヨーロッパの遺跡では年輪年代学のフローティング中のデータを遺跡の存続年代の推定、修復などの研究に応用していることを知り、その有効性を再認識できた。また、乾燥地遺跡と低湿地遺跡の情報量については、低湿地遺跡の重要性を再確認することができた。研究会には東北から九州までの文化財担当者、約120名が参加し、予定時間の4時半をすぎても活発な議論が続いた。その後「低湿地考古学研究プロジェクト」(Wetland Archaeological Research Project) 日本支部を奈文研に設置し、さらに、国際交流を深めることになった。（松井 章）

平城宮跡・藤原宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・
飛鳥資料館・埋蔵文化財センター・建造物研究室

1 平城宮跡の整備

1993年度に実施した宮跡整備は、朱雀門復原整備、東院庭園復原整備、式部省地区整備、宮内省地区防災施設整備、緑陰帯造成、高圧電源設備改修、見学者用広場舗装、見学者用便所改修工事等を行った。なお1993年度には、2次にわたる補正予算が編成されたことから、本年度より朱雀門及び東院庭園の復原整備が本格的に開始されることになった。工事はいずれも1997年度までの5ヶ年計画で、総工費は朱雀門復原36億円、東院庭園復原20億円である。

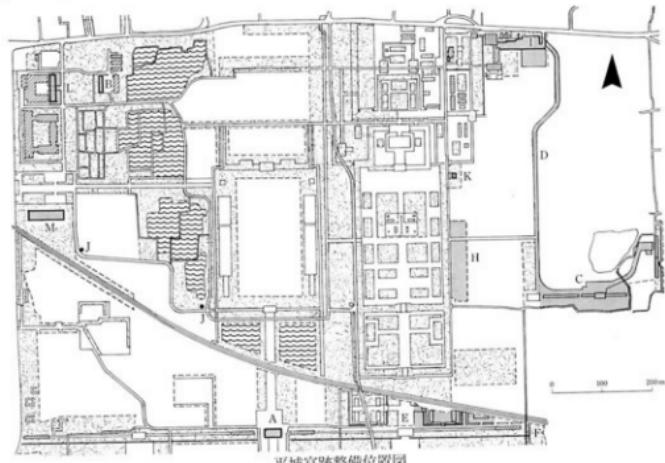
朱雀門復原整備 朱雀門復原事業は、1992年度に基壇の建設を完了しており、今年度より門の復原工事を開始した。まず木材の調達に着手し、初重の化粧材約321m³、二重の化粧材約62m³、また野物材についても約384m³の木材を発注した。化粧材は、隅の大斗、天井板、化粧裏板等を除き大半は内地産の檜で、野物材は内地産のヒバ・桐・杉・榆等である。化粧材については、全体所要数量の約67%、野物材については、100%調達することになる。その他の工事としては、門建設のための素屋根（鉄骨造、高さ25.5m）・木材保管庫・仮開い等を建設することにした。

朱雀門復原に先立ち木材の加工及び保管を行うための資材保管加工棟を建設した。概要は、

構造：鉄骨造平屋建（一部中二階） 建築面積：456.96m² 延床面積：482.34m²

外壁：ALCパネルに複層仕上塗材の吹付け 屋根：フッ素樹脂鋼板葺きである。

また朱雀門は、平城宮の建築物において使用木材や規模が特に大きく、再現するに際し、その復原作業をも見学ルートに組み込むよう平城資料館北東部に資材保管加工棟を建設した。外観は、既存の建物にデザインを統一し、内部には、2.8t吊りホイスト・ハロゲン照明器具を設置し、床は木材の急激な乾燥・冬季の加工作業における防寒・木材や加工器具類の落下による破損を防止するよう、真砂土の土間とした。



東院地区復原整備事業 東院庭園については、1978年度の『特別史跡 平城宮跡保存整備基本構想』において、遺跡博物館構想の一部として、整備が計画されていたが、これが凍結状態にあった。今年度から、東院の復原整備事業が予算化され、池を中心とした庭園と、これを取り囲む建物・大垣など施設群を復原整備することになった。事業対象地区は、東院地区的南半分で、とくに庭園の位置する東南隅の地域（東西270m、南北180m、面積48,600m²）である。今年度の復原対象建物は、南面大垣と東面大垣の一部、南門（今年度発掘で検出された五間門）、北東建物（反り橋の北岸にある東西棟の礎石建物）である。中央建物（園地の中央にある簀子棟敷付き東西棟建物）、西建物（南門の北東にある7間2間西庇付の南北棟建物）、北板塀（北東建物の北にある東西塀）、庭園の復原・整備は、来年度以降になり、また東南隅大垣と隅楼は発掘調査後に再検討される。また今年度は、未買収地の買い取り交渉、工事用進入道路の整備と道路の付け替え工事、これらに関連する周辺整備工事など、多岐にわたる事業が推進された。なお、東院地区の復原整備のための進入路として遺構展示館東側の見学者用広場から東院に至る工事用道路（幅員8m、碎石舗装延長507m）及び工事用道路周辺盛土造成を行った。施工面積は17,485m²である。

式部省の整備 式部省および式部省東官衙のうち、近鉄線以南の部分の整備を平城宮跡第220・222次調査の成果に基づいて行った。式部省では、半立体復原の手法を用いて遺構を表現した。半立体復原とは、発掘調査遺構から推定できる建物・壁等の上部構造を、平面的には原位置に、一定の高さまで表現する手法。壬生門前広場を隔てて式部省と対称をなす兵部省の整備（1990・91年度）では、この手法により基本的に地上高1.2mまで表現した。しかし、整備区域内に入った場合や高すぎる感じを受けるとの反省から、式部省では20cm低くして地上高1.0mまで表現するにとどめた。このほか、式部省では、石組溝であることが遺構から確認できたものについては、三面とも石組の溝として表現した。また、基壇建物が床張りであったことが遺構から確認できているため、床東を基壇床高から30cm立ちあげて表現した。式部省の整備で、近鉄線以南の兵部省・壬生門前広場・式部省の一連の地域が、半立体復原を基本とする統一的な手法により整備を完了したことになる。

一方、式部省東官衙は、外周築地塀を生け垣で、基壇建物を盛土張芝で表現するソフトな手法を用いて整備を行った。

また、平城宮跡の東南部、式部省東官衙地区内を南北に流れる水路については、降雨時の水量の増加による堤の崩落が近年目立つようになってきたことから、花崗岩雜割石による護岸整備を行った。施工した石積の総延長は約89m、施工面積は294m²である。

宮内省地区防災施設整備 宮内省地区には、4棟の復原建物と門が建設されているが、今まで花火等における火災に対しては無防備であった。そこで、この地区全体の消防区域を南殿第1・2殿、西南殿、西北殿、正殿の4ブロックに分け、ドレンチャーによる自動消火設備や屋外消火栓を設置し、自衛消防隊による地区内の初期消火が行えるよう防災計画を策定した。

本年度は、上記防災計画にそって南殿第1・2殿のドレンチャーの設置、防火水槽（100t）および設備棟の建設、送水本管の布設を行った。防火水槽は、景観上から地中に埋設した。設備棟は、消火ポンプ室及び電気室からなり、防火水槽と並設した。今後、残りのブロックの整備および自動火災感知機・自動通報設備の検討を行っていくなければならない。

緑陰帯造成整備 第二次朝堂院・朝集殿の東外郭部に東西約31m、南北約144mの範囲で緑陰帯の造成を行い、東院復原整備等における既存支柱木（約380本）の移植を行った。整備面積は7,911m²、工事費は10,815千円である。

見学者用広場整備 見学者用広場は、平城宮跡の北東部にある遺構展示館の東側に接しており、近年車

による見学者の増加が目立つようになってきた。しかし、広場は碎石舗装であるため舗装面の荒廃が目立ち補修回数も増してきたことから舗装整備を行った。広場の面積は広く、景観上遺跡への影響も大きいことから玉砂利を混合した自然色舗装(1,406m²)を行った。なお広場への車の進入も考えられるので耐摩耗性など車両交通に耐えうる舗装材を選定した。

高圧電気設備改修 1992年度より始めた宮跡内発掘調査用高圧電源の改修を、第一次朝堂院南部より西方官衙に至る区間について行った。本年度は、変電設備(キュービクル)2基、それに至る配電線(高圧スチールコルゲートケーブル22sq-3c 土中直埋)約670mを更新した。

見学者用便所改修 第二次朝堂院東側の便所は、昭和47年に建設され老朽化が著しく改修を行った。改修内容は、屋根部鉄骨の補強・葺き替え、内外装の改修、外構の整備などである。建物は覆い茂った樹木に囲まれ暗いイメージであったため、清潔感を出すよう、外壁を汚染の少ない塗料を選定し白く塗り替えた。内部は清掃の簡単なタイル張りとし、トイレブースを破損の少ないテラゾブロック、扉をステンレス製のパネルとした。外構は、便所の前面を擬石の研ぎ出しコンクリート平板で舗装し、身障者用スロープを設けた。

(渡邊康史・坂上定敬・小野健吉・藤田盟児・松井敏夫・上垣内茂樹)

東院庭園の復原設計

東院庭園の規模、意匠、構造などについては、第44次、99次、110次、120次調査において明らかになったところが大きいが、今年度も整備に先立ち未発掘地の調査を行った。成果は発掘調査報告の項を参照されたい。なお復原するのは、奈良時代後半を想定している。各次の調査の総合的検討は、計測修景・遺構調査両室が中心となって平城宮跡発掘調査部で行い、所内検討会議を経て、最終的に文化庁の復元検討委員会の了承を受けて実施することになった。

この事業の場合、単年度で調査から設計まで行う必要上、効率的な復原設計手順が求められた。以下に、共通する設計手続きを記しておく。始めに各発掘調査の成果から、奈良時代の平面と地盤高を推定復原する。整備地盤高は、遺構保護のために、奈良時代後半の推定地表面の40cm上とし、園池部分では一部の石組遺構を露出展示するために10cm上とする。以上の検討から、復原の基本方針と概略計画をつくり、これを所内会議で検討した。つぎに、了承された結果を条件として、財團法人建築研究協会一級建築士事務所に基本設計を委託し、これに従って現地に繩張りし、遺構面や包含層の部分的高まりを保護できるか確認した。その結果によって整備地盤高及び建物基礎を再調整し、実施設計に入った。実施設計では、鈴木嘉吉S.D.と建造物研究室・遺構調査室が意匠を検討をした。各建物別に、図面での検査を2回、原寸図での検査を2回、さらに原寸型板を立てての検査を2回程度行い、基本的形状からしだいに細部意匠にわたって調整していった。なお瓦については考古第三調査室が検査した。以後、施工時の問題は、その都度対応していった。以下、各建物ごとに、復原の概要を記す。

南面大垣 南面大垣の位置は、西部の一本柱塀の柱根と、東部の大垣築造時の堰板を止める杭の柱穴により、方向が国土座標の東西にほぼ一致し、心の座標値がX=-145,729.6になると推定された。また堰板を止める杭間の距離は10尺を測り、大垣基底部は9尺と推定されるので、これまでに整備されてきた大垣と基本的に同一形状と推定した。ただし、すべての雨落溝に雨が落ちるためには、軒の出を5寸延ばして8尺5寸にしなければならなかった。奈良時代の地形は、小子門のある西からしだいに東へ低くなる。整備地盤もこれを踏襲したが、243次調査の西側で包含層が高く残っていたので、これを乗り越えるために小子門寄りで勾配を緩くし、南門寄りで急にした。具体的には、小子門から里道(南門の西、幅員6mほどは、里道用敷地として大垣を作らない)まで0.64%、里道から南門まで2.0%、南門から穴門(南門の東にある小門)まで2.0%、穴門から東端まで0.65%の勾配となった。また大垣は、奈良時代の前半に作られてから作り替えはなかったが、奈良時代の中頃、南門両側付近

の北側地盤が造成によって約1尺高くなった。今回の復原は、この造成より後の姿で行うので、大垣の北立面が変形になっている。これについてはつぎの南門でも説明する。なお、穴門は、絵巻物などに描かれた同類の門の構造を参考に、上部の積土荷重に耐え得ることを想定した構造にした。

南門 この門は、葺かれていた瓦が瓦編年の平城第Ⅳ期（757～770）のものであるから、この時期に建造されたことと、この時大垣自体は建て替えられていないことが、第243次調査で明らかにされている。したがって、上述の造成によって大垣の南北にできた地盤高差を前提に建てられたものである。ここで、根石の高さと、北側の雨落溝が階段で切れないことから、基壇の背面側の最大高さは約60cmになり、また地盤高差から基壇前面高は約90cmになる。そして妻側の中央組物が、大垣の熨斗瓦よりも低くはならないことから、ほぼ柱高が決定される。ほかは奈良時代の建物の比例と、技法を参照して設計した。

東面大垣 東面大垣の位置は、北の方の第191-12次調査の北区で、大垣東側立ち上がりと東西雨落溝が検出されており、これと第245-2次調査を比較すると、南に100mで東に59cmの振れであった。南では、44次調査の東雨落溝と第245-2次調査を比較すれば、南に100mで東に59.8cmの振れであった。以上のように、北方・南方ともに振れはほぼ等しくなったので、南に100mで東に59cmの振れをもつと決定し、第245-2次調査で判明した大垣心、 $X = -145,620.0$ 、 $Y = -17,808.0$ から位置を算出した。地盤高は、やはり第245-2次調査で判明した奈良時代地表面から、東雨落溝の勾配に合わせて決定した奈良時代後半の推定地表面に40cmを足して、整備の地盤高にした。ただし北に行くほど遺構の残りがよく、これを保護するためにさらに高くせざるをえず、北東建物より北では、推定地表面より60cm高くなっている。しかし池の周囲の整備地盤高は推定地表面の上10cmなので、最も池が接近するところでは、整備地盤高を相応に下げなくてはならず、そのために勾配を調節した。勾配は、北の約30mが1.5%、つぎの20mが2.8%、それから南は0.38%とした。ただし勾配が変わる部分では、現地での繩張りの結果をみて、折れ点の両側2スパンずつの大垣高を変更し、徐々に勾配が変わっていくように設計した。また第245-2次調査で、断面が良好に検出されたので、これまでの大垣と同じく基底部幅9尺と判明した。犬走り部分は東西ともに4尺で、軒の出を8尺5寸とすれば、瓦先部は雨落溝の内側に入るので、屋根構造は南面大垣と同じでよい。

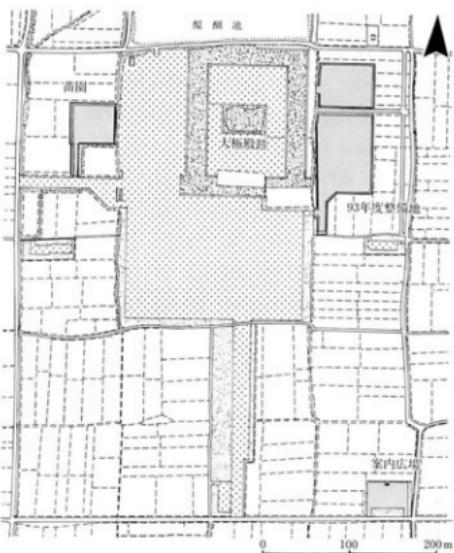
北東建物 第110次調査で検出された桁行3間梁行2間の瓦葺建物である。西側妻柱の礎石が残っていた。また反り橋の正面の小高くなった台地上に建ち、亭的な性格の建物であった可能性が高い。そこで、妻構造は中央建物と合わせて二重虹梁棊股とし、内部はより簡便で、軽快な又首組とした。これに最も近い建物は法隆寺食堂であるから、細部はこれに倣った。また遺構では基壇が認められないが、基礎をつくる必要上ごく低い基壇を設けた。また、本来の礎石は凝灰岩であったが、強度が不足するので花崗岩を用いることとした。

庭園 庭園部分の整備は来年度以降になる。しかし、池底の整備地盤高や原位置をとどめている石組・景石の取り扱い方針が全体の整備地盤高を規定するため、これらについて東院庭園専門委員会の指導を受けつつ検討を重ねた。その結果、池底の整備地盤高は奈良時代後半の遺構面の10cm上とし、陸部の整備地盤高（奈良時代後半の推定地表面の40cm上）との差はなだらかな斜面で処理することとした。また、石組・景石については露出展示とすることとした。ただし、池底の整備地盤高が奈良時代後半の遺構面より10cm上ることにより水面高も10cm上昇するため、汀線付近の景石が一部水没する状況が生じる。この点については、庭園デザインの根幹にかかわる問題であり、整備に先立つ再発掘時に個々の景石ごとに取り扱いを再検討することとした。さらに、池水の給水・補給方法、池周辺の地表処理、植栽等についても、検討を進めている。

（藤田盟児・小野健吉）

2 藤原宮跡環境整備

1993年度は、藤原宮跡大極殿院東方域に盛土による広場を造成した。この広場の平均盛土厚は約50cmで、表面を化粧砂利敷き、周囲の法面を張芝で処理した。また、現地が水田跡地であることから、現況表土（耕作土）を約20cmすき取り、造成地の軟弱化を防止するため、盛土中に10m間隔で透水管あるいは繊維系土木シートを埋設するなど排水に留意した。この広場への導入路及び既整備地への連絡路として施工地西側を並走する水路2箇所に覆工板による仮設橋を設置した。本年度の施工面積は10,267m²、工事費は54,590千円であった。なお、この造成地は、1995年3月29日から樅原市主催で開催される藤原京創都1300年記念事業（ロマンティア藤原京）の会場としても利用される予定である。



藤原宮跡整備位置図

1992年度に整備を行った宮跡西辺からの

進入路の北側に苗圃の造成を行い、大極殿周辺における既存支障木の移植を行った。また、昨年度新設した苑路（通学路）の両側に擬木柵（H=1.0m、総延長225m）を設置した。施工面積は5,354m²、工事費は51,940千円であった。

また、藤原宮跡の南東部に位置する案内広場は、昭和58年度に整備を行っていたが、盛土地の周囲に植樹をした程度であった。本年度は、広場中央に粒調碎石舗装を施し、案内板を設置すると共に周囲に張芝を行った。案内板は、陶板製（105×70×2cm）で、凝灰岩の台座に乗せ、広場の北部中央に設置した。説明文には藤原宮・京の概要を記し、飛鳥・藤原地域を示す地図と藤原宮域の地図を加えた。施工面積は2,143m²、工事費は4,017千円である。

（上垣内茂樹）

3 施設整備

飛鳥資料館展示棟増築 平成4年度補正予算により、建設省近畿地方建設局に支出委任し工事を行った。

構造：鉄筋コンクリート造平屋建（地下1階） 建築面積：978.6m² 延床面積：1,688.11m²

外壁：コンクリートの上薄付け仕上塗材吹付け 屋根：いぶし瓦葺き

飛鳥資料館屋外展示解説室新営 平成5年度補正予算により、建設省近畿地方建設局に支出委任し工事を行った。

本建物は、飛鳥資料館の屋外展示物をパネルやAV機器により解説を行うための施設である。売札所の北側に接続し、資料館前庭を流れる川辺に建設した。建物内部より、川越しに前庭が一望できるように壁面をガラス張りとした。正門からの眺望や前庭の景観上できるだけ支障とならないように高さを抑え、壁面をガラス張りの多い建物とした。外観は、資料館本館や売札所に合わせ、瓦葺き建物とした。

構造：鉄筋コンクリート造平屋建 建築面積：66.3m² 延床面積：51.37m²

外壁：コンクリートの上薄付け仕上塗材吹付け 屋根：いぶし瓦葺き

遺物解析・処理棟新館 本建物は、南北56m・東西12mの規模であり、CT棟と大型遺物処理棟の2棟からなる。本建物は、平城資料館の北側に位置し平城宮跡を訪れる人々のメイン通路に面している。通路より東側には宮跡の縁が広がっており、建物の威圧感を少なくするよう資料館の壁面線と合わせた道路後退距離をとり、道路西側に緑地を確保するとともに、建物中央に第3・4収蔵庫への広い通路（幅員8m）を設けるなど、西への閉鎖感を極力抑えた。

本建物は、本施設で行われる研究・作業等も見学できるよう計画した。CT棟廊下では、CT作業室・画像処理室側をガラス張りとし、内部の作業を見学できるようにした。また廊下は展示・解説スペースとしても利用できるように幅を広くとり、解説用AV機器の設置や、パネルの掲示ができるようにした。

大型遺物処理棟では、コントロール室を取り設け、各機器の集中制御を行えるようにした。また、同室の壁面をガラス張りとし、見学者からも内部の作業が見学できるようにした。

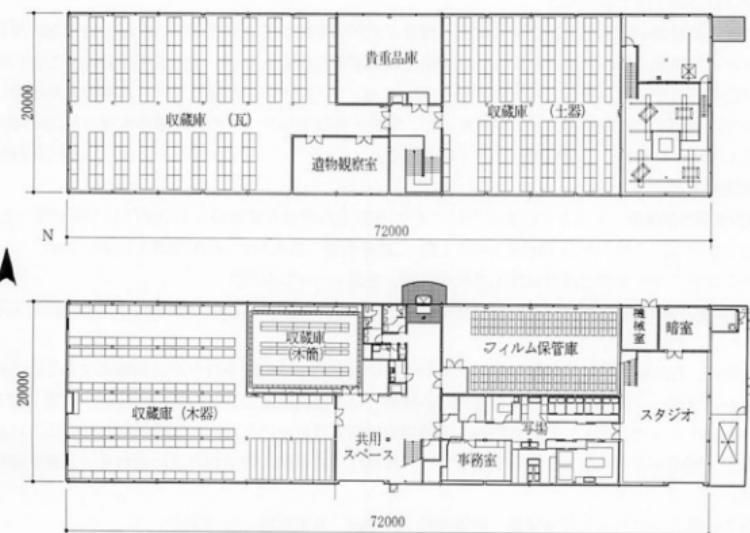
構造：鉄骨造2階建 建築面積：806.40m² 延床面積：962.48m²

外壁：中空押出し成形セメント板の上ウレタン樹脂塗装 屋根：フッ素樹脂鋼板葺き

平城宮跡第5収蔵庫新館 平城宮跡の発掘調査の進捗に伴い出土遺物の増加が著しく、現有の収蔵庫では収納しきれなくなったため第5収蔵庫を建設した。また遺物等の撮影を行う写場を建物の中に計画し、大型遺物の撮影が可能な1、2階を吹き抜けとしたスタジオも設置した。

本建物は、桁行き72m・梁間20m・高さ7mの規模であり、平城資料館の南側佐伯門跡東南部に計画した。建物の方位を資料館に合わせた東西棟とし、外観も資料館に合わせた。現地は、佐伯門跡から東へ延びる宮内道路と近鉄線及び西側の県道に囲われた地域でそれぞれ既に厚みのある土壘や植栽で遮蔽されていることから、この地を選んだ。

各収蔵庫・写場は、防火・防犯を考慮し鉄扉および外装材と同じ中空押出し成形セメント板で防火



第5収蔵庫 1階平面図(下) 2階平面図(上)

区画し独立させた。桁行き72mと長い建物であるため、中央12mに共用スペースを設け両側30mに各収蔵庫・写場を配置した。共用スペースは、玄関・遺物の搬入時の荷降ろし場・各収蔵庫と写場へのアプローチの機能を持たせ、各室をつなぐ空間とした。また南側に吹き抜けを設け、窓は大きなガラス張りとし自然光を出来るだけ取り入れ、オープンな形とした。

構造面では、1) 収蔵庫という用途から900kg/m²の積載荷重が要求される。2) 第1種風致地区的規制により建物の最高高さを7m以下としなければならない。3) 遺構面が計画地盤より約-1m余りである。4) 地耐力が、5t/m²と軟弱である。5) 空気調和設備・換気設備等の配管により大きな天井内寸法が必要になる等の課題がある。これらの課題を解決するため、建物の軽量化をはかり、建物の形を単純化し、荷重を均等化させるような配置計画を行い不等沈下を防ぐよう設計した。基礎は、ベースパック柱脚工法を採用し、根入深さの浅い格子状布基礎とし、荷重の均等分散を計った。また、設備配管（空調・給水・電気）のスペースのため、2階床梁に広幅のH型鋼を使用し、2階床スラブにEデッキプレートを使用することによって小梁・床コンクリート厚を減らし天井内寸法を確保した。

設備面では、フィルム保管庫・貴重品庫は、恒温恒湿空調とした。写場は、暗室等の個室が数多くあることと各室の天井内寸法が十分に取れないなど、個別空調では設置面・保守管理面・ランニングコストで不利となる。このため暗室等の空調は、天井内寸法が比較的確保できる廊下上に空調機を設置し、温度調整された廊下の空気を各室に引き込んで空調する方式をとった。このようにすることによって湿気及び酸が多い暗室での換気不足や空調機等の腐食も防ぐようにした。また建物の外部南側に、木製遺物の保存のためのステンレス製水槽（5m×10m）2基を設置した。

構造：鉄骨造 2階建 建築面積：1,633.00m² 延床面積：2,749.22m²

外壁：中空押し出し成形セメント板の上ウレタン樹脂塗装 屋根：フッ素樹脂鋼板葺き

平城宮跡基幹整備 1968年度より順次建設整備されてきた平城宮跡内の資料館、第3・4収蔵庫周辺の設備配管等（電気・水道・通信・ガス）の経年劣化が著しく、その後の増改築・設備機器の増設により、配管等が複雑化し、改修の必要もでてきた。今年度、第5収蔵庫の新築に伴い設備配管等の増設が必要となったことから、設備配管幹線の整備を行った。整備方法として、メンテナンス性・将来への対応を考慮し共同溝の検討を行い、電気・水道等の宮内引き込み口が資料館西北隅であることから、資料館の北及び東に共同溝の埋設を行った。共同溝内には、電気・水道・通信（電話・LAN）の幹線を収納し、安全のためガス管は、外側に添わす計画をした。共同溝内寸法は、遺構の保護・遺構面高による埋設高の制限や将来の配管スペースを考慮し、地上景観に影響のないよう高さ0.5m、幅1.1mとした。遺構の関係より、共同溝が設置できない部分は多孔管により対処した。

整備延長：共同溝177m 多孔管209m

その他 建設省近畿地方建設局に支出委任し、本庁舎空調改修・平城資料館屋根改修・遺構展示棟改修工事を行った。本庁舎空調改修工事は、冷温水発生機・冷却塔・ファンコイルユニットを更新し、また事務室において機器発停の遠隔操作ができるようにした。平城資料館屋根改修工事は、展示物等が移設できないため、既設屋根の上に新たにフッ素樹脂鋼板で改修を行った。遺構展示棟改修工事は、この地区の既存建物の外壁・内装および照明設備を改修し、受付・身障者用スロープ等の設置を行った。

(坂上定敬・松井敏夫・上垣内茂樹)

4 重要文化財旧米谷家住宅改修

文化庁の支出委任による改修工事を行った。改修内容は、本屋内部では、畳の表替え・建具および障子の補修・土間叩きの補修等である。外部では、井戸蓋の取り替え・井戸の水換え・板塀の補修および土蔵腰壁の防腐処理等を行った。

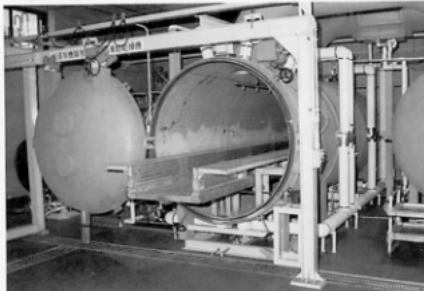
(坂上定敬)

保存科学の新設施設

埋蔵文化財センター

新設の「遺物解析処理棟」は、主に出土木材の保存処理を行う処理セクションと、遺物の構造と材質の調査を行う遺物解析セクションに分かれている。処理セクションには、全自動真空凍結乾燥機、大型PEG含浸装置の2基、遺物解析セクションには、文化財用X線CTスキャナーがそれぞれ配置された。以下、今回導入された装置の特徴について述べる。

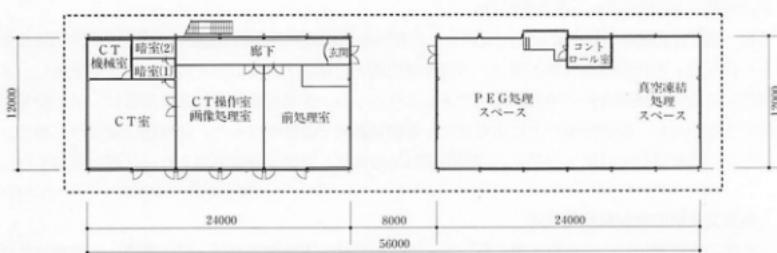
全自動真空凍結乾燥機 わが国で出土する木材をはじめとする有機質考古遺物は、過飽和に水分を含んでいるのが常である。この種の遺物を化学処理して安定させるために従来から行っている方法には、a) 含まれる水分を強制的に除去する方法と、b) 水分を他の安定した物質に置き換える方法がある。真空凍結乾燥法は、これまでにも本筋の保存処理に応用されるなど、a) の中でもっとも信頼度の高い方法である。今回導入した装置は、直径2m、奥行き6mのチャンバーを備え、大型の出土材に対応するとともに、コンピューターによる自動制御機能を持たせているところが大きな特徴である。これまで別のタンクに用意していた前処理用薬剤の自動注入・自動抜き取りが可能となり、処理開始から真空凍結乾燥の最終工程まで、同一チャンバー内で行える。真空度や温度などの諸条件も自動的にパネル表示され、処理の進捗状況が一目で把握できるように設計されている。本装置



全自動真空凍結乾燥機



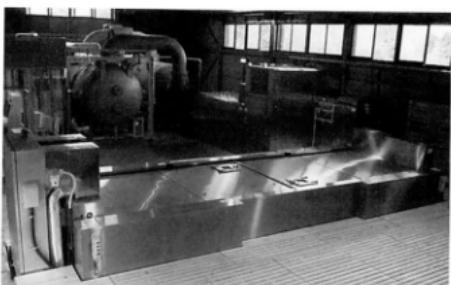
コントロールルーム



により、大型出土材の処理の迅速化が期待されるものである。

大型PEG含浸装置 出土木材に大量に含まれる水分をポリエチレンゴリコール(PEG)という安定な高分子材に置き換える方法では、通常は含有水分をすべてPEGに置き換えることを理想とする。しかし、比較的保存状態の良い木材では、60~80%の濃度の溶液で置き換えた後、常圧で冷風乾燥しても良い結果が得られる場合がある。今回導入した装置には、遺物の保存状態にあわせて、この冷風乾燥も選択できる機能も備えている。また、各処理工程での温度条件の設定やPEG(PEG-4000)の濃度管理・測定なども、コンピュータにより自動制御できるように設計されている。含浸時間の短縮など、保存処理の効率化がはかれるものと期待される。

文化財用X線CTスキャナー 医療の分野では最近すっかりお馴染みになった、非破壊的手法で資料の内部を探る測定装置。X線源として小型加速器を用いることで、肉厚の青銅器などの大型資料の観察が可能となった。また、刀の柄頭などに施された細かい銀象嵌など、小さな資料にも対応できるように微細構造解析システムを備えている。得られる画像情報も、資料を輪切りにする2次元画像だけではなく、資料内部を立体視できる3次元画像の構築や、得られた立体画像をまた平面に展開すること(パノラマ画像の作成)ができる。さらに、画像情報を簡便にデジタル・ハイビジョン化することができる高精細画像解析システムも同時に導入しており、マルチメディア化を先取りしたデータ解析のトータルシステムとしての機能も備えている。これにより、遺物内部の情報が従来より正確に把握できるため、資料の製作技法の解明など、文化財の科学的研究が今後大きく飛躍するものと期待できる。(沢田正昭・村上 隆)



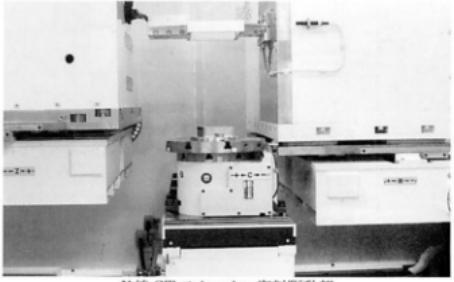
大型PEG含浸装置



大型出土木材の搬入



X線CTスキャナー中央コンソール部



X線CTスキャナー資料駆動部

飛鳥資料館の新営工事

飛鳥資料館

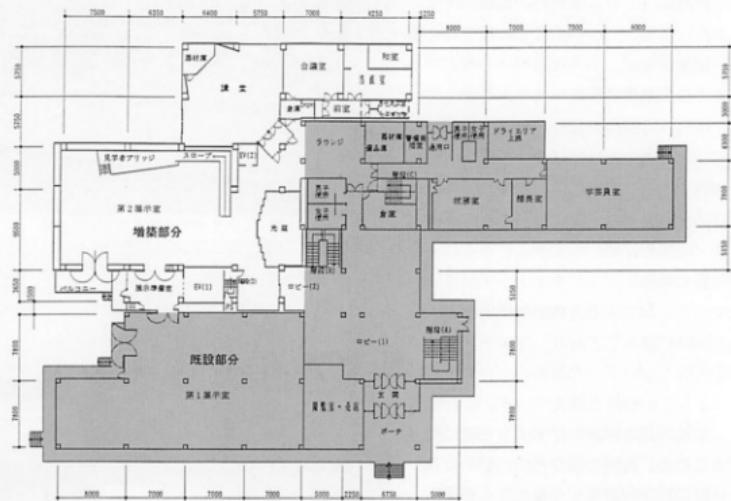
1 増築の趣旨

1975年に開館した飛鳥資料館は、この地域の歴史環境を総合的に紹介する博物館として重要な役割を果たしている。これまで積み重ねられてきた考古学研究の蓄積と、日常的に進められている発掘調査の成果とをふまえた春・秋の特別展・企画展は、そのユニークな企画と分かりやすい内容とで、一般の観覧者や研究者の注目を集めてきた。飛鳥地域の文化財保護の上からも、それを底辺から支える大勢の人々の遺跡への理解をひろめるという面からも、飛鳥資料館の事業の持つ意味は大きいといえよう。館を訪れる人の数も次第に増加し、年間平均20万人にせまるようになり、開館以来の累積入場者の数も300万人を超えていた。このような状況のなかで、本来それほど大勢の観覧者を予想せず、また、大規模な特別展示も計画にいれずにつくられた資料館の建物は、社会的要請に十分応えられなくなっていた。

主な問題点を列挙すれば、

- 1) 常設展示室が狭く、増加する発掘資料、遺構模型の置き場所がない。とくに貴重な文化財として各方面から公開を求められている、山田寺の回廊建築部材の復元展示に対応できない。
- 2) 特別展を開催するための専用のスペースがない。
- 3) 講堂に十分な収容能力がなく、公開講演会で全聴講者の席が用意できない場合が多い。
- 4) 学芸室、書庫が小さく展示準備室もないという状況で、館の日常業務の遂行、図書等の参考資料の収納、展示のための作業に困難がともなう。

等々があり、このような支障を解決するため展示室の拡張を中心として、館の増・改築が実施される



飛鳥資料館 1階平面図

2 工事内容

付図に示したように、現存の建物を北西部に広げる形で、地上1階、地下1階の施設をつくる。ここには第二、第三の新展示室、展示準備室、資料整理室、講堂、会議室および機械室等が置かれる。増設部の建築面積は978m²、延べ床面積は1,688m²。完成後の建物延べ床総面積は4,276m²となる。増設工事にともなって既存部分の改修もおこなう。改修内容は収蔵庫については内装アスペストの除去および扉の付け替え。さらに現展示室の床および天井の改善。書庫の移動。庶務室、学芸室の改装などがある。

設計は半澤重信氏をチーフとして、公建設計がおこない、施工監理は近畿地方建設局、実際の工事は村本建設を主体とする3社が受け持ち、改修工事の一部については松塚建設が担当する。

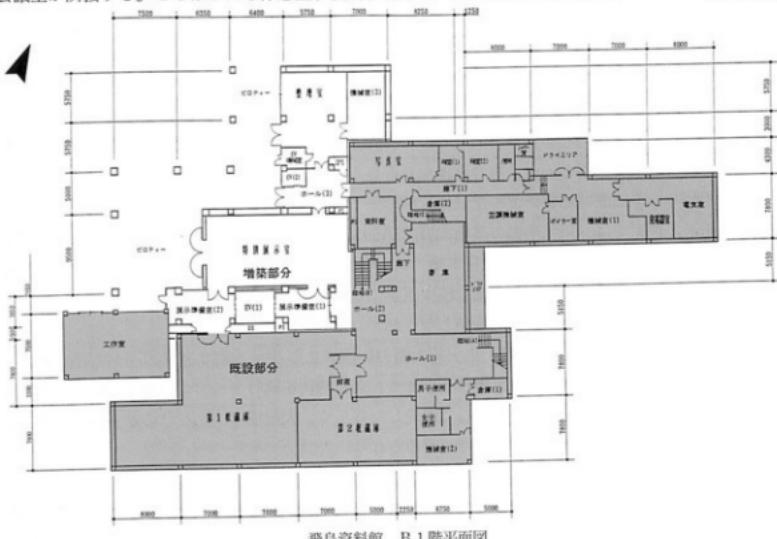
工事期間は1993年7月10日から1994年4月30日。既存部改修の作業のため1993年12月6日から1994年6月30日の期間は休館を余儀なくされることになった。

3 施設説明

第二展示室は一階にある。広さは317m²で、最終的には山田寺の出土部材を使って東回廊の3間分を復元展示する。出土部材の保存処理が完了するまでは、実大の基壇模型を置き、回廊の発掘状況を再現する予定。展示準備室と荷物運搬用リフトが付属する。

第三展示室は168m²で地下、第二展示室の真下におく。収蔵庫および外部ビロティーに直接通じる扉を持つ。これは、おもに特別展示を目的とするため、展示資料の移動の便を考えた配置になっている。ここには部屋を三つに区切れるような形で移動壁を設置する。第三展示室北には資料整理室144m²があって、遺物整理と図面などの資料収納のスペースとなる。

講堂は一階西北隅にあり、広さ133m²。畠傍山、二上山を望む西側を眺望する窓をもつ。入り口前にラウンジがあり、車椅子に対応したエレベーターがここに付く。講堂東側に移動壁で区切った43m²の会議室が隣接する。このほかにも休憩室、便所、地下ホールなどが設けられた。(岩本圭輔)



平城宮小子門の再検討

平城宮跡発掘調査部

平城宮の東張り出し部の入隅に、南面して開く門が、小子門（小子部門・ちいさこべもん、SB5000）である。1966年度の第39次調査によって確認された（『年報1967』pp. 42-45）。平城宮が正方形ではなく、東方に張り出すことを実証した、記念すべき調査である。

小子門の基壇は、遺存状況が劣悪で、盛土と礎石据え付け痕跡の一部が残るにすぎない。そのため、礎石位置も不明確で、正確な平面は把握しがたいとされていた。ところが、今回、東院の遺構復原設計にあたって、小子門の遺構の再検討を行ったところ、実際には、建物規模を確定できることが判明した。同時に、門の創建時期をめぐる從来の見解に、再考の必要があることが明らかとなった。
小子門の平面と位置　門の両脇の溝との関係や、東南隅とその西側に残る二つの礎石据え付け穴、西北隅とその東側の礎石抜き取り・落とし込みの穴、西南隅の礎石落とし込みの穴などに基づき、小子門の平面は、次のように復原することができる。

桁行5間（65尺=10尺+15尺×3+10尺）、梁間2間（30尺=15尺×2）

単位尺長については確定しがたいが、平城宮・平城京の造営尺である0.295~0.296mとみて、矛盾はない。なお、発掘調査で出土した二つの礎石は、いずれも原位置のすぐ脇に落とし込まれたものであることがわかる。この建物規模は、「第一次朝堂院」南門（SB9200、『年報1980』pp. 25-27、『年報1987』pp. 22-23）、「第二次大極殿院」下層閣門（SB11210、『平城宮発掘調査報告XV』pp. 29-30）と同一である。平城宮の門に関する一つの規格として存在したことは疑いない。

ちなみに、現在の小子門復原基壇の建築平面は、梁間に一致するが、桁行で16尺長くなっている（桁行81尺=15尺+17尺×3+15尺、『年報1978』pp. 35-36）。しかし、この復原では、基壇の西北隅が、門と併存する迂回溝SD5050と重複するうえに、礎石据え付け穴とも整合しないことになる。平面の復原に誤りがあることは否定できない。

一方、「平城宮木簡 三」解説は、小子門の平面を、桁行69尺（12尺+15尺×3+12尺）、梁間32尺（16尺×2）と復原する（p. 59 第7表）。しかし、この場合も、遺構と比較すると、柱間がなお過大で、礎石据え付け穴との対応に齟齬をきたしている。

また、復原基壇では、門心が東一坊大路心から2.5mほど西へずれていたが、今回の復原によれば、小子門の心は、東一坊大路の心（条坊計画線）と正しく一致し、こうした問題は解消されることになった。小子門心の平面直角座標系上の位置は、(X=-145,729.6, Y=-18,054.9)である。

なお、從来の復原では、東院南面の築地大垣（SA5055）が小子門の棟通りにとりつかず、北へずれた位置に接続するとなっていた（『平城宮木簡 三』解説 p. 19 第3図ほか）。しかし、再検討の結果、南面築地大垣は、先行する下層の掘立柱東西塀（SA5010）の直上に構築されたと見てよく、ともに小子門の棟通りにとりつくことが明らかとなった。

小子門の創建時期　小子門の両脇には、東一坊大路の両側溝につながる南北方向の溝が掘削されている。このうち、東側溝（SD5030）は、規模も小さく、奈良時代を通じて一定の位置を保つ。一方、西側溝は、平城宮内の基幹排水路の一つとして機能したらしく、大規模で、かなりの水量があったことを示している。これには、数回の作り替えが認められる。

当初の西側溝は、直流するSD4951で、これを屈折させて西へ迂回させたものがSD5100、さらに屈曲部を緩やかなものに改造したのが、SD5050である。それぞれの溝の堆積土中から出土した木簡の年紀を指標として、SD4951からSD5100への付け替えは神亀年間（724~729）、SD5100からSD5050への

改造は、神護景雲年間（767～770）以降と推定されている（『平城宮木簡 三』解説 pp. 18-24）。

従来は、こうした溝の迂回措置を、小子門の創建に伴うものとみなしていた。つまり、門の規模を過大に想定した関係上、SD4951と小子門の併存はありえず、SD4951が機能していた時期には、門が存在しなかったと考えたのである。そして、門の建設は、SD4951からSD5100への付け替えと一連のもので、その時期は、SD4951の堆積土中から出土した木簡の年紀が、神亀二年（725）を下限とすることから、神亀年間に降るとされたわけである。

しかし、小子門の平面が前記のように確定すると、これの創建年代を下降させていた根拠は、消失することになる。門とSD4951は、当初から併存したとみて支障はないからである。むしろ、溝の付け替えは、西側溝の流量が、東側溝SD5030に比べて著しく多い関係から、増水時の基壇端の侵食による崩壊を回避するために、のちになってとられた措置と考えることができる。少なくとも、溝の改造が、小子門の創建時期を左右するものでないことは明らかであろう。

逆に、門の創建時期を示唆するものとして、東院造営当初に瀕る下層の掘立柱塀（SA5010）が、小子門の基壇内で検出されていないという事実に注目したい。とくに基壇西半部では、サブトレニチまで入れているにもかかわらず、確認されなかった。これは、掘立柱塀（SA5010）が、小子門に先行するのではなく、最初から小子門にとりつくかたちで存在していたことを窺わせるものである。小子門の創建は、平城宮の造営当初に瀕る可能性が高いといえよう。

（小沢 譲）



平城宮小子門の復原 1:250 単位m、() 尺

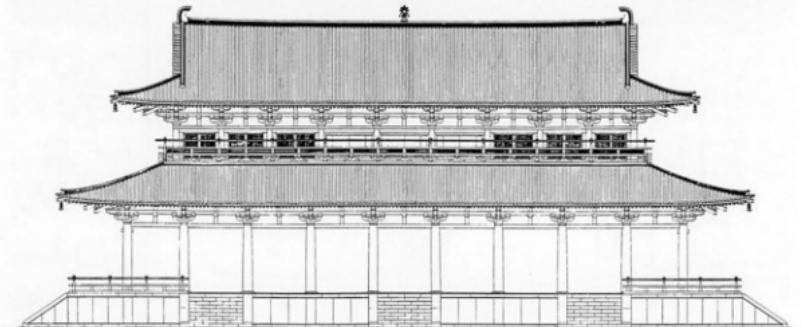
平城宮第一次大極殿院復原模型の製作

平城宮跡発掘調査部

1989年度からはじまった特別研究「平城宮第一次大極殿院地区の復原整備のための基礎調査」の一環として、本年度は大極殿院全体の地形と建築を復原した100分の1スケールの模型を設計・製作した。昨年度の復原設計部会の検討結果に基づき、第1—2期の大極殿・後殿・閤門・東楼・築地回廊・軒廊・地形の設計を分担して進めるとともに、設計過程のいくつかの段階において、復原設計部会もしくは小部会を開催し、細部の修正をはかった。設計は、大極殿・後殿・閤門を松田敏行（松田社寺企画）、東楼と築地回廊を浅川滋男、軒廊を長尾充、地形を内田和伸が担当し、全体を鈴木嘉吉が監修した。各建物の復原の考え方について、『平城宮発掘調査報告 XI』（1982年、以下「『平城』XI」と略称）の結論と対比させながら以下に概説しておく。なお設計寸法は、1尺=29.54cmとした。

大極殿 SB7200 遺構としては、基壇南北両面および階段の地覆抜取り跡の一部が残るにすぎない。『平城』XIでは、基壇の南北幅が29.5m（100尺）に復原されうることと、階段幅5.0m（17尺）が桁行柱間に相当することから、基壇規模を東西180尺×南北100尺、建物を桁行9間（17尺等間）、梁間4間（17尺+18尺×2+17尺）の四面庇付平面に復原している。ところが、1992年4月の第1回復原設計部会において、藤原宮大極殿が平城宮第一次大極殿を経由して恭仁宮大極殿に移建されたという小沢毅氏の新見解が発表され、SB7200の平面に若干の修正が加えられた。小沢氏の考えに従うと、柱位置および基壇範囲の確定している恭仁宮大極殿と平城宮第一次大極殿は同規模であり、庇の出は4面とも15尺、基壇は東西181尺×南北98尺に復原される（詳細は「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」「考古論集」1993年3月を参照）。構造形式の復原にあたっては、まず単層か重層かという問題があるが、「本朝文粹」巻九に平安宮大極殿を「重軒」と表現する記載があることなどから（『平城』XIV p.180 参照）、重層と推定した。また、屋根が入母屋造か寄棟造かという問題もあるが、昨年来、入母屋案と寄棟案を比較検討してきた結果、主として意匠上の理由から、今回の復原模型では入母屋案を採用することにした（寄棟案を否定するものではない）。なお、重層の平面は桁行9間（12尺+13尺+14尺+15尺×3+14尺+13尺+12尺）、梁間3間（12尺+16尺+12尺）と考えた。

基壇高は、階段の出などから9.3尺に復原した。また、平面の新復原案によると、基壇の出は16尺となる。この場合、軒の出は17尺以上が望ましかろうが、構造上の限界から、初層・重層とも16尺にとどめた。軒は二軒で、組物は薬師寺東塔スタイルの三手先とした。このほか、高欄は法隆寺金堂、身



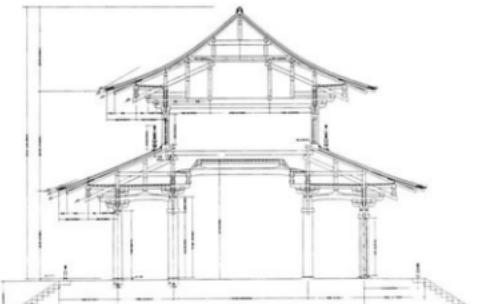
第一次大極殿正面図 1:400

舎天井は唐招提寺金堂、基壇は唐招提寺講堂の細部にならった。柱間装置は『年中行事絵巻』にみえる大極殿の描写を尊重して、正面全面を開放とした。

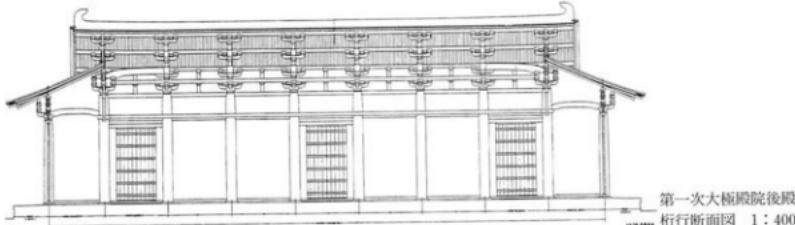
後殿 SB8120 北側の軒廊にとりつくり入隅部分および基壇西側の雨落溝1.4m分しか遺構が残っていない。そこで、まず平城宮第二次大極殿院の平面をみると、大極殿と後殿の建物桁行柱間および基壇の東西長を同寸法にそろえている。第一次大極殿院

においても、基壇西側の雨落溝の位置からみて、後殿と大極殿の桁行規模が同じであった可能性がある。梁行方向については規模は不明だが、かりに第二次大極殿院後殿と等しく梁間2間だとすると、後殿と大極殿との距離が開きすぎる点に多少の難がある。今回の復原では『平城』XIの見解を踏襲し、大極殿と桁行寸法をそろえた7間4面の単層建物と考えた。ただし、梁行方向については、身舎の柱間を『平城』XIよりも1尺縮めて17尺とした。この場合、平面は桁行9間(15尺+17尺×7+15尺)、梁間4間(15尺+17尺×2+15尺)となる。また、西雨落溝との関係から基壇の出は9.6尺に復原される。このため、軒は二軒で出を10.5尺とし、組物は東大寺法華堂式の出組を採用した。このほか基壇は、唐招提寺金堂の様式にならった。柱間装置については、『年中行事絵巻』にみえる小安殿の表現を参照し、大極殿とおなじく前面開放とした。

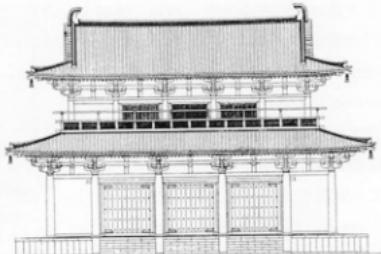
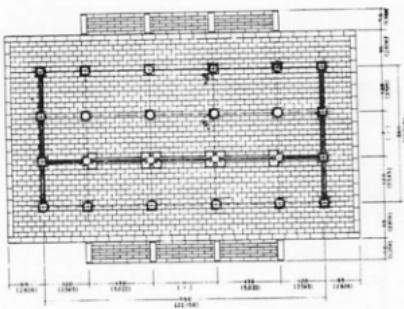
閻門 SB7801 柱位置を示す礎石据付け遺構は残らず、基壇の掘込み地業、基壇北縁の礎敷雨落溝および地覆抜取跡、北面階段の痕跡しかみつかっていない。『平城』XIでは基壇の規模を東西約28m(94尺)×南北約16.2m(55尺)と推定し、桁行5間(15尺+17尺×3+15尺)×梁間2間(20尺等間)の単層切妻造建物に復原している。しかし『統日本紀』には、元明天皇が和銅三年正月十六日に「重閻門に御して宴を文武百官並びに隼人・蝦夷に賜ひ、諸方の樂を奏す……」との記載があり、ここにいう「重閻門」が第一次大極殿院の閻門である可能性が大きい。また、平面についても、『平城』XIでは梁間を2間とみなし、その柱間寸法を20尺とするところに構造上の難がある。以上から、この閻門は、法隆寺中門式の梁間3間の重層門に復原するのが妥当であり、平面は初層が桁行5間[12尺+17尺×3+12尺]×梁間3間(12尺等間)、重層が桁行5間(12尺+13尺×3+12尺)×梁間2間(12尺等間)と推定し、屋根は入母屋造とした。この場合、基壇の出は四周とも9.5尺となるから、軒の出は10.5尺で二軒に復原し、組物は二手先とした。ところが、周知のように、奈良時代の現存建物に二手先組物を使



第一次大極殿梁行断面図 1:400



第一次大極殿院後殿
桁行断面図 1:400



第一次大極殿院閑門正面図 1:400

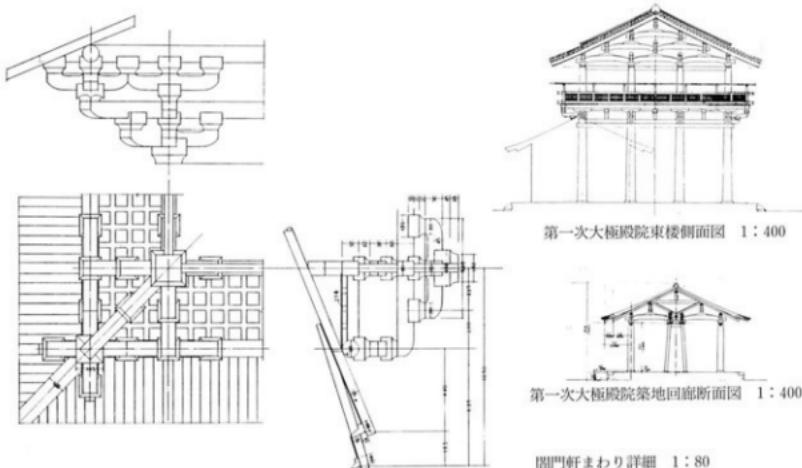
第一次大極殿院閑門平面図 1:400

う遺構は残っていない。そこで、西安の慈恩寺大雁塔欄石に線刻された仏殿図の細部を参照して復原を試みた。この場合、とくに隅の納まりがユニークなものとなる。桁をうける5つの卷斗が、わずかに長さの異なる2つの肘木にのるのだが、この2つの肘木を一本造出しとするのである。このほか、扉まわりや高欄などは、ほぼ復原朱雀門の細部に準じている。

東樓 SB7802 柱位置の確定している唯一の建築遺構である。桁行5間(15.5尺等間)×梁間3間(13尺等間)の総柱式東西棟で、側柱を掘立柱、内部の柱を礎石建とするところに大きな特徴がある。また、深さ2.5m以上もある掘立柱穴の一つからは、根がらみを伴う径75cmの柱根が出土しており、楼閣建築の通柱として用いられた可能性が大きい。一方、内側の礎石建柱は2階の床を支える東柱とみればよいだろう。『平城』XIでは、以上の出土データから、2階に高欄をめぐらせた楼閣建築に復原し、屋根を入母屋造として、内部に長さ39尺の大虹梁を架けている。しかしながら、梁間3間の通柱式という遺構の特徴を素直に尊重するならば、切妻造の楼閣に復原するほうが無難だろう。この場合、小屋組および妻飾りが大きな問題となる。梁間が3間と広くなる場合、2重虹梁蓋股形式では適当な屋根勾配が確保できないし、又首構造では大極殿関連施設の意匠として貧弱すぎるからである。そこで、今回の復原では3重虹梁蓋股の構造形式を採用することにした。3重虹梁というと、突飛な発想だと思われるかもしれないが、『年中行事絵巻』にみえる建礼門は3重虹梁、待賢門は4重虹梁を妻飾りとしており、『信貴山縁起絵巻』にみえる内裏東門の妻飾りも4重虹梁に描かれている。すなわち、少なくとも平安時代においては、宮中の門の妻飾りに3重虹梁もしくは4重虹梁を採用していたわけで、平城宮大極殿院閑門脇の楼閣が3重虹梁蓋股形式だとしても、さほど不自然ではなかろう。

SB7802は基壇の出が8尺に確定しており、軒は二軒で出が8.7尺、組物は平三斗に復原した。なお、この楼閣は楽台もしくは望楼のような機能が推定されるため、2階の正面・背面をいずれも開放とし、両側面3間すべてを白壁と推定した。

築地回廊 SC5500・5600・8098 南面築地回廊 SC5600東半では、柱の礎石据付け遺構がよく残っている。桁行方向の柱間寸法は、連続する15間が15.5尺等間だが、閑門のとりつき部分は13.7尺と短く、隅の2間も築地心から柱心までの距離とおなじく12尺等間となる。既述のように、閑門は桁行5間とみなされるので、南面の総柱間数は41間となる。基壇幅は、掘込み地業および北縁の地覆跡などから36.6尺に復原した。回廊中央の築地は遺構が検出されていないけれども、閑門の軒高よりも回廊の棟高を低くする必要があることなどから、基底幅4尺、高さ13尺と推定した。小屋組について『平城』XIは、門に多用される三棟造を築地回廊にも応用しているが、そうすると、築地心上にのる組物が回廊を歩く人の視野におさまらない。今回の復原では、視覚上の配慮から、築地上面の両端に台輪をとおして、



柱筋位置にふたつの大斗を対称におき、柱上の大斗とのあいだに虹梁をわたす新形式を採用した。ただし、この手法も回廊隅の納まりに若干の問題がある。軒の出は7尺、二軒で組物は平三斗とした。

東面築地回廊SC5500はわずかに基壇遺構を残すのみで、柱位置は不明である。今回の復原では、南面回廊桁行柱間の基準寸法（隅2間のみ12尺で他は15.5尺）を東面にも採用し、なおかつほぼ中央の位置に三間門（13尺+15.5尺+13尺）を設けた。これにより南面回廊と北面回廊の心々距離が座標値とほぼ一致し、東西両回廊の総柱間数は71間に復原できる（『平城』XIは基準尺=29.41cmとして72間とする）。なお、三間門は単層切妻造とし、軒の出は回廊にそろえた。遺構の残りが最もわるい北面回廊SC8098についても、南面の基準柱間寸法を採用した。ただし、後殿への入口となる中軸線上に、東面と同規模の三間門を設けたので、後門への取り付き部分のみ、柱間寸法が15尺となる。北面の総柱間数も、南面とおなじく41間である。なお、東・西・北面では、三間門と回廊隅のほぼ中間に柱間1間の穴門も設けた。

軒廊 後殿基壇に接続する入隅部分の雨落溝痕跡から、北面回廊と後殿をつなぐ軒廊は、基壇幅が4.4m、長さが6.7mに復原できる。柱位置はわかっていないが、今回は桁行2間（10尺等間）×梁間1間（10尺）と推定した。軒の出は4尺、一軒で組物は平三斗とした。また、後殿と大極殿をつなぐ軒廊は、遺構がまったく検出されていないが、平城宮第二次大極殿では軒廊の礎石遺構が残り、『年中行事絵巻』にもその表現がみられることから、推定復原することにした。梁行の柱間寸法は、大極殿および後殿の身舎桁行柱間寸法とそろえて17尺とした。軒の出や組物は、北側の軒廊とおなじである。桁行方向は15尺×5間とし、南端の柱は大極殿基壇上面に立てたので、屋根のカーブがかなり曲率の大きなものとなった。なお、今回の復原では、大極殿→後殿間の軒廊を、大極殿背面の扉想定位置にあわせて3条設けたが、平城宮第二次大極殿のように、中央の1条のみであった可能性もある。

以上のように、今回の模型製作では、『平城』XI段階での見解をかなり大きく修正した復原を試みてみた。これから大極殿本体の10分の1スケールの模型製作をへて、建物そのものの復原へと作業は進むわけだが、100分の1スケールの模型が完成したことにより、ようやく復原の叩き台となるスタート・ラインにたどりついたといえよう。

（浅川滋男）

地形と土木施設 模型製作の範囲は東西275m、南北390mの範囲であり、仕上がりは290cm×400cmとなる。なお、模型製作範囲の約半分について、すでに発掘調査が完了している。

①**地形復原の方法** 当時の地形を復原するにあたっては、『平城』²¹に記される第I—2期の遺構から標高を想定した。具体的には次の方法により行った。まず、築地回廊で囲まれている南3分の2にあたる広場地区では、疊敷面や石敷面を当時の地表面とみることができる。一方、大極殿や後殿を配する北方の殿舎地区や溝底のみが残るような削平の著しい部分では、周辺地形との整合性や排水の合理性を考慮した上で当時の地表の高さを推定した。発掘調査において、第I—2期の下層遺構まで発掘した部分では、土層観察用の畦からその標高を推定した。佐紀池から続く南北溝は、第28次調査でその一部を検出し、第92次調査ではその北端を検出している。その他の未発掘部分の溝肩の標高は、双方のデータから比例配分する方法をとった。さらに、築地回廊で囲まれる区域の西半部は未発掘の部分が多いので、この部分の標高については、その全容がほぼ明らかになっている東半部の成果を中軸線から対称におりかえし、復原した。

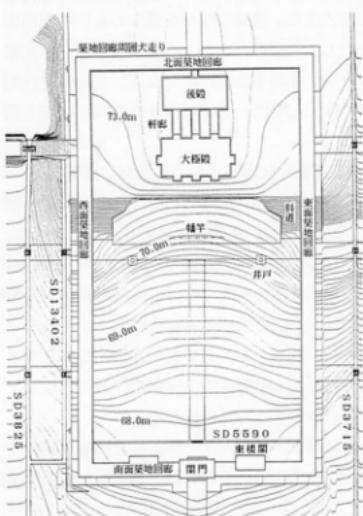
②**殿舎地区の地形** 後殿が位置する地盤を最高地点とし、斜道方向に向かって穏やかに傾斜する平場を想定した。

③**斜道 SF9232A** 斜道は南面する埠積擁壁の位置にその上端を合わせ、比高2.1m、長さ31.7m、勾配6.6%とした。斜面の舗装には方墻を想定した。なお東西両面の築地回廊は斜道に合わせて基壇の勾配を変えている。

④**広場地区の地形** 地形は全体には北から南へ緩やかに傾斜するが、雨水は中央部以北では中軸線に向かって集まり、南端部で東西の築地回廊隅から外に排出されると考えた。

⑤**築地回廊周囲犬走り** 築地回廊の外側には、回廊幅の約半分にあたる17尺の通路状の平場を設けた。

⑥**南北溝 SD13402** 南北溝 SD13402と対称の位置にある東外郭の南北溝 SD3765は、朝堂院の北を限る塀 SA5551の増設により埋め立てられるが、SD13402はその後も存続するため、南端は南面築地回廊



復原地形図 1:4000

基壇北縁に平行する暗渠排水を受けて、西に方向を変えるものと推定した。北端は佐紀池南堤とした。

⑦**南北溝 SD3825** 第28次調査で検出した南北溝 SD3825をそのまま北へ延長すると、第92次調査で検出した南北溝 SD8198とは約1.5mのずれを生ずる。したがって、SD3825は途中でやや方向を変えるものと想定した。

⑧**佐紀池南堤** 平城宮西面北門から東に伸びる道路を幅員12mで回廊周囲を巡る犬走りまで延長し、佐紀池の南堤と兼用する構造を考えた。南北溝 SD3825との交差部分には開渠を想定し、そこに高欄付き平橋を設けた。

⑨**佐紀池の堰 SX8192** 柱間16尺で、堰板を差し込む構造とした。堰板の天端は佐紀池の水面高で、標高69.7mである。堰に近い池岸にはしがらみによる直線状の土留めを設けた。

⑩**植栽** 樹種及びその位置は根拠に乏しいが、回廊の外側に常緑樹と松を配した。

(内田和伸)

平城宮第一次大極殿院地区 復原整備のための基礎調査

当研究所は各分野の学識経験者に参加を依頼し、平成元年度から平城宮第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査を行っている。5年目にあたる本年度は第一次大極殿院建物群の復原設計を行ない、その詳細を検討する作業と、復原される第一次大極殿院建物群の活用・運営方法を検討する作業を行なった。つまり、平城宮遺跡博物館（仮称）の中核施設である第一次大極殿院の復原についてそのハード・ソフト両面に関する調査である。

ハード面に関する調査は建物復原図を作成し、この案に基づく①1/100模型の製作と、同じく②コンピューター・グラフィックス（以下、C.Gと略す）の作成を行ない、復原案の妥当性を検討した。

ソフト面に関する調査は、③博物館等の企画・運営に実績のある専門家を招いて、当研究所員を含めた研究会を行ない、遺跡博物館のあり方を検討する作業と、④海外における大規模遺跡博物館の現況・問題点を把握する調査を行なった。

①の復原模型の製作については別項を設けたのでこれを参照されたい。ここでは②・③・④の調査の概要を紹介する。

②C.Gの作成 第一次大極殿院の復原C.Gによる調査については、平成2～4年度における本調査の中で市販の簡易C.Gソフトを用いて作成し、主に建物全体がおよぼす景観的影響を検討する作業を行なっているが、本年度はさらに詳細な復原設計図に基づくC.Gを作成し、建物の外観および内部空間を視覚的に捉えるシミュレーションを行なった。次年度はこのC.Gを用いて公開・活用面の検討や、展示用アニメーションビデオ作成を行ないたいと考えている。

③平城宮第一次大極殿院地区復原整備研究会 遺跡博物館の将来的なあり方を検討するために研究所員を対象に標記研究会を開いた。会はパネルディスカッション形式で、はじめに5人のパネラーにそれぞれ関連するテーマの話題提供をいただき、その後、渡辺定夫先生の司会で討議を行なった。5人のパネラーと話題は以下のとおりである。話題提供、討議のなかでさまざまな異なる視点からの提言や問題提起があり、これらは今後の計画に反映させていきたいと考えている。

- | | |
|------------------------|-----------------|
| (1) 平城宮跡整備の現状と遺跡博物館構想 | 平城宮跡発掘調査部長 町田 章 |
| (2) ハウステンボスで考えたこと | 池田研究室代表 池田 武邦 |
| (3) 遺跡博物館と展示について | 丹青研究所研究顧問 佐々木朝登 |
| (4) 関西学術研究都市構想における平城宮跡 | 奈良県企画部開発局長 藤原 昭 |
| (5) 奈良市（都市）における平城宮跡 | 東京大学名誉教授 渡辺 定夫 |

④海外事例調査 当研究所の高瀬要一・小林謙一・小野健吉と、本調査の委託先である株式会社都市計画設計研究所の今枝忠彦の4名がイタリア・ギリシャ・トルコの大規模遺跡（ポンペイ・アクロポリス・クノッソス・エフェソス等）および博物館（ナゴリ博物館・ギリシャ国立考古学博物館・イスタンブル考古学博物館・トプカプ宮殿等）の現状調査を行なった（1993年10月4日～22日）。遺跡では修理・復原・公開方法・利用現況などを主として調査し、博物館では展示方法・来訪者数・サービス施設などを調査した。遺跡は石灰岩やレンガからなる構造物であり、発掘の後、修復し見学に供する方法が基本であり、建物を復原する整備は少ないが、唯一例外であったのはギリシャのアテネにあるアゴラの遺跡で長大なストアの建物を1棟復原し、展示館として有効に活用しており、平城宮の復原建物の活用方法を考える上で、参考になると思った。

（高瀬要一）

アンコール文化遺産保護に関する共同研究

プノンペン西郊外の、ボチェントン国際空港を飛び立ったカンプチアエアラインの双発機は、東南アジア最大の湖であるトンレ＝サップ湖の上空を飛行し、約45分でアンコール観光の拠点都市シェムリアップ空港に到着する。滑走路に近づくにつれ、機の前方には西バライの広大な水面が広がり、旋回し始めた機の右手には、密林の中に、アンコール＝ワットの尖塔がわずかに先端を見せる。アンコール文化遺産の調査は、いつもこの光景から始まる。

この地に最初の都城を建設したのは、アンコール王朝第4代の王ヤショヴァルマン1世、9世紀末のことである。その後、代替わりに伴う遷都を経ながらも、15世紀にアンコール王朝が崩壊するまで、広大な都城が維持された。今見る都城と寺院は、12世紀から13世紀前半に整備されたものが多い。

文化庁では、平成5年度から、アンコール文化遺産保護に関する共同研究を開始した。具体的には遺跡探査・写真測量・石像建造物等の劣化対策・発掘技術・修復技術及び保存科学・広域遺跡整備の6点の重点項目についての共同研究をめざしている。

具体的には、現地への研究員の派遣と、カンボディア研究者の招聘が中心の事業となる。派遣事業においては、初年度ということもあり、まず現地の状況を把握するとともに、カンボディア王国の文化財保護行政組織についての現状認識を目的とした調査活動を行った。まず11月に予備調査として3名を派遣した。文化省関係者と会談を行い、共同研究の主旨や方法を説明した。3月には現地調査として4名を派遣した。現地を視察するとともに、気象データの部分的な収集も行った。同時に、上智大学が行っていた発掘調査に参加した。

招聘事業では、4名の研究者を1月22日から3月11日までの50日間にわたって日本に招き、埋蔵文化財センターを中心に研修を行うとともに、広域遺跡整備の状況について、国内各地の視察を行った。事業の進展に伴い、7月と2月に検討委員会を開催し、結果の報告、事業内容の検討等を行った。

計画は緒についたばかりであるが、3月の調査時には、招聘を終えたカンボディア研究者の方々にいろいろな便宜を図っていただきなど、共同研究の成果は、徐々にではあるが、目に見えるものとなりつつある。このような文化面での援助事業は、短期間ではなかなか目立った成果を上げにくい。今後本共同研究を地道に進めていくことによって、アンコール文化遺産の保護修復の進展と、技術の向上に何らかの貢献ができるであろう。

(杉山 洋)

交河故城の調査

交河故城は、中国新疆ウイグル自治区の都市遺跡で、シルクロード天山南路の要衝トルファンの西方約10kmに位置する。唐代を中心とし、遺存状態が非常に良好な点でよく知られているが、乾燥地帯の厳しい自然環境にさらされているため、部分的にはかなり崩壊が進行しつつある。そこで、ユネスコの文化遺産保存日本信託基金により、1992年から3箇年の計画で保存修復を行うことになった。

計画では、将来にわたる遺跡全体の保存のマスタープランの策定、洪水対策など緊急性を伴う事業、一部を対象とした実際の修復作業を予定している。今回は、昨年の予備調査と概況調査を承けた初の本格的調査であり、当研究所からは伊東太作・佐川正敏・小沢毅の3名が参加した。

当初の予定では、修復のモデルとして選んだ「西北小寺院」について、復元の資料を得るために発掘調査を、日中共同で実施することになっていた。しかし、諸般の事情から、発掘調査は新疆文物考古研究所が単独ですでに実施しており、日本側のメンバーは、主として発掘後の西北小寺院の詳細な観察と、立面の写真測量・基準点測量を行なうことにどまった。

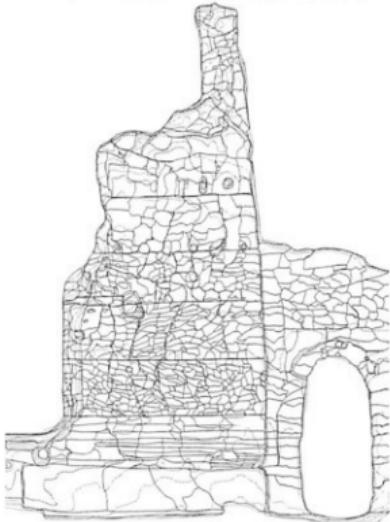
西北小寺院は、一辺約22mの正方形の平面をもつ仏教寺院である。南を正面として、中央北寄りに仏塔をおく。仏塔は、現在では破壊されて痕跡をとどめず、それを囲む周壁のみが残存している。この三方に回廊がめぐり、南面は、一段高い壇となる。東西の回廊の外側には、僧房を配する。僧房の一部は、厨房として使用されたらしく、竈の煙道が多数残る。そのほか、入口の左右には、東西に連続する地下室や、見張り台とみられる施設も備えていた。寺院の壁体の構築は、以下の方法による。

1) 壁体部分を残して地山を掘り下げる。2) 地山上面の起伏をならすため、壁体の上に部分的に版築を加えて、水平な基底面をつくる。3) 基底面の上に板張を設置し、その間に未乾燥の生煉瓦を積み上げる。この作業を壁の全周にわたって繰り返し、それを重ねることによって高い壁を形成する。

また、この寺院の屋根は、向い合う壁の一部を掘りくぼめ、そこを基底として、日乾し煉瓦を芯とする蒲鉾形の天井(ヴォールト vault)をかける構造である。ところが、これ以外の交河故城の仏教寺院の屋根は、ほとんどがヴォールトではなく、垂木による架構方式をとる。そして一部では、垂木からヴォールトへの改変も行われている。したがって、大局的に見て、この地域の屋根架構が、垂木構造の平らな屋根から、ヴォールト構造の蒲鉾形の屋根へと変化したことは疑いない。おそらく、西北小寺院の創建は、交河故城のほかの寺院よりも遅れるのであろう。

しかしながら、こうした建築構造の復原や、実際の修復方法に関して、日中両国の見解が必ずしも一致しているわけではない。それらの相違点については、現地協議の際に日本側の意見として伝え、またユネスコへ提出した成果報告の中にも明記した。今後、両国の研究者による充分な討議と共同研究が、さらに実りある成果を生むことを望むものである。

(小沢 毅)



西北小寺院 仏塔周壁（部分） 1:70

中国における秦漢代の瓦調査

1994年3月3日から20日まで、中国社会科学院考古研究所と共同して、中国秦漢代の瓦に関する調査をおこなった。これは日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金をえて、古都調査保存協力会の平成5年度事業として実施したものである。研究所からは5名（黒崎直・毛利光俊彦・大脇潤・牛島茂・岸本直文）が参加し、中国社会科学院考古研究所の洛陽工作站と西安研究室で資料調査をおこなった。洛陽での調査は当初の予定になかったが、快諾をいただき、「洛陽中州路」（1959年）に報告されている遺物を中心に、漢魏洛陽城・隋唐洛陽城の資料を調査した。西安では、前漢第9代の皇帝である宣帝の杜陵の陵園出土資料、秦漢代の樸陽城および前漢の高祖劉邦が父親のためにつくった太上皇陵の資料を準備いただいた。両者をあわせて計157点について観察のうえ写真撮影し、必要なものの実測・探拓などの作業をおこなった。

今回、おもに秦漢代の瓦を対象として資料調査をおこない、軒丸瓦の製作技術の上で前漢代が大きな変革期であったことを確認した。あわせて、そこにいたるまでの中国の瓦の起源と発達について関心をはらい、見学に足を伸ばした各所でも、展示されている瓦について可能なかぎり観察した。そこで、西周にさかのぼる中国の瓦の発展過程を概観した上で、前漢代の技術革新についてふれよう。

西周の初期に生まれた最古の瓦は、新石器時代の龍山文化期以来つくられてきた上・下水道用の土管（陶水管）を母体とする。つまり、粘土紐（泥条）を巻き上げて（盤築）、内面に当て具をあて、タキによって成形した土管を、2分割ないし3・4分割することによって曲率をもった瓦としたのである。当時まだ草葺きであった宮殿の棟にまず使われ、やがて屋根の谷部分や軒先などに葺くようになり、西周中期には屋根全面を葺くまでにいたる。この間に、より曲率の緩い瓦をならべ、その隙間を曲率の強い瓦で覆うことが定まり、平瓦と丸瓦に分化する。

西周中期のBC10世紀の頃には、軒先のために瓦当部をとりつけた軒丸瓦が出現する。瓦当となる粘土円盤の上に粘土円筒を形づくり、ヘラ切り、のちには糸切りによって半截して二つの軒丸瓦をえた。これが半瓦当と呼ばれる半円の瓦当をもつ軒丸瓦である。無文のものから、ヘラ描きの文様を入れるようになり、戦国時代に入ったBC4～3世紀には、文様を刻んだ範型におしつけて同じ文様の軒丸瓦をつくることが始まる。やがて戦国時代のうちには円瓦当が現われ、秦漢代以降に主流となる。

前漢に入ると、これまでの製作技術に変化がおこる。丸瓦部の成形に模骨を使うことが始まるのである。今回の調査で、模骨を使い始めた頃の一技法を新たに確認することができた。それは「分解式模骨」（仮称）というべきもので、西安研究室での樸陽城および太上皇陵出土瓦の観察から推定するものである。これらは、丸瓦凹面が平滑で布目をともなうことから、模骨に布をかぶせ粘土紐を巻上げ

瓦当裏面にのこる「分解式模骨」の痕跡（左・中 横陽城出土、右 太上皇陵出土）

て成形したことは明らかである。これらの瓦当裏面は平らではなく、3ないし4面から構成されていて、段差をともない、面の境にバリ状のはみ出しがある(写真)。したがって、複数の材を組み合せた模骨であったことは間違いない。大きさは圓丸長方形の中心材と、それを両側から包む三日月形の側材の三つからなる。丸瓦部を瓦当と一体としてつくることに変りはないので、玉縁のつく丸瓦狹端側から模骨を抜かなければならず、一本ではなく組み合わせにする必要があったと考えられる。まず中心材を引き抜き、側材を内側にはずして抜き、引き続いて布を取り去ったあと、丸瓦を半蔵して軒丸瓦をえたのである(下図)。こうして丸瓦部の成形に型が導入され、製品の規格性をより高めるとともに量産が可能となったであろう。なお、こうした瓦当裏面に組み合わせ模骨の圧痕を残すものに限って、瓦当中央に穿孔が認められる場合が多い。これは瓦籠に取り付けられたピンによるもので、模骨にあけられた孔に通することで、瓦当の心と模骨の心を合わせる工夫であったと考えている。

やがて、前漢中頃のBC100年前後には、あらかじめ別につくった丸瓦を瓦当に取り付ける方法が登場する。それまでの製作技術が、瓦当と丸瓦部を一体として作るもので、日本でいうところの一本作りであったのに対し、この段階で接合式へと転換するのである。今回調査した杜陵陵園(宣帝の没年はBC49年)出土の一括資料が、すべてこの方法による製品であった。その後は、瓦当と丸瓦の離脱を防ぐ工夫を重ねながら、この接合式による軒丸瓦の製作が発展していく。百濟から伝來した日本古代の軒丸瓦の大多数は、この方法による。

以上のように、長い間にわたって続いた粘土紐巻き上げタタキ成形による軒丸瓦の製作が、前漢代には模骨を使った丸瓦を瓦当に接合する方法へと大きく転換する。今回、明らかにできた「分解式模骨」を使う方法は、模骨を使いながらも従来の成形方法をとるもので、この転換にいたる前段階に試みられた一技法と位置づけることができる。これまでにも、瓦当裏面の凹凸については注意されていたが、実物資料の観察によって、その製作技術を推定できることは大きな成果である。この技術は、秦末から前漢初頭に登場し、前漢中頃までのごく短い期間におこなわれたらしい。また接合式への転換については、BC87年に没した前漢第7代の武帝の茂陵から接合式の軒丸瓦が出土しており、さらに武帝の太初元年(BC104年)以前に作られたと考えられる軒丸瓦についても接合式であることが知られているので、前漢中頃の紀元前100年前後までさかのぼるようである。

中国では瓦当文様を中心に研究が進み、製作技術については従来あまり論じられてきていない。そのため、報告書でも主として瓦当の写真や拓影が掲載されており、瓦当裏面等に関する記載が少ない傾向がうかがえる。中国の瓦の製作技術的な検討はこれから研究分野であり、日本における研究成果を加味して観察を進めれば、さらに多くの成果をえられるであろう。今後、中国側との共同研究がますます深化することを期待したい。

(岸本直文)

中国との交流

講演会「中国古代考古学の諸問題」の開催

日中共同研究会の第3回講演会が1993年12月11日、平城宮跡資料館で開かれた。演者・題目は次の通りである。謝端琚「馬家窯文化の彩陶」、殷璋璋「長江流域の古代銅鉱」、鳥恩「匈奴文化の発見と研究を総括する」。謝氏は、馬家窯文化諸様式の彩陶を概述するとともに、そこにみられる原始芸術や観念形態にも触れた。殷氏は、湖北省銅綠山の発掘資料を中心として、戦国期以前の銅山開発と冶金技術について述べた。鳥氏は、中国における匈奴研究の現状を紹介するとともに、寧夏・内蒙出土の未発表の金属製品を多数報告した。3人の演者は、いずれも中国社会科学院考古研究所の研究員であり、スライドを交えた講演は、現在の中国考古学の高い研究水準を示すものであった。比較的多岐にわたる問題であったにもかかわらず、来聴者も多数であり、日本における中国考古学への関心の高さを感じさせた。また、講演後、日中の研究者間の研究交流の場がもたらされ、様々な問題が活発に話し合われた。

(加藤真二)

貴州省建築考察訪日団の来所と講演

西南中国民族建築研究会および日本建築学会農村計画委員会の招きにより、1993年10月20日から27日まで、貴州省建築考察訪日団が来日した。訪日団のメンバーは、羅徳啓（貴州省建築設計院長・団長）、譚鴻賓（貴州省土木建築学会副委員長）、金珏（貴州省工学院民族建築研究所所長）、陳肖龍（貴州省科学技術協会国際部）の4氏である。奈良・大阪・神戸・姫路・東京などで歴史建築および現代建築を見学したほか、奈良では10月21日に古都調査保存協力会主催の交流会が本研究所で開催され、団長の羅徳啓氏が「貴州少数民族の居住文化とその研究観」と題する講演をおこなった。また、東京では10月26日に日本建築学会農村計画委員会主催の「貴州少数民族の住居と集落に関するシンポジウム」が建築会館で開催された。このシンポジウムでは、羅徳啓氏および浅川（奈文研）の研究発表に対して、大河直躬（千葉大学）・太田邦夫（東洋大学）の両氏がコメントを加えたのち、聴衆をまじえた総合討論をおこなった。シンポジウムの記録は、「農村計画情報」17号（1994年5月）に掲載されている。

(浅川滋男)

国家文物局・中国文物研究所との交流

古都調査保存協力会の招聘により、郭旃（国家文物局文物一処長）、黃克忠（中国文物研究所副所長）、姜懷英（中国文物研究所石窟部主任）の3氏が来日された。招聘期間は、1993年3月1日から10日までである。この間、奈良と京都の解体修理現場を中心に古建築を視察していただくとともに、3月4日には本研究所において、日本側研究者との意見交換会を催した。この会は、まず郭氏の「歴史的記念物の保護と管理」と題する文化財行政関係の講演からスタートした。中国においては、経費の面もさることながら、伝統的技術に携わる人材の確保・育成が、文化財保護にとって大きな問題になっているとの指摘がとくに印象深かった。続いて黃・姜両氏が、それぞれ「石窟の保存と修理」「ボタラ宮の修理方法」と題し、中国における文化財建造物修理の実例をスライドをまじえて紹介された。以上の発表に対して、日本側の鈴木嘉吉・細見啓三（以上奈文研）・岡田英男（奈良大学）・濱島正士（国立歴史民俗博物館）・田中淡（京都大学）などの諸氏から質問や意見がだされ、活発に議論がかわされた。歴史的建造物の復原と修理に関する中国との交流は、91年の羅哲文氏に始まり、昨年の楊鴻勵・張之平両氏の招聘をへて、すでに3年めを迎えたが、両国の木造建築構造の相違や修理観の違い、あるいは文化財をめぐる物的・社会的環境の差異や共通点について、ようやくお互いの理解が深まりつつあるといえよう。

(浅川滋男)

ヨーロッパにおける遺跡の再生・活用法の研究

遺跡の調査、保存、活用という分野ではわが国よりも長い歴史を有するヨーロッパのうち、イギリス、ドイツ、ギリシャを訪ね、これらの国における遺跡の現状、保護、修理、復原、管理、運営などの考え方とその実際について調査した。1993年8月9日に出発し、10月22日に帰国した。

イギリスでは大英博物館、ロンドン博物館、ストーンヘンジ、ハドリアンウォールなどの著名な博物館、遺跡を見学した。イギリスの博物館や遺跡で特に感じたことは展示や整備の充実ぶりもさることながら、附属するレストラン、コーヒーショップ、インフォメーションセンター、ミュージアムショップなどが充実していることであった。博物館や遺跡が見学一辺倒ではなく、休息、食事、買物などを楽しみ、快適に時間を過ごすことのできる施設となっており、夏休み中ということもあってか家族連れの利用が目立った。遺跡の復原整備では掘立柱建ての平地住居からなる5世紀の集落遺跡であるウエストストーアングロサクソンビレッジでは、埋め戻した上に数棟の建物を復原するという、わが国でもおなじみの方法で整備されていた。掘立柱の柱穴という同種の造構の整備方法として、行き着く先は同じという感じがした。しかし、できあがった形は似ていても、復原建物を作り上げる過程、組織、活用法などは、日本とかなり異なる。作り方でいえば、日本の工事委託方式に対して、ウエストストーでは直営方式である。学芸員にあたる人が作業員やボランティアの人々と共同して、斧などを使い、当時に近いやり方で建てている。活用面では、入口のインフォメーションセンターで貸してくれる想像豊かな内容のカセットテープを聞きながら、順次、見学する方法であった。

ドイツではフランクフルトにあるドイツ考古学研究所ローマ・ゲルマン研究部のエクハルト・シュペルト博士にお世話になり、ザールブルグ、クサンテン、カンボディウム、コンスタンス、コングン、ホッシュドルフ、ハイタブなどドイツ各地の整備・未整備の遺跡、発掘調査現場、博物館、古庭園を見学した。石やレンガの遺跡でも建物を完全に復原する整備が行われていること、建物の平面表示の方法、覆屋の現状、発掘調査のやり方、博物館における展示のアイデア、公有化した遺跡の管理办法など、多くのことを学んだ。

ギリシャではアテネ周辺とクレタ島の遺跡と博物館を調査した。石灰岩を用いた雄大な遺跡であり、保護と修理に重点をおいた整備が多く、失われた部分を復原する整備は少ない。そうした中にあってイギリス主導で行われたクレタ島クノッソスでは、内部の壁画を含めて部分的な復原がなされていた。ここでの復原には批判的な評価が多いと聞いていたので、どんな大それた復原が行われているかと期待して見学したが、日本の遺跡復原に比べると大変おとなしい内容であった。ただし、意識して行われているのはオリジナルの造構に直接、復原部分を加える際に、オリジナルと復原した部分が明らかに識別できるように復原していることであった。

ヨーロッパと日本では遺跡の有様、材料、構造などに大きな差があり、遺跡の保護や見せ方の技術面ではそのまま応用できない面もあるが、基本的な考え方や遺跡ごとに最良の方法を模索する姿勢、来訪者に対する対するサービス施設など、大変参考になった。

(高瀬要一)

近年、復原整備されたローマ時代の遺跡、カンボジウム
(ドイツ・ケンブトン)

公開講演会

漆のついた土器 出土する漆付着土器には、杯、皿、盤、壺、甕など、多くの器種がある。漆付着土器を大量に出土した遺跡の例を分析した結果、細頸の壺は漆の原液を入れて原産地から消費地にもたらしたもので、甕は貯蔵用、広口の盤は精製用、杯、皿の食器類はパレットとして塗装を行ったものというそれぞれの土器の用途を明らかにし、奈良時代における漆工芸の様子を、新たに考古遺物の面から検証した。また、正倉院文書の検討から、工房には漆の原液を搬入し、そこで精製、調合を行っていたことも判明し、漆を大量に消費する工房での漆製品の製作は、漆が非常に高価であることから、官の後援などが無ければ困難であったであろうことを推定した。漆の原液には、運搬具の壺の形態、胎土から見て、多くの産地がある。運搬具には、郷名、貢納者名、内容量という木簡と同じ内容の墨書きを記したものがあることを初めて示し、漆が税の一種として国家の統制の下にあったことを明確とした。これは、漆の付札木簡が出土していない現状では、貴重な事例である。 (玉田芳英)

古代建築における庇について 発掘調査で庇を持った建物が検出されるが、庇といってもその構造は様々であることを述べ、都城遺跡の例を中心に時代変遷を示した。古墳時代には、すでに付加的な構造（空間）としての庇と、後世の民家の下屋と称するべき庇がある。7世紀には寺院建築として構造的に定型化した庇が大陸から流入し、特に四面庇のありかたに注目する必要がある。その後各種の庇が複雑な発展をみせ、大きな流れとしては庇が構造的に定型化するようになり、空間としての庇の取り扱い方にそのことが示されている。また、発掘遺構、諸資料から庇の空間的性格を検討すると、古代建築における庇の性格は必ずしも一様ではない。最後に、発掘成果以外の資料から復原される庇の平面形式は多種で、発掘時および遺構検討段階において、従来の認識にとらわれず庇を認定し、遺構の検討をする必要性を述べた。 (島田敏男)

考古学から見た古代の金属生産 平城宮式部省東役所において発見された鋳銅工房は、古代の鋳銅作業工程を不十分ながらも推定・復元できる貴重な事例といえる。奈良時代後半に操業していたこの工房において特に注目できるのは、青銅製品の鋳造とともに、銅地金の精製も行っていたことである。ここで操業工程は大きく見て、3つの段階から成立していたと推定した。それは、発見された工房の内部が3つの区画に分けられること、それぞれの区画に異なる型式の炉ないしは焼けた小穴が附属することなどから、これら3つの区画が一連の作業工程を示すと考えられるからである。その中で、最初の工程に位置付けることのできる炉一火床炉一を用いて、銅地金の精製を行っていたと考えた。この炉の地下構造は、長登銅山などで発見された製錬炉に相似し、この最初の工程は銅山の製・精錬技術と密接な関連を有していると見ることができる。この鋳銅工房で展開していた精製工程は、正倉院文書に見える「冶然」の工程に含まれると考えられることも、合わせて指摘した。 (小池伸彦)

科学で探る古代金工の世界 現在我々が一般実用的に用いている鉄や銅などの金属のほとんどはすでに古代において出揃っている。しかも鋳造や鍛造などの製作技法の基本テクニックもすべて古代に登場しているといってよい。古代金工には、勘と経験で培われた古代工人の手の技が遺憾なく発揮されている。まさに「古代のハイテク」と呼ぶにふさわしい。発掘によって出土した古代の金工品も製作当初は丁寧に仕上げられていたのだろうが、長年月の土中埋蔵のため生じたさびや汚れのため、本来の輝きと色を喪失してしまっているのが常である。このようにさびと汚れによって隠蔽されてしまった金工品の素顔を探るためにも、今後もさまざまな科学機器を用いた材質や構造の調査を地道に積み重ねていく必要がある。それによって初めて、古代から現代に至る金工技術の歴史的変遷を明らかにすることができるであろう。保存科学的研究の重要性もここにあるのである。 (村上 隆)

調査研究彙報

雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究 平城宮跡発掘調査部遺構調査室に事務局をおく西南中国民族建築研究会（代表・浅川滋男）は、住宅総合研究財團の助成をうけ、1991年以来、雲南省西北部のチベット・ビルマ語系諸族の住居と集落に関する調査を進めてきた。93年度は、母系社会とアチュ（妻問）婚で有名な永寧ナシ族（モソ人）および奴隸制の遺存で知られる小涼山イ族の調査をおこなった。参加したメンバーは、浅川のほか、杉本和樹、江口一久（国立民族学博物館）、溝口正人（名古屋大学）、高岡えり子（東京理科大学）、王惠君（横浜国立大学）、何大勇（雲南大学）の計7名である。調査期間は7月16日【出国】～8月11日【帰国】の約4週間で、集中調査したのは瀘沽湖畔の永寧落水村。落水村では、湖岸の下村に母系妻問婚のモソ人、山側の上村に一夫一妻制のブミ族が居住しており、両者の社会・文化の相互変容に着目しながら、居住空間と建築技術に関する多彩なデータを収集できた。これまでの成果としては、①西南中国民族建築研究会「雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(1)(2)」（『住宅総合研究年報』19・20号、1993・94年）、②浅川「雲南省・永寧モソ人の住まい」（『住まいの民族建築学』建築資料研究社、1994年）がある。

（浅川滋男）

アメリカ考古学会（The Society for American Archaeology）への参加 1993年4月14日から18日までの間、日本学術振興会の国際研究集会派遣研究员としてアメリカ合衆国セントルイス市で開催されたアメリカ考古学会に出席し、発表を行った。この会議は、アメリカ、カナダ、メキシコはじめラテン・アメリカ諸国を中心に、ヨーロッパ、アジア、アフリカなどの研究者を含めて3,000人以上の参加者がおり、多くの分科会に分かれて発表が行われた。我々の分科会は、カナダ・マックギル大学の井川史子、羽生淳子両氏の司会で、「縄文集落システムに関するシンポジウム」と題し、日本の縄文集落の大規模発掘とその整理分析の方法、そこから導き出される成果について、日本4人、カナダ1人、アメリカ合衆国1人、ヨーロッパ1人が発表し、討論を行った。

（松井 章）

「中石器時代の人類と海」（Man and the Sea in Mesolithic）シンポジウムへの参加 1993年6月14日から18日までの間、デンマーク国、カランボルグ市で開催された後氷期における人類の海洋環境への適応戦略に関するシンポジウムに参加し、縄文時代の貝塚文化の特性を、北欧の貝塚文化と比較して発表した。参加者は約70名で、EC諸国、北欧、旧ソビエト連邦のリトアニア、エストニア、ラトビア、ロシアなどと東欧諸国からの参加者が主であった。縄文時代に見られる大規模貝塚、豊かな精神生活を物語る土偶、裝身具、埋葬習俗などは、これまで海外に紹介される機会に乏しく、類例は北欧中石器にみならず、世界のどの狩猟採集民文化にも見られず、参加者の大きな興味を引いた。会議を通じて、ユーラシア大陸の各地で後氷期の狩猟採集民族が、それぞれ固有の自然環境にどのような適応を行ったかを知ることが出来て得るところが多かった。

（松井 章）

薬師寺典籍文書調査 東大史料編纂所との共同調査である。木箱28箱、箪笥1棹、ダンボール箱27箱あるうち、現在木箱第22、25、27、28函の調書作成作業を継続中である。概ね江戸時代のものが多いが修二会関係記録や富くじや証文類など当時の寺内の状況が知られる資料も多い。写真は第19函まで完了。なお典籍文書目録のデータベース化もPC-Pickを使って継続して行っているが、第10函分まで入力済みである。1993年7月。

（綾村 宏・佃 幹雄・館野和巳・寺崎保広・森 公章）

醍醐寺文書調査 醍醐寺文書第17函の文書の撮影。当函はほとんどが鎌倉・室町期の文書である。縦折紙のものなど、古文書料紙の資料として、興味あるものも含まれている。当函撮影完了した。1993年8月。

（綾村 宏・佃 幹雄・森 公章）

新指定古文書等の調査 東京国立博物館内文化庁分室において、93年度重文に指定された静岡県の三嶋大社矢田部家文書および京都府の金剛心院の制札の写真撮影を行った。三嶋大社文書は中世文書を中心として、源頼朝下文、頼家筆般若心経、矢田部家系図などを撮影した。また金剛心院制札は六波羅探題、足利尊氏、守護代発給のものなど6枚を撮った。いずれも正文で小口の墨書きや釘跡など、発給掲示を考えうる資料である。1994年3月。

(綾村 宏・佃 幹雄)

北浦定政関係資料の調査 1992年4月に寄贈を受けた当該資料を岩本次郎調査員が整理目録化の作業を継続して行っている。

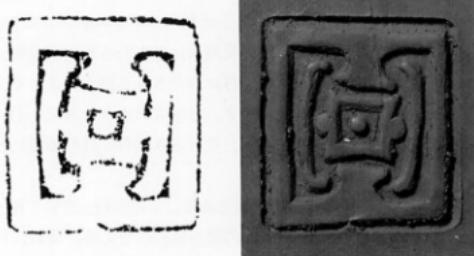
(歴史研究室)

その他の調査 古文書料紙調査(上杉文書、東大寺文書、東寺百合文書)に参加。法隆寺医薬調剤古抄の撮影等。

(綾村 宏)

『敦煌建築研究』の翻訳完了 非常勤調査員の田中淡氏(京都大学人文科学研究所)を中心に進められてきた『敦煌建築研究』(文物出版社、1989年)の翻訳作業がほぼ完了した。同書は、中国芸術研究院建築芸術室主任の蕭默氏が清華大学に提出した博士学位請求論文を公刊したもので、南北朝時代から宋代にかけての敦煌莫高窟壁画に描かれた各種の建築物を、文献史料と対比させて考察している。從来乏しかった唐代以前の建築資料をおぎなうばかりか、古代日本建築の復原研究にも示唆をあたえるところ大である。翻訳に参加したのは、田中淡氏のほか、上野邦一(奈良女子大学)、松本修自(東京国立文化財研究所)、町田章、浅川滋男、島田敏男、藤田盟児(以上奈文研)、黄蘭翔、福田美穂(以上京都大学)、栗原伸治(総合研究大学院大学)の10名である。1990年以来、月に1回のペースで輪読会をひらき、担当者が翻訳した粗訳原稿をメンバー全員で再検討する作業を続けてきたが、あしかけ4年にしてようやく初稿がそろった。94年度は、この初稿にさらに修正を加え、正式な出版物として刊行する予定である。

(浅川滋男)



平城宮第241次調査出土銅印(左:印影 右:封泥)

奈良国立文化財研究所要綱

I 事業概要

1. 研究普及事業

公開講演会

- (1) 1993年5月15日 第72回公開講演会
「漆のついた土器—奈良時代漆の工房の一側面—」
玉田芳英
『古代建築における庇について』 島田敏男
- (2) 1993年10月30日 第73回公開講演会
「考古学から見た古代の金属生産」 小池伸彦
『科学で探る古代金工の世界』 村上 隆

現地説明会

- (1) 1993年6月12日 平城宮跡第241次
(造酒司) 浅川滋男
- (2) 1993年7月10日 藤原宮第71次
(東方官衙地区) 松本修自

- | | | | |
|-----|-------------|---------------------|------|
| (3) | 1993年9月25日 | 平城宮跡第243次 (東院地区) | 玉田芳英 |
| (4) | 1993年11月13日 | 石神遺跡第12次 | 橋本義則 |
| (5) | 1994年3月19日 | 本薬師寺東塔西南部 | 花谷 浩 |

現地見学会

- | | | | |
|-----|------------|-----------------------|------|
| (1) | 1993年4月22日 | 平城宮跡第239次 (馬寮東方地区) | 中村慎一 |
|-----|------------|-----------------------|------|

平城宮跡資料館・遺構展示館（見学者数）

| 区分 | 資料館 | 遺構展示館 | 計 |
|-------|-----------|-----------|-----------|
| 1993年 | 61,700 | 69,574 | 131,274 |
| 累計 | 1,298,100 | 1,640,804 | 2,938,904 |

資料館は1970年度、遺構展示館は1963年度以降の累計

2. 1993年文部省科学研究費補助金による研究

| 新規 | 種目 | 研究課題 | 研究代表者 | 交付額（千円） |
|----|----------|--------------------------------------|-------|---------|
| 新 | 重点領域 (I) | 遺跡探査法の総合的開発研究 | 西村 康 | 6,000 |
| 新 | 重点領域 (2) | 集落・埋納遺跡の探査 | 西村 康 | 8,300 |
| 既 | 一般研究 A | 寝殿造の総合的研究 | 牛川喜幸 | 2,400 |
| 新 | 〃 | 解析図化およびコンピュータ・グラフィックによる古代都城跡の比較研究 | 町田 章 | 10,000 |
| 既 | 一般研究 C | 蔵書印からみた寺院書跡資料の伝来に関する研究 | 綾村 宏 | 300 |
| 既 | 〃 | 古代園池の立地と形態 | 高瀬要一 | 800 |
| 既 | 〃 | 伝統的木造建築の構造安定性に関する研究 | 内田昭人 | 700 |
| 新 | 〃 | 都城・国分寺・国府・三関・その他の寺院における八世紀同範軒瓦の系統的研究 | 山崎信二 | 800 |
| 新 | 〃 | 埋葬のあり方による弥生社会の年齢階級に関する研究 | 深沢芳樹 | 600 |
| 新 | 〃 | 庭園文化におけるイタリアと日本の比較に関する研究 | 本中 真 | 1,100 |
| 新 | 〃 | 日本古代度量衡の研究—容量篇— | 西口寿生 | 900 |
| 新 | 〃 | 年輪年代法による弥生・古墳時代の曆年代の解明 | 光谷拓実 | 2,000 |
| 新 | 奨励研究 A | 良渚文化玉器の研究 | 中村慎一 | 800 |
| 新 | 〃 | 古代都城における宅地内建物配置の規格性の研究 | 小澤 紘 | 800 |
| 新 | 〃 | 古代日本における外交機構の研究 | 森 公章 | 900 |
| 新 | 〃 | 焼失窓穴住居址の構造復原—先史建築の実証的復原研究へむけて— | 浅川滋男 | 800 |
| 新 | 〃 | 漆付着土器の研究 | 玉田芳英 | 900 |
| 新 | 〃 | 畿内の竹状模骨丸瓦に関する基礎的研究 | 花谷 浩 | 800 |
| 既 | 試験研究 B | わが国古代の幅作農耕研究における生物考古学的手法の開発 | 工藤普通 | 4,000 |
| 既 | 国際学術研究 | 考古遺物の材質・技法に関する分析の比較研究 | 沢田正昭 | 4,700 |
| 計 | | | | 47,600 |

| | | | | | |
|------------|------|----|----------|------|-----|
| 重点領域研究 (1) | (新規) | 1件 | 奨励研究 (A) | (新規) | 6件 |
| 〃 (2) | (新規) | 1件 | 試験研究 (B) | (继续) | 1件 |
| 一般研究 (A) | (继续) | 1件 | 国際学術研究 | (继续) | 1件 |
| 〃 (A) | (新規) | 1件 | 計 | | 20件 |
| 〃 (C) | (继续) | 3件 | | | |
| 〃 (C) | (新規) | 5件 | | | |

3. 飛鳥資料館の運営

展示

第一展示室 常設展示

増築工事のため1993年12月5日まで開館

1993年12月6日より1994年6月30日まで閉館

特別展示等

春期・秋期共増築工事のため中止

特別講演会

増築工事のため中止

普及

インフォメーションルームにおいて観覧者の質問に応じている（1993年4月1日～1993年12月5日）

入館者数（1993.4.1～1993.12.5 開館日数215日）

| 区分 | 個人観覧 | 団体観覧 | 有料 | 無料 | 合計 |
|------|--------|--------|--------|-------|--------|
| 一般 | 26,344 | 11,482 | | | |
| 高・大生 | 4,479 | 11,850 | | | |
| 小・中生 | 7,468 | 28,918 | | | |
| 計 | 38,291 | 52,250 | 90,541 | 5,061 | 95,602 |

（平成5年12月6日より平成6年3月31日まで増築工事のため休館）

陳列品購入

水時計(枠)

4. 埋蔵文化財センターの研修・指導

研修

埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

- (1) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(保存科学基礎課程)
1993年4月20日～4月28日(参加者16名)
- (2) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(遺跡探査課程)
1993年5月11日～5月21日(参加者9名)
- (3) 平成5年度埋蔵文化財担当事務職員特別研修
(埋蔵文化財基礎課程)
1993年5月27日～6月4日(参加者33名)
- (4) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(保存科学応用課程)
1993年6月10日～6月17日(参加者12名)
- (5) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修
(一般課程)
1993年7月6日～8月11日(参加者34名)
- (6) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(文化財写真課程)
1993年8月17日～9月9日(参加者20名)
- (7) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(遺跡測量課程)
1993年9月16日～10月15日(参加者19名)
- (8) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(寺院官衙遺跡調査課程)
1993年10月21日～11月4日(参加者30名)
- (9) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(環境考古課程)
1993年11月24日～12月10日(参加者22名)
- (10) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
(人骨調査課程)
1994年1月18日～1月26日(参加者22名)
- (11) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
(鉄造遺跡調査課程)
1994年2月3日～2月8日(参加者30名)
- (12) 平成5年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
(城郭調査課程)
1994年2月15日～2月22日(参加者30名)

研修員一覧表

| 氏名 | 所属 | 受入れ期間 | 受入れ部局 | 研究・研修内容 |
|-------------|--------------------------|--|-----------|---------|
| 国内 | | | | |
| 手塚 均 | 東北歴史資料館 保存科学研究科長 | 1993.4.20～1993.4.28 1993.5.24～1993.6.17 | 埋蔵文化財センター | 保存科学研修 |
| 竹田 恵治 | 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課 主事 | 1993.7.1～1993.9.30 | 平城宮跡発掘調査部 | 発掘調査研修 |
| 筒井 正明 | 同 上 | 1993.9.1～1993.11.30 | 藤原宮跡発掘調査部 | 同 上 |
| 藤岡 孝司 | 東広島市教育委員会 社会教育課 主任主事 | 1993.10.20～1993.11.15 | 埋蔵文化財センター | 考古学研修 |
| 竹田 幸司 | 仙台市教育委員会 文化財課教諭 | 1994.2.22～1994.3.17 | 同 上 | 保存科学研修 |
| 国外 | | | | |
| Mohd Kadour | シリアダマスカス国立民族博物館 副館長 | 1993.5.11～1993.11.11 | 埋蔵文化財センター | 保存科学研修 |
| 鄭漢德 | 大韓民国釜山大学校 教授 | 1993.7.15～1993.10.20 | 同 上 | 考古学研修 |

| | | | | |
|--|---|---------------------------|-----------|-----------|
| 都 東 烈 | 大韓民国東義工業専門大学 教授 | 1993. 8. 10～1994. 8. 9 | 埋蔵文化財センター | 考古学研修 |
| Steria Moo | マレーシアサバー博物館 上級芸員助手 | 1993. 9. 23～1993. 11. 17 | 同 上 | 保存科学研修 |
| IVLIEV Aleksandr Lvovich | ロシア科学アカデミー極東支部 歴史学、考古学、民族学研究所 副所長 | 1993. 11. 18～1993. 11. 28 | 同 上 | 考古学研修 |
| ZHUSHCHIK, HOVSKAYA Irina Serg- eevna | ロシア科学アカデミー極東支部 歴史学、考古学、民族学研究所 上級研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 姜 大 一 | 韓国文化財監理局文化財研究所 保存科学研究所 専門職 | 1993. 11. 19～1993. 11. 28 | 埋蔵文化財センター | 保存科学研修 |
| 林 善 基 | 韓国文化財監理局文化財研究所 保存科学研究所 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 宋 必 潤 | 韓国文化財監理局文化財研究所 遺蹟研究室 研究員 | 1993. 11. 22～1994. 1. 21 | 平城宮跡発掘調査部 | 考古学研修 |
| 姜 焰 台 | 韓国文化財研究所 研究員 | 1993. 11. 29～1993. 12. 5 | 埋蔵文化財センター | 保存科学研修 |
| 鄭 光 龍 | 韓国文化財研究所 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 俞 恵 仙 | 韓国文化財研究所 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 金 奎 虎 | 韓国湖嶽美術館 研究員 | 1993. 11. 29～1993. 12. 8 | 同 上 | 同 上 |
| 梁 泌 承 | 韓国湖嶽美術館 研究員 | 1993. 12. 1～1994. 2. 28 | 同 上 | 同 上 |
| 鳥 恩 | 中華人民共和国中国社会科学院 考古研究所 副所長 | 1993. 12. 7～1993. 12. 19 | 平城宮跡発掘調査部 | 考古学研修 |
| 謝 端 順 | 中華人民共和国中国社会科学院 考古研究所原始社会考古研究室 主任 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 殷 瑞 瑞 | 中華人民共和国中国社会科学院 考古研究所商周考古研究室 主任 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 安 乘 燦 | 韓国国立中央博物館 保存科学室 研究員 | 1994. 1. 10～1994. 1. 16 | 埋蔵文化財センター | 保存科学研修 |
| 李 容 喜 | 韓国文化財研究所 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 金 鋪 漢 | 韓国文化財研究所 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| UNG VON | カンボジア アンコール保存 事務所 保存官 | 1994. 1. 21～1994. 3. 11 | 同 上 | 考古学保存科学研修 |
| TUON PHOK | カンボジア アンコール保存 事務所 現地責任者 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| KONG SARITH | カンボジア アンコール保存 事務所 現地責任者 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| CHEY SAM SOVANN | カンボジア カンボジア 国立博物館 修復責任者 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| Simon Kaner | イギリス ケンブリッジ大学 講師 | 1994. 2. 23～1994. 3. 25 | 同 上 | 考古学研修 |
| Simon Holledge | イギリス ロンドン大学 | 1994. 3. 1～1994. 3. 28 | 同 上 | 同 上 |
| 黃 克 忠 | 中華人民共和国中国文物研究所 副所長 | 1994. 3. 1～1994. 3. 10 | 平城宮跡発掘調査部 | 考古学研修 |
| 郭 旗 | 中華人民共和国中国国家文物局 調査研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 姜 懷 英 | 中華人民共和国中国文物研究所 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 李 軍 | 中華人民共和国中国新疆維吾爾 自治区文化厅 助理研究員 | 1994. 3. 1～1994. 5. 31 | 同 上 | 同 上 |

| | | | | |
|-----------------------------------|--|---------------------|-----------|--------|
| G.L.Balnes | イギリス ケンブリッジ大学教授 | 1994.3.2~1994.3.22 | 埋蔵文化財センター | 仏教遺跡研修 |
| John Morton Coles | イギリス ケンブリッジ大学 終身研究員 | 1994.3.2~1994.3.21 | 同 上 | 考古学研修 |
| Bryony Coles | イギリス エクセター大学 歴史考古学科 教授 | 1994.3.2~1994.3.21 | 同 上 | 同 上 |
| Revutskaya Galina Konstantinovana | ロシア科学アカデミーシベリア 支部歴史学、考古学、民族学研究所 研究員 | 1994.3.16~1994.3.30 | 同 上 | 保存科学研修 |
| Shoumakova Elena Vladimirovna | ロシア科学アカデミーシベリア 支部歴史学、考古学、民族学研究所 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| Alan Saville | イギリス スコットランド国立博物館遺物処理研究部 学芸員 | 同 上 | 同 上 | 仏教遺跡研修 |
| MICHEL TRANET | カンボジア国務次官 | 1994.3.20~1994.3.28 | 同 上 | |
| 鄭 桂 玉 | 韓国国立文化財研究所 研究員 | 1994.3.20~1994.3.29 | 同 上 | 仏教遺跡研修 |
| 金 謙 起 | 韓国湖畑美術館保存科学研究室 研究員 | 1994.3.21~1994.3.28 | 同 上 | 同 上 |
| 姜 昌 求 | 韓国湖畑美術館保存科学研究室 研究員 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| 池 健 吉 | 大韓民国 慶州博物館長 | 1994.3.21~1994.3.30 | 同 上 | 同 上 |
| 金 正 完 | 大韓民国 扶余博物館 学芸室長 | 同 上 | 同 上 | 同 上 |
| Patricia Vargas Cassanova | チリ 国立チリ大学イースター島 研究所長 | 1994.3.18~1994.3.31 | 同 上 | 考古学研修 |
| 韓 炳 三 | 韓国文化体育部文化財委員 | 1994.3.28~1994.3.31 | 同 上 | 仏教遺跡研修 |

発掘調査・保存・整備・探査指導

(北海道) 手宮洞窟、常呂遺跡、北黄金貝塚、(岩手県) 盛岡城跡、大渡ワ遺跡、柳之御所跡、(宮城県) 多賀城跡、下飯田遺跡、山王遺跡、(秋田県) 秋田城跡、払田柵跡、(福島県) 慧日寺跡、根岸遺跡、薬師堂石仏、(茨城県) 平沢官衙遺跡、(栃木県) 法界寺跡、下野国分寺跡、(千葉県) 松崎II号遺跡、(東京都) 大名屋敷跡、(神奈川県) 永福寺跡、(長野県) 石川条里・川田条里遺跡、高梨館跡、(新潟県) 小泊須恵器窯跡群、(富山県) 大境洞窟住居跡、北代遺跡、浜黒崎悪地遺跡、(石川県) 橫江莊遺跡、奥原址遺跡、石動山大宮坊跡、須曾蝦夷穴古墳、鳥越城跡、(岐阜県) 杉崎廐寺、苗木城跡、(静岡県) 勝間田城跡、股塙古墳、御殿二之宮遺跡、大知波姫庵寺、横須賀城跡、片山庵寺、(愛知県) 室遺跡、東郷庵寺跡、朝日遺跡、三河國府跡、青塚古墳、(三重県) 夏見庵寺跡、城之越遺跡、糞生庵寺跡、(滋賀県) 紫香楽宮跡、下鈎遺跡、安土城跡、兵主神社庭園、天乞山古墳、上平寺館跡、水口城跡、穴太庵寺跡、(京都府) 蟹満寺跡、神童寺跡、恭仁宮跡、物集女車塙古墳、(大阪府) 心合寺山古墳、新池埴輪製作遺跡、金山古墳、下田遺跡、住友御吹所跡、池上曾根遺跡、(兵庫県) 赤穂城跡、西求女塙古墳、小丸遺跡、広瀬庵寺、玉丘古墳、塙野古墳、西安田長野遺跡、篠山城跡、日暮遺跡、西条庵寺、箕谷古墳、入佐川遺跡、丁瓢塙古墳、大市山遺跡、篠東1号古墳、年ノ神古墳、(奈良県) ナガレ山古墳、マルコ山古墳、大野寺石仏、酒船石北方遺跡、(鳥取県) 上淀庵寺跡、護伝寺庭園、

梶山古墳、夏谷遺跡、桂見遺跡、南谷大山遺跡、尾高浅山遺跡、不入岡遺跡、(島根県) 小野遺跡、後谷V遺跡、門遺跡、上長浜貝塚、兵庫遺跡、(岡山県) 備中松山城跡、岡山城跡、大谷1号墳、鬼城山、(広島県) 三ツ城古墳、冠道跡、西本6号遺跡、(山口県) 大内氏館跡、長登銅山跡、陶窑跡、茶臼山古墳、(香川県) 讃岐郡国分寺跡、丸亀城跡、(愛媛県) 葉佐池古墳、久米森元遺跡(3次)、(福岡県) 鴻臚館跡、板付遺跡、王塙古墳、吉武高木遺跡、雀居遺跡、免遺跡、(長崎県) 原の辻遺跡、(熊本県) 若園貝塚、つつじヶ丘横穴群、鞠智城跡、(大分県) 亀塙古墳、ガランドヤ古墳群、小追辻原遺跡、装飾古墳、大分元町石仏、安国寺集落遺跡、(佐賀県) 名護屋城跡・陣跡、八藤遺跡、大黒町遺跡、(沖縄県) 認識名園、トウバル遺跡、糸数城跡

埋蔵文化財ニュース刊行

第77号 1989年度刊行埋蔵文化財発掘調査報告書に関する情報調査

5. その他

委員会等

第20回飛鳥資料館運営協議会

1993年6月21日 於 飛鳥資料館
平城・飛鳥原宮跡調査整備指導委員会

1993年6月3・4日 於 平城宮跡資料館講堂

外国出張

- 白井 熊 シンポジウム「北太平洋の考古学」参加のため、ロシアへ出張
1993年4月11日～1993年4月18日
- 松井 章 「アメリカ考古学会第58回大会」出席及びネブラスカ大学において埋蔵文化財に関する調査研究のため、アメリカへ出張
1993年4月12日～1993年4月25日
- 千田剛道 高句麗・清朝関係遺跡踏査のため、中華人民共和国へ出張
1993年4月25日～1993年5月4日
- 沢田正昭 火山性凝灰岩を用いて試験片を切り出し、これらを保存材料で硬化しその耐候試験を行うため、チリ・アメリカへ出張
1993年5月5日～1993年5月19日
- 猪熊兼勝 イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査のため、チリへ出張
1993年5月20日～1993年5月31日
- 松井 章 シンポジウム「人類と海一中世石器時代」参加及び便所土壙の共同研究のため、デンマーク・イギリスへ出張
1993年6月14日～1993年6月30日
- 工業普通、沢田正昭 天然樹脂塗膜の材質・技法・保存に関する調査研究のため、ドライバへ出張
1993年7月1日～1993年7月13日
- 上原真人 韓国扶余博物館貸出文化財の随伴のため、大韓民国へ出張
1993年7月14日～1993年7月20日
- 浅川滋男 雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1993年7月16日～1993年8月11日
- 白井 熊 ロシア・マガダン州の発掘調査研究のため、ロシアへ出張
1993年7月20日～1993年8月3日
- 沢田正昭 日韓における考古遺物の材質・技術に関する研究のため、大韓民国へ出張
1993年7月21日～1993年7月24日
- 松井 章 先史ボリネシア人の拡散と変容に関する自然人類学的研究のため、フィジーへ出張
1993年7月21日～1993年8月29日
- 杉山 洋 タイ東北部クメール遺跡の調査のため、タイへ出張
1993年7月25日～1993年7月31日
- 牛川喜幸 ICOMOS シンポジウム参加及びスリランカ仏教道路の調査研究のため、スリランカへ出張
1993年7月29日～1993年8月8日
- 猪熊兼勝 イースター島考古学会出席及びイースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査のため、チリ・アメリカへ出張
1993年8月2日～1993年8月21日
- 肥塚隆保 イースター島におけるモアイ石像物保存科学的研究のため、チリへ出張
1993年8月4日～1993年8月19日
- 沢田正昭 イースター島におけるモアイ石像物保存科学的研究及びICOM保存科学国際会議出席のため、チリ・アメリカへ出張
1993年8月4日～1993年8月31日
- 森本 晋 先史・原始科学国際連合第4部会出席のため、オーストラリアへ出張
1993年8月7日～1993年8月14日
- 高瀬要一 ヨーロッパにおける遺跡の再生・活用法の研究のため、イギリス・ドイツ・ギリシャへ出張
1993年8月9日～1993年10月22日
- 鈴木嘉吉、細見啓三 伝統的文化財保存技術の調査研究及び日中文化財建造物保存技術シンポジウム参加のため、中華人民共和国へ出張
1993年8月19日～1993年8月26日
- 光谷拓実 中国・北朝鮮国境における長白山の噴火時代に関する年輪年代学的研究のため、中華人民共和国へ出張
1993年8月19日～1993年8月30日
- 西村 康 アメリカ大陸における遺跡探査法の開発の実地調査研究のため、アメリカへ出張
1993年8月22日～1993年9月5日
- 村上 隆 青銅器の腐食に関する保存科学的調査研究のため、アメリカへ出張
1993年8月23日～1993年9月2日
- 立木 修 白井 熊 パジリク文化古墳群に関する共同研究のため、ロシアへ出張
1993年9月19日～1993年9月26日
- 内田昭人 國際会議「シルクロードに残る古代遺跡の保存」研究発表・出席及びシルクロードに残る古代遺跡の保存状況についての調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1993年10月1日～1993年10月16日
- 河原純之、猪熊兼勝 文化財交流の現状把握のため、大韓民国へ出張
1993年10月4日～1993年10月8日
- 小野健吉 遺跡博物館等の調査のため、イタリア・ギリシャへ出張
1993年10月4日～1993年10月18日
- 小林謙一 遺跡の整備と活用の研究のため、イタリア・ギリシャ・トルコへ出張
1993年10月4日～1993年10月22日
- 町田 章 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1993年10月29日～1993年11月6日
- 伊東太作、佐川正敏、小澤 翁 伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張
1993年10月29日～1993年11月20日
- 猪熊兼勝 アジア史学大会出席のため、大韓民国へ出張
1993年11月19日～1993年11月24日
- 馬場祐次郎、杉山 洋 アンコール文化遺産保護共同研究の予備調査のため、カンボジアへ出張
1993年11月23日～1993年11月30日
- 工業普通、沢田正昭、伊東太作 日韓における考古遺物の材質調査とその研究成果の比較研究のため、大韓民国へ出張
1993年12月7日～1993年12月14日
- 猪熊兼勝 百济文化国際学術会議出席のため、大韓民国へ出張
1993年12月19日～1993年12月22日
- 猪熊兼勝 イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査のため、チリへ出張
1993年12月25日～1994年1月11日
- 沢田正昭、肥塚隆保 石像モアイ像の化学的保存処理

のための基礎実験実施のため、チリへ出張

1994年1月17日～1994年2月8日

工業普通、肥塚隆保　日韓における考古遺物の材質調査とこれまでの研究成果に関しての意見交換及び今後の打ち合せのため、大韓民国へ出張

1994年2月28日～1994年3月6日

沢田正昭　日韓における考古遺物の材質調査とこれまでの研究成果に関しての意見交換及び今後の打ち合せのため、大韓民国へ出張

1994年3月1日～1994年3月4日

毛利光俊彦　伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張

1994年3月3日～1994年3月17日

大鷲　謙、岸本直文、牛嶋　茂　伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張

1994年3月3日～1994年3月20日

黒崎　直　中国におけるバジリク文化古墳群の調査研究及び資料収集のため、中華人民共和国へ出張

1994年3月3日～1994年3月20日

町田　章　含元殿跡の保存に関する会議出席のため、中華人民共和国へ出張

1994年3月6日～1994年3月12日

杉山　洋　アンコール文化遺産保護に関する共同研究のため、カンボジアへ出張

1994年3月10日～1994年3月25日

本中　真　アンコール文化遺産保護に関する共同研究のため、カンボジア・タイへ出張

1994年3月10日～1994年3月21日

村上　隆　アンコール文化遺産保護に関する共同研究のため、カンボジア・タイへ出張

1994年3月11日～1994年3月19日

西村　康　カンボジアにおけるバジリク文化古墳群の調査研究及び資料収集のため、カンボジアへ出張

1994年3月11日～1994年3月17日

森本　晋　フランスにおけるバジリク関連資料の収集のため、フランスへ出張

1994年3月12日～1994年3月21日

猪熊兼勝　韓国における仏教遺跡の調査のため、大韓民国へ出張

1994年3月16日～1994年3月20日

寺崎保広　韓国における仏教遺跡の調査のため、大韓民国へ出張

1994年3月21日～1994年3月25日

町田　章、館野和己、浅川滋男　伝統的文化財保存技術の調査研究のため、中華人民共和国へ出張

1994年3月21日～1994年3月28日

西村　康　遺跡探査結果の共同検討のため、アメリカへ出張

1994年3月21日～1994年3月30日

深澤芳樹　インドネシアにおける仏教及び関連遺跡の調査のため、インドネシアへ出張

1994年3月22日～1994年3月29日

沢田正昭　モヘンジョダロ遺跡の保存効果に関する技術的評価のため、パキスタンへ出張

1994年3月22日～1994年3月30日

協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収業務を担当しているが、1993年度の状況は下記のとおりである。

| 区分 | 面積 | 金額 |
|--------|------------|----------------|
| 1993年度 | 4,314.88 | 279,999.568 |
| 国有地合計 | 343,929.98 | 24,969,158.480 |

II 図書及び資料

図書 142,947冊 (1994.3.31)

| 区分 | 種別 | 購入 | 寄贈 | 計 |
|--------|-----|--------|--------|---------|
| 1993年度 | 和漢書 | 1,402 | 5,187 | 6,589 |
| | 洋書 | 112 | 53 | 165 |
| 累計 | 和漢書 | 52,862 | 82,550 | 135,412 |
| | 洋書 | 5,809 | 1,726 | 7,535 |

写真 522,855 (1993年度末)

III 研究成果刊行物

1. 1993年度刊行物

| 名 称 |
|---|
| 学 報 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究 |
| 史 料 第38冊 梵鐘実測図集成(下) |
| 報告書等 第39冊 山内清男考古資料6-能登繩文資料-重要文化財旧米谷家住宅修理工事報告書 |
| 飛鳥・藤原宮発掘調査概報23 |
| 1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報 |
| 平城宮発掘調査出土木簡概報27 |
| 飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(十一) |
| 図 錄 四十年の春秋 |

2. 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

| 年度 | 名 称 |
|------|-------------------------------|
| 1954 | 第1冊 仏師蓮慶の研究 |
| | 第2冊 修学院離宮の復原的研究 |
| 1955 | 第3冊 文化史論叢 |
| | 1656 第4冊 奈良時代僧房の研究 |
| 1957 | 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告 |
| | 1958 第6冊 中世庭園文化史 |
| 1959 | 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告 |
| | 第8冊 文化史論叢II |
| 1960 | 第9冊 川原寺発掘調査報告 |
| | 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 |
| 1961 | 第11冊 院の御所と御堂一院家建築の研究 |
| | 1962 第12冊 巧匠阿弥陀佛快慶 |
| | 第13冊 褊殿造系庭園の立地的考察 |
| | 第14冊 唐招提寺藏「レース」と「金龟舍利塔」に関する研究 |

| | | | |
|------|-----------------------------------|------|-------------------------|
| | 第15冊 平城宮発掘調査報告II 宮衙地域の調査 | | 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録I |
| 1963 | 第16冊 平城宮発掘調査報告III 内裏地域の調査 | 1975 | 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録II |
| 1965 | 第17冊 平城宮発掘調査報告IV 宮衙地域の調査 | 1976 | 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録III |
| | 第18冊 小堀遠州の作事 | 1977 | 第12冊 藤原宮木簡1 図版・解説 |
| 1967 | 第19冊 藤原氏の氏寺とその院家 | 1978 | 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録IV |
| 1969 | 第20冊 名物製の成立 | 1979 | 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録V |
| 1971 | 第21冊 研究論集I | 1979 | 第15冊 東大寺文書目録第1巻 |
| 1973 | 第22冊 研究論集II | 1979 | 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録VI |
| 1974 | 第23冊 平城宮発掘調査報告VI 平城京左京 一条三坊の調査 | 1979 | 第17冊 平城宮木簡3 図版・解説 |
| | 第24冊 高山一町並調査報告一 | 1980 | 第18冊 藤原宮木簡2 図版・解説 |
| 1975 | 第25冊 平城宮左京三条二坊 | 1980 | 第19冊 東大寺文書目録第2巻 |
| | 第26冊 平城宮発掘調査報告VII | 1981 | 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録VII |
| | 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告I | 1981 | 第21冊 東大寺文書目録第3巻 |
| | 第28冊 研究論集III | 1981 | 第22冊 七大寺巡礼私記 |
| | 第29冊 木曾奈良井一町並調査報告一 | 1982 | 第23冊 東大寺文書目録第4巻 |
| 1976 | 第30冊 五條一町並の調査の記録一 | 1982 | 第24冊 東大寺文書目録第5巻 |
| 1977 | 第31冊 飞鳥・藤原宮発掘調査報告II | 1983 | 第25冊 平城宮出土墨書き土器集成I |
| | 第32冊 研究論集IV | 1983 | 第26冊 東大寺文書目録第6巻 |
| | 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における 民家調査報告 | 1984 | 第27冊 木器集成図録—近畿古代編— |
| | 第34冊 平城宮発掘調査報告IX | 1985 | 第28冊 平城宮木簡4 図版・解説 |
| 1978 | 第35冊 研究論集V | 1988 | 第29冊 兴福寺典籍文書目録第1巻 |
| | 第36冊 平城宮整備調査報告I | 1988 | 第30冊 山内清男考古資料1 真福寺貝塚資料他 |
| 1979 | 第37冊 飞鳥・藤原宮発掘調査報告III | 1989 | 第31冊 平城宮出土墨書き土器集成II |
| | 第38冊 研究論集VI | 1989 | 第32冊 山内清男考古資料2 |
| 1980 | 第39冊 平城宮発掘調査報告X | 1991 | 第33冊 山内清男考古資料3 |
| 1981 | 第40冊 平城宮発掘調査報告XI | 1991 | 第34冊 山内清男考古資料4 |
| 1984 | 第41冊 研究論集VII | 1992 | 第35冊 山内清男考古資料5 |
| | 第42冊 平城宮発掘調査報告XII | 1992 | 第36冊 木器集成図録—近畿原始編— |
| | 第43冊 日本における近世民家（農家）の系 統的発展 | 1992 | 第37冊 梵鐘実測図集成（上） |
| 1985 | 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 | | |
| 1986 | 第45冊 薬師寺発掘調査報告 | | |
| 1988 | 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発 掘調査報告書 | | |
| | 第47冊 研究論集VIII | | |
| 1990 | 第48冊 年輪に歴史を読む—日本における古 年輪学の成立— | | |
| | 第49冊 研究論集IX | | |
| | 第50冊 平城宮跡発掘調査報告書XIII | | |
| 1992 | 第51冊 平城宮跡発掘調査報告書XIV | | |
| | 第52冊 西陵寺発掘調査報告書 | | |

奈良国立文化財研究所史料

| 年度 | 名 称 |
|------|-------------------|
| 1954 | 第1冊 南無阿弥陀仏作善集（複製） |
| 1955 | 第2冊 西大寺散尊伝記集成 |
| 1963 | 第3冊 仁和寺史料 寺誌編1 |
| 1964 | 第4冊 優乗坊重源史料集成 |
| 1966 | 第5冊 平城宮木簡1 図版 |
| 1967 | 第6冊 仁和寺史料 寺誌編2 |
| 1969 | 第5冊 平城宮木簡1 解説（別冊） |
| 1970 | 第7冊 唐招提寺史料1 |
| 1974 | 第8冊 平城宮木簡2 図版・解説 |

奈良国立文化財研究所基準資料

| 年度 | 名 称 |
|------|------------|
| 1973 | 第1冊 瓦編1 解説 |
| 1974 | 第2冊 瓦編2 解説 |
| 1975 | 第3冊 瓦編3 |
| 1976 | 第4冊 瓦編4 |
| | 第5冊 瓦編5 |
| 1978 | 第6冊 瓦編6 |
| 1979 | 第7冊 瓦編7 |
| 1980 | 第8冊 瓦編8 |
| 1983 | 第9冊 瓦編9 |

飛鳥資料館図録

| 年度 | 名 称 |
|------|-----------------------|
| 1976 | 第1冊 飞鳥白鳳の在銘金銅仏 |
| | 第2冊 飞鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇 |
| 1977 | 第3冊 日本古代の墓誌 |
| 1978 | 第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇 |
| | 第5冊 古代の誕生仏 |
| 1979 | 第6冊 飞鳥時代の古墳—高松塚とその周辺— |
| 1980 | 第7冊 日本古代の鶴尾 |
| 1981 | 第8冊 山田寺展 |
| 1982 | 第9冊 高松塚拾年 |
| 1983 | 第10冊 渡来人の寺—繪限寺と坂田寺— |

| | |
|------|------------------------|
| | 第11冊 飛鳥の水時計 |
| | 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで— |
| 1984 | 第13冊 藤原宮—半世紀にわたる調査と研究— |
| 1985 | 第14冊 日本と韓国の塑像 |
| | 第15冊 飛鳥寺 |
| 1986 | 第16冊 飛鳥の石造物 |
| 1987 | 第17冊 萬葉乃衣食住 |
| | 第18冊 壬申の乱 |
| 1988 | 第19冊 古墳を科学する |
| | 第20冊 聖徳太子の世界 |
| 1989 | 第21冊 仏舎利納 |
| | 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天 |
| 1990 | 第23冊 日本書記を掘る |
| 1991 | 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察 |
| | 第25冊 飛鳥の源流 |
| 1992 | 第26冊 飛鳥の工房 |

| 区分 | 本庁舎 | 建物 | | | | | 計 |
|--------|-------|--------|-------|-------|------|--------|---|
| | | 平城 | 藤原 | 飛鳥 | 藤原宮跡 | | |
| 事務室 | 568 | 122 | 197 | 90 | | 977 | |
| 研究・整理室 | 1,419 | 2,216 | 1,205 | 77 | | 4,917 | |
| 資料・図書室 | 1,021 | | 383 | 36 | | 1,440 | |
| 会議室 | 338 | | 129 | 42 | | 509 | |
| 講堂 | | 384 | 210 | 89 | | 683 | |
| 展示室 | | 845 | 254 | 648 | | 1,747 | |
| 写真室 | 79 | 256 | 149 | 64 | | 548 | |
| 道構展示室 | | 1,408 | | | | 1,408 | |
| 車庫 | 84 | 968 | 352 | 94 | | 1,498 | |
| 倉庫・収蔵庫 | 123 | 5,210 | 2,041 | 480 | | 7,854 | |
| 研修棟 | 1,416 | 2,084 | 1,506 | 1,061 | 36 | 1,416 | |
| その他 | 1,673 | | | | | 6,369 | |
| 計 | 6,721 | 13,493 | 6,426 | 2,681 | 36 | 29,357 | |

IV 定員

| 区分 | 指定職 | 行政職(一) | 行政職(二) | 研究職 | 計 |
|--------|-----|--------|--------|-----|----|
| 1993年度 | 1 | 22 | 2 | 61 | 86 |
| 1994年度 | 1 | 22 | 1 | 62 | 86 |

V 予算 (1993年度)

| | |
|---------------|-----------|
| 人件費 | 694,065千円 |
| 運営費 | 1,106,764 |
| 事業管理 | 7,374 |
| 一般研究 | 60,346 |
| 特別研究 | 270,005 |
| 発掘調査 | 541,695 |
| 宮跡整備管理 | 72,337 |
| 飛鳥資料館運営 | 52,666 |
| 埋蔵文化財センター運営 | 50,345 |
| 本庁舎維持管理等経費 | 27,634 |
| 飛鳥藤原宮跡発掘調査部運営 | 24,362 |
| 施設費 | 641,397 |
| 施設整備費 | 18,268 |
| 平城宮跡等整備費 | 605,857 |
| 各所修繕費 | 17,272 |
| 計 | 2,442,226 |

VI 施設

土地

| | |
|--------------|-------------------------|
| 奈良国立文化財研究所所管 | 47,890m ² |
| 本庁舎 | 8,860m ² |
| 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 | 20,515m ² |
| 飛鳥資料館 | 17,092m ² |
| 郡山宿舎(二) | 80m ² |
| 飛鳥資料館宿舎 | 1,343m ² |
| 文化庁所管(関係分) | 1,432,252m ² |
| 平城宮跡地区 | 1,083,281m ² |
| 藤原宮跡地区 | 343,930m ² |
| 飛鳥稻淵宮殿跡地区 | 5,041m ² |

VII 人事異動 (1993.4.1~1994.3.31)

| | | |
|------|----------------------------|-------|
| 4月1日 | 埋蔵文化財センター長に昇任 | 河原 純之 |
| | 庶務部会計課長に昇任 | 萩原 寿郁 |
| | 庶務部会計課課長補佐に昇任 | 福田 八郎 |
| | 庶務部会計課専門職員に昇任 | 坂上 定敬 |
| | 庶務部会計課用度係主任に昇任 | 森 昭彦 |
| | 文部技官(平城宮跡発掘調査部考古第一調査室長)に採用 | 小林 謙一 |
| | 文部技官(平城宮跡発掘調査部考古第三調査室)に採用 | 次山 淳 |

事務補佐員（庶務部会計課）に採用 幸田恵里子
技能補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用 松本 誠
研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用 荒木 浩司
研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用 伊藤敬太郎
平城宮跡発掘調査部史料調査室長に昇任 鶴野 和己
飛鳥藤原宮跡発掘調査部造構調査室長に配置換 金子 審之
平城宮跡発掘調査部主任研究官に配置換 山岸 常人
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換 松本 修自
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換 佐川 正敏
国立歴史民俗博物館歴史研究部教授に転任 佐原 真
奈良女子大学家政学部教授に転任 上野 邦一
京都大学経理部主計課課長補佐に転任 小野 祐治
大阪大学施設部建築課建築第四掛長に転任 舛坂 勇
京都大学医学部経理掛に転任 松本 正典
7月1日 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任 小池 伸彦
平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任 小澤 篤
平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任 森 公章
埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官に昇任 藤本 晋
8月27日 辞職 林 和子
10月1日 文部技官（平城宮跡発掘調査部考古第一調査室）に採用 加藤 真二
文部技官（平城宮跡発掘調査部造構調査室）に採用 長尾 充
事務補佐員（庶務部庶務課）に採用 毛利 友美
東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力室主任研究官に転任 松本 修自
金沢大学文学部講師に転任 中村 憲一
12月20日 技術補佐員（庶務部会計課）に採用 中塙 博
2月15日 事務補佐員（庶務部会計課）に採用 吉田 昌代
2月28日 辞職 毛利 友美
辞職 米田 淑子
3月31日 退職 鈴木 嘉吉
退職 小菅 康男
退職 岡田 博无
退職 細見 啓三
退職 畠 月子

VII 組織規定

文部省組織令（抜粋）

昭和59年6月28日 政令第227号

第2章 文化庁

第3節 施設等機関

（施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。
(中略)

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は文部省令で定める。

文部省設置法施行規則（抜粋）

昭和28年1月13日 文部省令第2号

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるところとする。

| 名 称 | 位 置 |
|------------|-------------|
| 東京国立文化財研究所 | 東 京 都 台 東 区 |
| 奈良国立文化財研究所 | 奈 良 県 奈 良 市 |

第2款 奈良国立文化財研究所 (所長)

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛島資料館及び埋蔵文化財センターを置く。
(庶務部の分課及び事務)

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

一 庶務課

二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。
一 職員の人事に関する事務を処理すること。

二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四 この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しな

- い事務を処理すること。
- 3 会計課においては、次の事務をつかさどる。
- 一 予算に関する事務を処理すること。
 - 二 経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。
 - 三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。
- 五 庁内の取締りに関すること。
- 第126条 削除
(建造物研究室等の事務)
- 第127条 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- (平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)
- 第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。
- 2 前項の各室においては、平城宮跡に關し、次項から第6項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。
- 3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物(木簡を除く。)の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- (藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務)
- 第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。
- 2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に關し、次項から第5項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。
- 3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物(木簡を除く。)の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- (飛鳥資料館)
- 第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に關し、国民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の觀覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行ふ。
- (飛鳥資料館の館長)
- 第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。
- 2 館長は、館務を掌理する。
- (飛鳥資料館の二室及び事務)
- 第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。
- 2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。
- 3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。
- 一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。
 - 二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。
 - 三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。
- (埋蔵文化財センター)
- 第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。
- 一 埋蔵文化財に關し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。
 - 二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行うこと。
 - 三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。
 - 四 埋蔵文化財に関する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。
- (埋蔵文化財センターの長)
- 第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。
- 2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。
- (埋蔵文化財センターの内部組織)
- 第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。
- (教務室の事務)
- 第136条 教務室においては、研修の実施に關する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に關する事務をつかさどる。
- (研究指導部の六室及び事務)
- 第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。
- 2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務(他の室の所掌に属するものを除く。)をつかさどる。
- 3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務(発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学

研究室の所掌に属するものを除く。)をつかさどる。
4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

(情報資料室の事務)

第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

(客員研究員)

第139条 奈良国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2 客員研究員は、所長の命を受け、奈良国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3 客員研究員は、非常勤とする。

改 正 昭和43年6月15日 文部省令第20号
昭和45年4月17日 文部省令第11号
昭和48年4月12日 文部省令第6号
昭和49年4月11日 文部省令第10号
昭和50年4月2日 文部省令第13号
昭和51年5月10日 文部省令第16号
昭和52年4月18日 文部省令第10号
昭和53年4月5日 文部省令第19号
昭和53年9月9日 文部省令第33号
昭和55年4月5日 文部省令第14号
昭和55年6月25日 文部省令第23号
昭和58年10月1日 文部省令第25号
昭和59年6月30日 文部省令第37号
昭和63年4月8日 文部省令第12号

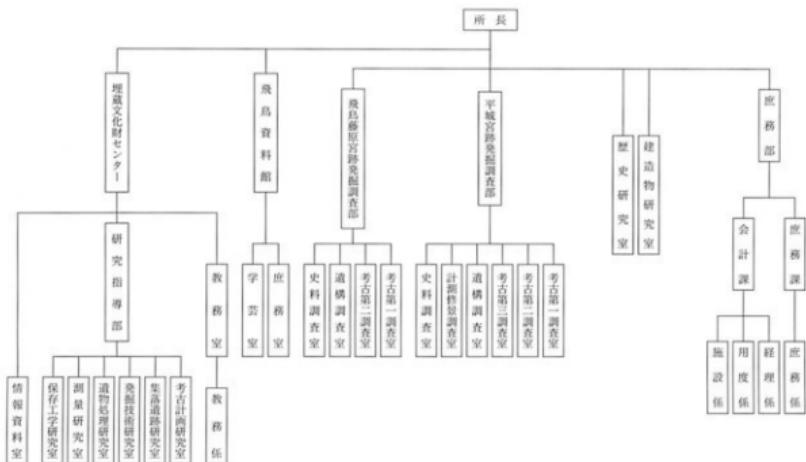
職 員 (1994年7月1日現在)

| 所 属 | 氏 名 | 官 職 | 担 当 |
|-------------|-------|---------------|-------|
| 田 中 球 | 文部技官 | 所 長 | |
| 施 設 藤原事務 | 板垣 義信 | 文部事務官 部 長 | |
| | 馬場祐次朗 | 文部事務官 課 長 | |
| | 田中日出男 | 文部事務官 課 長補佐 | |
| | 西田健三 | 文部事務官 専門職員 | 平城事務 |
| | 金野忠司 | 文部事務官 座務係長 | |
| | 桑原隆佳 | 文部事務官 | 庶務人事 |
| | 港 悅子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | 大西和子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | 戸戸雅子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | 福本良子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| 圖 書 資 料 | 新宮恵子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | 藤原伊奈美 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | 本中宜代 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| | 中川かよ子 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| | 中垣耕美 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| | 石川千恵子 | 研究補佐員 | 公開 |
| | 奥村 功 | 技能補佐員 | 保守 |
| | 萩原青都 | 文部事務官 課 長 | |
| | 福田八郎 | 文部事務官 課 長補佐 | |
| | 渡邊東史 | 文部技官 専門職員 | 施設 |
| 計 部 | 坂上定敬 | 文部事務官 専門職員 | 藤原事務 |
| | 櫻井雅樹 | 文部事務官 課 長 | |
| | 年梅 徹 | 文部事務官 経理係長 | |
| | 北川博之 | 文部事務官 経理主任 | |
| | 森本はぎ子 | 事務補佐員 | 経理 |
| | 小林玉美 | 事務補佐員 | 経理 |
| | 小林雅文 | 文部事務官 用度係長 | 理 |
| | 森 昭彦 | 文部事務官 用度主任 | 理 |
| | 飯田信男 | 文部技官 車庫長 | 自動車運転 |
| | 上村 敏子 | 事務補佐員 | 用度 |
| 調 査 室 | 幸田恵里子 | 事務補佐員 | 用度 |
| | 坂上定敬 | 文部技官 施設係長(兼任) | |
| | 松井敏夫 | 文部技官 施設主任(命) | |
| | 上原内茂樹 | 文部技官 | 施設 |
| | 永井和代 | 事務補佐員 | 施設 |
| | 吉田昌代 | 事務補佐員 | 施設 |
| | 中埜 博 | 技術補佐員 | 施設 |
| | 天田起雄 | 文部技官 室 長 | 建築 |
| | 浅川滋男 | 文部技官(併任) | 建築 |
| | 小野健吉 | 文部技官(併任) | 遺跡庭園 |
| 建 造 物 研 究 室 | 島田敏男 | 文部技官(併任) | 建築 |
| | 藤田豊児 | 文部技官(併任) | 建築 |
| | 綾村 宏 | 文部技官 室 長 | 歴史 |
| | 西口壽生 | 文部技官(併任) | 考古 |
| | 橋本義則 | 文部技官(併任) | 古史 |
| | 森本 晋 | 文部技官(併任) | 考古 |
| 歴 史 研 究 室 | 渡邊晃宏 | 文部技官(併任) | 歴史 |
| | 臼杵照 | 文部技官(併任) | 考古 |

| 所属 | 氏名 | 官職 | 担当 | 所属 | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---------|-------|------------|----------|---------|---------|----------------|----------|
| 考古第一調査室 | 町田 章 | 文部技官 部長 | | 考古第一調査室 | 牛川喜幸 | 文部技官 部長 | 古 古 古 真 |
| | 小林謙一 | 文部技官 室長 | 古 古 古 古 | | 黒崎 直 | 文部技官 室長 | 考 考 考 写 |
| | 白杵 熊 | 文部技官 | 考 考 考 | | 深澤芳樹 浩 | 文部技官 (併) | 古 古 |
| | 加藤真二 | 文部技官 | 考 考 考 | | 花谷 井上直夫 | 文部技官 (併) | 古 古 |
| | 小池伸彦 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 大盛山 淳 | 文部技官 室長 | 古 古 |
| | 毛利光俊彦 | 文部技官 室長 | 古 古 古 古 | | 次山口 寿生 | 文部技官 (併) | 古 古 |
| | 翼淳一郎 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 肥塚隆保 | 文部技官 (併) | 古 古 保存科学 |
| | 杉山 洋 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 金子裕之 | 文部技官 室長 | 古 古 築 |
| | 玉田芳英 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 上原真人 | 文部技官 (併) | 古 古 築 |
| | 山崎信二 | 文部技官 室長 | 古 古 古 古 | | 島田敏男 | 文部技官 (併) | 古 古 築 |
| 考古第二調査室 | 岸本直文 | 文部技官 | 任) 考 考 考 | 考古第二調査室 | 川越俊一 | 文部技官 室長 | 古 史 古 |
| | 岩永省三 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 橋本義則 | 文部技官 (併) | 古 史 古 |
| | 小澤 稔 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 佐川正敏 | 文部技官 (併) | 古 史 古 |
| | 山岸常人 | 文部技官 室長 | 建 建 建 建 | | 西口壽生 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| | 藤田豊見 | 文部技官 | 任) 考 考 考 | | 肥塚隆保 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| 考古第三調査室 | 長尾 充 | 文部技官 | 任) 考 考 考 | 考古第三調査室 | 上原真人 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| | 浅川滋男 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 深澤芳樹 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| | 高瀬要一 | 文部技官 室長 | 道路庭園 | | 橋本義則 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| | 内田和伸 | 文部技官 | 任) 考 考 考 | | 佐川正敏 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| 考古第四調査室 | 小野健吉 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | 考古第四調査室 | 花谷 淳 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| | 館野和己 | 文部技官 室長 | 史 史 史 史 | | 島田敏男 | 文部技官 主任研究官 | 古 史 古 |
| | 寺崎保広 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 櫻井雅樹 | 文部事務官 事務統括(併任) | 古 史 古 |
| | 岩永省三 | 文部技官 (併) | 任) 考 考 考 | | 吉岡和子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 杉山 洋 | 文部技官 主任研究官 | 古 古 古 古 | | 松本誠 | 技能補佐員 | 事務 |
| 考古第五調査室 | 小野健吉 | 文部技官 主任研究官 | 古 古 古 古 | 考古第五調査室 | 木本寅志 | 技能補佐員 | 事務 |
| | 浅川滋男 | 文部技官 主任研究官 | 古 古 古 古 | | 宮川伴司 | 研究補佐員 | 事務 |
| | 小池伸彦 | 文部技官 主任研究官 | 古 古 古 古 | | 伊藤武 | 研究補佐員 | 事務 |
| | 小澤 稔 | 文部技官 主任研究官 | 古 古 古 古 | | 村田和弘 | 研究補佐員 | 事務 |
| | 玉田芳英 | 文部技官 主任研究官 | 古 古 古 古 | | 荒木浩司 | 研究補佐員 | 事務 |
| 考古第六調査室 | 渡邊晃宏 | 文部技官 主任研究官 | 古 古 古 古 | 考古第六調査室 | 伊藤敏郎 | 研究補佐員 | 事務 |
| | 西田健三 | 文部事務官 (併) | 任) 考 考 考 | | 羽鳥幸一 | 研究補佐員 | 事務 |
| | 佃 幹雄 | 文部技官 専門員 | 職員 | | 田中 球 | 館長(事務取扱) | 守備 |
| | 井上直夫 | 文部技官 專門員 | 職員 | | 家村庸男 | 文部技官 室長 | 備務 |
| | 牛鶴 茂 | 文部技官 專門員 | 職員 | | 中西建夫 | 文部事務官 庶務主任 | 務務 |

| 所 属 | 氏 名 | 官 职 | 担 当 |
|-----|---|---|--------------------------|
| 埋 埋 | 河原純之 西影恵二 川島保夫 岩永忠子 牛嶋茂 猪熊兼勝 | 文部技官 文部事務官 文部事務官 事務補佐員 文部技官(併任) 文部技官 | センター長 室長 教務係長 長 |
| 研 究 | 松沢順生 立木修 | 文部技官 文部技官(併任) | 室長 長 |
| 文 化 | 山中敏史 西村康 松井章 | 文部技官 文部技官 | 室 (併任) |
| 指 指 | | | |

| 所 | 属 | 氏名 | 官職 | 担當 |
|------------------|----------------------------|--------------------------------|--------------------------------------|--------------------------|
| 財 政 部 門 | 遺物 處理 研究室 | 沢田正昭 村上 隆 | 文部技官 室 文部技官(併任) | 保存科学 |
| | 測量 研究室 | 木全敬蔵 光谷拓実 松井 章 | 文部技官 室 文部技官(併任) 文部技官(併任) | 測量 道路庭園 考古 |
| | 保存 工学 研究室 | 加藤允彦 内田昭人 | 文部技官 室 文部技官(併任) | 道路庭園 建築 |
| | 谷 内 立 松 村 森 | 光谷拓実 内田昭人 人修 井隆 上晋 | 文部技官 文部技官 文部技官 文部技官 文部技官 | 道路庭園 建築 考古 保存科学 |
| | 情 報 處 理 室 | 伊東太作 森本 晋 | 文部技官 室 文部技官(併任) | 測量 考古 |





本館配置図

- 1 本館
- 1 業務部及び図書資料室
- 2 隅長室及び平城宮跡発掘調査部
- 3 建造物研究室、歴史研究室及び埋蔵文化財センター
- 4 埋蔵文化財センター研修棟
- 5 車庫
- 6 自転車置場
- 7 正門
- 8 通用門
- 9 非常口

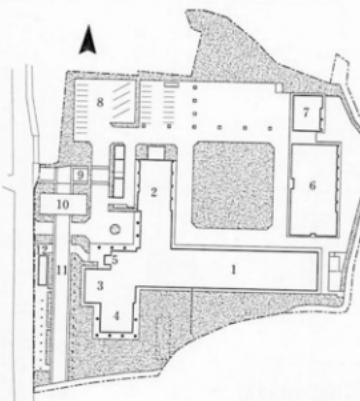


平城宮跡資料館配置図

- 1 平城宮跡資料館
 - (1) 展示室 (3) 備品室
 - (2) 講堂 (4) 写場
 - 2 第1収蔵庫
 - 3 第2収蔵庫
 - 4 第3収蔵庫
 - 5 第4収蔵庫
 - 6 第5収蔵庫
 - 7 大型遺物処理棟
 - 8 遺物解析処理棟
 - 9 便所
 - 10 整備棟
 - 11 資材保管加工棟
 - 12 収蔵庫
 - 13 佐伯門跡
-
- 1 遺構展示館
 - 2 展示館
 - 3 遺構展示館
 - 4 管理棟
 - 5 築地解説復原
 - 6 増築基壇復原
 - 7 東大溝復原
 - 8 便所
 - 9 パーゴラ
 - 10 案内広場
 - 11 防災設施室
 - 12 宮内省北門・築地解説原
 - 13 宮内省復原建物(南殿)
 - 14 宮内省復原建物(南殿第2段)
 - 15 宮内省復原建物(西北殿)
 - 16 宮内省復原建物(西南殿)



平城宮跡遺構展示館配置図



飛鳥宮跡発掘調査部配置図

- 1 整理研究棟
- 2 管理棟
- 3 展示室
- 4 講堂
- 5 入口
- 6 収蔵庫棟
- 7 保存科学棟
- 8 駐車場
- 9 六条寺跡路跡
- 10 建物跡
- 11 東寺跡訪問路跡
- 12 自転車置場



飛鳥資料館配置図

- 1 第1展示室
- 2 第2展示室
- 3 講堂
- 4 ロビー
- 5 リファレンス
- 6 便所
- 7 光庭
- 8 光庭
- 9 管理棟
- 10 正門
- 11 射札所
- 12 展示解説室
- 13 パーゴラ
- 14 機械室
- 15 通用門
- 16 頭骨山石
- 17 酒船石
- 18 石人像
- 19 山田寺塔心礎
- 20 猿石
- 21 人頭石
- 22 法輪寺塔心礎

Table of Contents

| | Page |
|--|------|
| Preface | 1 |
| Excavations in the Asuka Area | 2 |
| Excavations in the Fujiwara Palace and Capital Sites | 5 |
| Excavations in the Nara Palace and Capital Sites | 13 |
| Revision in the Spatial Designation of Excavation Units for the Asuka and Fujiwara Areas | 26 |
| Investigation into Roof Tiles of Yamada-dera Temple | 28 |
| Excavation of Flush Latrine at the Fujiwara Capital | 30 |
| Introduction of Donated Sue-type Pottery | 31 |
| Two-and Three-colour Glazed Pottery Recovered from Hime-dera Temple in the Nara Capital | 32 |
| Microscopic Observation on Thin Cut Section of Gold-and Silver-Octagonal Lacquer Bar Ware | |
| Recovered from Eastern Main Ditch (SD2700) in the Nara Palace | 33 |
| Inscription and Incision Pottery Recovered from the Nara Palace and Capital Sites | 34 |
| Wooden Tablets Recovered from the Site of Prince Nagaya's Mansion (2) | 35 |
| Wooden Tablets Recovered from the Nara Palace and Capital Sites during 1983 | 36 |
| Catalogue of AZEKURA-SHYOGYO Sutras Owned by Ishiyama-dera Temple | 38 |
| Investigation of Metal Vessels Owned by Horyu-ji Temple (1) | 42 |
| Investigation on Japanese Style Modern Historic Buildings in Shiga Prefecture (2) | 44 |
| Analysis of the Quality of the Material of the Ancient Glass—Alkali Silicate Glass during Yayoi Period | 46 |
| The Study of the Ancient Metalworking Observed from the Remains of Asuka-ike Site | 48 |
| Collection of Comparative Stone Sample in order to Identify the Ancient Mining Location (1) | |
| —Asuka, Fujiwara Areas and Their Vicinity— | 49 |
| Dendrochronology (II) | 53 |
| Analysis of Faunal Remains (10) | 54 |
| Landscape Architecture of the Nara and Fujiwara Palace Sites | 55 |
| New Facilities of the Conservation Science Laboratory | 62 |
| Renovation of Asuka Historical Museum | 64 |
| Reconsideration of Shishimon Gate of the Nara Palace | 66 |
| Construction of the Model of the Former Great Hall of State Area | 68 |
| Fundamental Study of the Former Great Hall of State Area for Landscape Architecture | 73 |
| Joint Research for the Restoration of Angkor Cultural Heritage | 74 |
| Investigation of Jiaobe in China | 75 |
| Investigation of the Roof Tiles during Shia and Han Dynasties in China | 78 |
| Investigation on the Restoration and Presentation of Cultural Heritage in Europe | 79 |
| Public Lectures in 1993 | 80 |
| Other Special Research Activities | 81 |
| Organization and Activities of Nabunken during 1993 | 83 |

ANNUAL BULLETIN
OF
THE NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE
1994

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1994